910.28-Mu71-2ウ
1200500754607
910.28
Mu71
2ウ
×複写

始

24.10.26

57
910.28
Mu.71
2

室生犀星編

芥川龍之介の作と人

下卷

現代叢書
41

953
165

目次

「羅生門」「雛」に就て……三
羅生門……六
雛……一七
「齒車」に就て……三九
齒車……四三
「玄鶴山房」「秋」「トロッコ」「蜜柑」「子供の病氣」「お時儀」「點鬼簿」の諸作に就て……九一
玄鶴山房……一〇〇
秋……一二四
トロッコ……一四四
蜜柑……一五三

沼地……一五九
子供の病氣……一六三
お時儀……一七三
點鬼簿……一八一
人物記に就て……一九〇
人物記……一九一
豐島與志雄氏……一九一
菊池寛氏……一九三
佐藤春夫氏……一九五
久米正雄氏……一九六
菊池寛氏又……一九七
谷崎潤一郎氏……二〇〇
宇野浩二氏……二〇二
瀧田哲太郎氏……二〇三

夏目先生と瀧田さん……二〇五
手紙（夏目金之助宛）……二〇七
小品……二一二
澈石山房の秋……二一三
澈石山房の冬……二一五
日記……二一九
京都日記……二二九

芥川龍之介の人と作　下卷

「羅生門」「雛」に就て

處女作を發表した前後一二年の間を私は處女作時代と呼びたい、大抵の作家は處女作を書いた二三年の間には傑れたものを書いてゐるし、その生涯のなかでも、決して動かしがたい地盤を築くだけの作品を表はしてゐる。そして大抵の處女作といふものは後代にこれを見ると、作家自身としてはその稚拙さに汗ばむやうな氣持になるものである。人が褒めれば褒められるが故に、一層、氣恥かしい氣がするものだ。

「羅生門」一篇は處女作時代の最初の小說であり、そして今日から見れば二十二年以前の作品になるのである。自然主義文學の華やかであつた當時の文壇に、かゝる用意周到な磨きのかかつた小說を投げ出した一無名の作家が、生活の垢やゴミ臭い作品の多い騷壇に獨自の綺麗を忽ちの間に認められたのは、當然であつたとさへ思はれるのだ。その凝つた生地に凝つた彩筆を揮ひ、やや高踏的な睨み方と、若くして玲瓏たる才能を示した點、すでにただものに非ざる彼を人々に印象させたのである。

併乍、二十二年後の今日から見れば、これは美しい一枚の繪であつて、人生とはかかはりのあ

るものではない。殆、この小説にあるものは若々しい構へ方であつて、その構へこそ當時にあつて新鮮な生々しさを文壇に與へたのである。文壇そのものも何か埃ぽい感じが深かつた時代でもあつたのだ。

越えて六年の後に「藪の中」が書かれてゐた。

この六年間にも彼は「物語」と「筋」と「古い材料」を生かすことに、倦むことを知らなかつた。さういふ彼に次第にリアリズムの鋒先が輝き出してゐたのである。遊びがうしろずさりして行つたのだ。「藪の中」は彼の凡ゆる作品を通じて最もらしい自然に觸れやうとした試みでもあつた。當時、この「藪の中」は非常に評判が宜かつたし、私もやつと小説を書き出した時分だつたので、この作品の烈しい迫力に舌を卷いて讀んだものであつた。このなかにある痺れたやうな美しさこそ、芥川君がいつも睨んでゐて何度か取組もうとしたものであつた。「南京の基督」の悲しい物語にも、かれは邪氣ない、しかも慘酷なゆめを描いてゐた。「藪の中」にある烈しい遲しさこそ、かれが今日まで生きてゐて書いてゐたとすれば、恐るべき長篇の主流をなすべき題材ではなかつたかと思ふのだ。

「雛」はいま讀みかへして見ても、美しい物語であつた。私は十何年前にこの「雛」をよんであまりにきちんとした作品の前に、いささか畏まいるやうな氣がした。作品それ自身よりもこれ

を書いてゐる芥川君の机のまはりにある清いものが感じられる。このごろはことに芥川君のものを讀むと、清さ、はなやかさ、さびしさが折かさなつて來る。私はそれを愛しいつくしむ。戰爭があつてから彼のものを讀むことは、ときに、反對に心のしまりが感じられ、藥のやうにとをとく思はせる。よい作家といふものはどういふ時代へも多少の呼びかゝりと、つながりを持ち、そしてともにその底をおなじくしてゐるものだ。

ことに彼の日本的なるものゝ美しさは、もつと注意して我々は汲みとらねばならぬ、性格的であつた日本的なるもろゆる作品の構圖や精神は筆をあらためて書きたいと思つてゐる。

羅生門

或日の暮方の事である。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待つてゐた。

廣い門の下には、この男の外に誰もゐない。唯、所々丹塗の剝げた、大きな圓柱に、蟋蟀が一匹とまつてゐる。羅生門が、朱雀大路にある以上は、この男の外にも、雨やみをする市女笠や烏帽子が、もう二三人はありさうなものである。それが、この男の外には誰もゐない。

何故かと云ふと、この二三年、京都には、地震とか辻風とか火事とか饑饉とか云ふ災がつゞいて起つた。そこで洛中のさびれ方は一通りではない。舊記によると、佛像や佛具を打碎いて、その丹がついたり、金銀の箔がついたりした木を、路ばたにつみ重ねて、薪の料に賣つてゐたと云ふ事である。洛中がその始末であるから、羅生門の修理などは、元より誰も捨てゝ顧る者がなかつた。するとその荒れ果てたのをよい事にして、狐狸が棲む。盜人が棲む。とうとうしまひには、引取り手のない死人を、この門へ持つて來て、棄てて行くと云ふ習慣さへ出來た。そこで、日の目が見えなくなると、誰でも氣味を惡るがつて、この門の近所へは足ぶみをしない事になつてしまつたのである。

その代り又鴉が何處からか、たくさん集つて來た。晝間見ると、その鴉が何羽となく輪を描いて、高い鴟尾のまはりを啼きながら、飛びまはつてゐる。殊に門の上の空が、夕燒けであかくなる時には、それが胡麻をまいたやうにはつきり見えた。鴉は、勿論、門の上にある死人の肉を、啄みに來るのである。――尤も今日は、刻限が遲いせゐか、一羽も見えない。唯、所々、崩れかかつた、さうしてその崩れ目に長い草のはえた石段の上に、鴉の糞が、點々と白くこびりついてゐるのが見える。下人は七段ある石段の一番上の段に、洗ひざらした紺の襖の尻を据ゑて、右の頰に出來た、大きな面皰を氣にしながら、ぼんやり、雨のふるのを眺めてゐた。

作者はさつき、「下人が雨やみを待つてゐた」と書いた。しかし、下人は雨がやんでも、格別どうしようと云ふ當てはない。ふだんなら、勿論、主人の家へ歸る可き筈である。所がその主人からは、四五日前に暇を出された。前にも書いたやうに、當時京都の町は一通りならず衰微してゐた。今この下人が、永年、使はれてゐた主人から、暇を出されたのも、實はこの衰微の小さな餘波に外ならない。だから「下人が雨やみを待つてゐた」と云ふよりも「雨にふりこめられた下人が、行き所がなくて、途方にくれてゐた」と云ふ方が、適當である。その上、今日の空模樣も少からず、この平安朝の下人の Sentimentalisme に影響した。申の刻下りからふり出した雨は、未に上るけしきがない。そこで、下人は、何を措いても差當り明日の暮しをどうにかしようとし

て――云はゞどうにもならない事を、どうにかしようとして、とりとめもない考へをたどりながら、さつきから朱雀大路にふる雨の音を聞くともなく聞いてゐたのである。

雨は、羅生門をつゝんで、遠くから、さあつと云ふ音をあつめて來る。夕闇は次第に空を低くして、見上げると、門の屋根が、斜につき出した甍の先に、重たくうす暗い雲を支へてゐる。

どうにもならない事を、どうにかする爲には、手段を選んでゐる遑はない。選んでゐれば、築土の下か、道ばたの土の上で、饑死をするばかりである。さうして、この門の上へ持つて來て、犬のやうに棄てられてしまふばかりである。選ばないとすれば――下人の考へは、何度も同じ道を低徊した揚句に、やつとこの局所へ逢着した。しかし、この「すれば」は、何時までたつても、結局「すれば」であつた。下人は、手段を選ばないといふ事を肯定しながらも、この「すれば」のかたをつける爲に、當然、その後に來る可き「盜人になるより外に仕方がない」と云ふ事を、積極的に肯定する丈の、勇氣が出ずにゐたのである。

下人は、大きな嚏をして、それから、大儀さうに立上つた。夕冷えのする京都は、もう火桶が欲しい程の寒さである。風は門の柱と柱との間を、夕闇と共に遠慮なく、吹きぬける。丹塗の柱にとまつてゐた蟋蟀も、もうどこかへ行つてしまつた。

下人は、頸をちぢめながら、山吹の汗衫に重ねた、紺の襖の肩を高くして門のまはりを見まはした。雨風の患のない、人目につかゝる惧のない、一晩樂にねられさうな所があれば、そこでともかくも、夜を明かさうと思つたからである。すると、幸門の上の樓へ上る、幅の廣い、これも丹を塗つた梯子が眼についた。上なら、人がゐたにしても、どうせ死人ばかりである。下人はそこで、腰にさげた聖柄の太刀が鞘走らないやうに氣をつけながら、藁草履をはいた足を、その梯子の一番下の段へふみかけた。

それから、何分かの後である。羅生門の樓の上へ出る、幅の廣い梯子の中段に、一人の男が、猫のやうに身をちぢめて、息を殺しながら、上の容子を窺つてゐた。樓の上からさす火の光が、かすかに、その男の右の頬をぬらしてゐる。短い鬚の中に、赤く膿を持つた面皰のある頬である。下人は、始めから、この上にゐる者は、死人ばかりだと高を括つてゐた。それが、梯子を二三段上つて見ると、上では誰か火をともして、しかもその火を其處此處と動かしてゐるらしい。これは、その濁つた、黄いろい光が、隅々に蜘蛛の巣をかけた天井裏に、搖れながら映つたので、すぐにそれと知れたのである。この雨の夜に、この羅生門の上で、火をともしてゐるからは、どうせ唯の者ではない。

下人は、守宮のやうに足音をぬすんで、やつと急な梯子を、一番上の段まで這ふやうにして上りつめた。さうして體を出來る丈、平にしながら、頸を出來る丈、前へ出して、恐る恐る、樓の

内を覗いて見た。

見ると、樓の内には、噂に聞いた通り、幾つかの死骸が、無造作に棄てゝあるが、火の光の及ぶ範圍が、思つたより狹いので、數は幾つともわからない。唯、おぼろげながら、知れるのは、その中に裸の死骸と、着物を着た死骸とがあるといふ事である。勿論、中には女も男もまじつてゐるらしい。さうして、その死骸は皆、それが、嘗、生きてゐた人間だと云ふ事實さへ疑はれる程、土を捏ねて造つた人形のやうに、口を開いたり手を延ばしたりして、どろどろ床の上にころがつてゐた。しかも、肩とか胸とかの高くなつてゐる部分に、ぼんやりした火の光をうけて、低くなつておる部分の影を一層暗くしながら、永久に啞の如く默つてゐた。

下人は、それらの死骸の腐爛した臭氣に思はず、鼻を掩つた。しかし、その手は、次の瞬間には、もう鼻を掩ふ事を忘れてゐた。或る強い感情が、殆恐この男の嗅覺を奪つてしまつたからである。

下人の眼は、その時、はじめて其死骸の中に蹲つてゐる人間を見た。檜皮色の着物を着た、背の低い、痩せた、白髮頭の、猿のやうな老婆である。その老婆は、右の手に火をともした松の木片を持つて、その死骸の一つの顏を覗きこむやうに眺めてゐた。髮の毛の長い所を見ると、多分女の死骸であらう。

下人は、六分の恐怖と四分の好奇心とに動かされて、暫時は呼吸をするのさへ忘れてゐた。舊記の記者の語を借りれば、「頭身の毛も太る」やうに感じたのである。すると老婆は、松の木片を、床板の間に挿して、それから、今まで眺めてゐた死骸の首に兩手をかけると、丁度、猿の親が猿の子の虱をとるやうに、その長い髮の毛を一本づつ拔きはじめた。髮は手に從つて拔けるらしい。

その髮の毛が、一本づつ拔けるのに從つて、下人の心からは、恐怖が少しづつ消えて行つた。さうして、それと同時に、この老婆に對するはげしい憎惡が、少しづつ動いて來た。――いや、この老婆に對すると云つては、語弊があるかも知れない。寧、あらゆる惡に對する反感が、一分毎に強さを增して來たのである。この時、誰かがこの下人に、さつき門の下でこの男が考へてゐた、饑死をするか盜人になるかと云ふ問題を、改めて持出したら、恐らく下人は、何の未練もなく、饑死を選んだ事であらう。それほど、この男の惡を憎む心は、老婆の床に挿した松の木片のやうに、勢よく燃え上り出してゐたのである。

下人には、勿論、何故老婆が死人の髮の毛を拔くかわからなかつた。從つて、合理的には、それを善惡の何れに片づけてよいか知らなかつた。しかし下人にとつては、この雨の夜に、この羅生門の上で、死人の髮の毛を拔くと云ふ事が、それ丈で既に許す可らざる惡であつた。勿論、下

人は、さつき迄自分が、盜人になる氣でゐた事なぞは、とうに忘れてゐるのである。

そこで、下人は、兩足に力を入れて、いきなり、梯子から上へ飛び上つた。さうして聖柄の太刀に手をかけながら、大股に老婆の前へ歩みよつた。老婆が驚いたのは云ふ迄もない。

老婆は、一目下人を見ると、まるで弩にでも彈かれたやうに、飛び上つた。

「おのれ、どこへ行く。」

下人は、老婆が死骸につまづきながら、慌てふためいて逃げようとする行手を塞いで、かう罵つた。老婆は、それでも下人をつきのけて行かうとする。下人は又、それを行かすまいとして、押しもどす。二人は死骸の中で、暫、無言のまゝ、つかみ合つた。しかし、勝敗は、はじめからわかつてゐる。下人はとうとう、老婆の腕をつかんで、無理にそこへ扭ぢ倒した。丁度、鶏の脚のやうな、骨と皮ばかりの腕である。

「何をしてゐた。云へ。云はぬと、これだぞよ。」

下人は、老婆をつき放すと、いきなり、太刀の鞘を拂つて、白い鋼の色をその眼の前へつきつけた。けれども、老婆は默つてゐる。兩手をわなわなふるはせて、肩で息を切りながら、眼を、眼球が眶の外へ出さうになる程、見開いて、啞のやうに執拗く默つてゐる。これを見ると、下人は始めて明白にこの老婆の生死が、全然、自分の意志に支配されてゐると云ふ事を意識した。さ

うしてこの意識は、今まではげしく燃えてゐた憎惡の心を、何時の間にか冷ましてしまつた。後に殘つたのは、唯、或仕事をして、それが圓滿に成就した時の、安らかな得意と滿足とがあるばかりである。そこで、下人は、老婆を見下しながら、少し聲を柔げてかう云つた。

「己は檢非違使の廳の役人などではない。今し方この門の下を通りかゝつた旅の者だ。だからお前に繩をかけて、どうしようと云ふやうな事はない。唯、今時分この門の上で、何をして居たのだか、それを己に話しさへすればいゝのだ。」

すると、老婆は、見開いてゐた眼を、一層大きくして、ぢつとその下人の顏を見守つた。眶の赤くなつた、肉食鳥のやうな、鋭い眼で見たのである。それから、皺で、殆、鼻と一つになつた脣を、何か物でも嚙んでゐるやうに動かした。細い喉で、尖つた喉佛の動いてゐるのが見える。その時、その喉から、鴉の啼くやうな聲が、喘ぎ喘ぎ、下人の耳へ傳はつて來た。

「この髪を拔いてな、この髪を拔いてな、髢にせうと思うたのぢや。」

下人は、老婆の答が存外、平凡なのに失望した。さうして失望すると同時に、又前の憎惡が、冷な侮蔑と一しよに、心の中へはいつて來た。すると、その氣色が、先方へも通じたのであらう。老婆は、片手に、まだ死骸の頭から奪つた長い拔け毛を持つたなり、蟇のつぶやくやうな聲で、ロどもりながら、こんな事を云つた。

「成程な、死人の髪の毛を抜くと云ふ事は、何ぼう悪い事かも知れぬ。ぢやが、こゝにゐる死人どもは、皆、その位な事を、されてもいい人間ばかりだぞよ。現在、わしが今、髪を抜いた女などはな、蛇を四寸ばかりづつに切つて干したのを、干魚だと云うて、太刀帶の陣へ賣りに往んだわ、疫病にかかつて死ななんだら、今でも賣りに往んでゐた事であろ。それもよ、この女の賣る干魚は、味がよいと云うて、太刀帶どもが、缺かさず菜料に買つてゐたさうな。わしは、この女のした事が悪いとは思うてゐぬ。せねば、饑死をするのぢやて、仕方がなくした事であろ。されば、今又、わしのしてゐた事も悪い事とは思はぬぞよ。これとてもやはりせねば、饑死をするぢやて、仕方がなくする事ぢやわいの。ぢやて、その仕方がない事を、よく知つてゐたこの女は、大方わしのする事も大目に見てくれるであろ。」

老婆は、大體こんな意味の事を云つた。

下人は、太刀を鞘にをさめて、その太刀の柄を左の手でおさへながら、冷然として、この話を聞いてゐた。勿論、右の手では、赤く頬に膿を持つた大きな面皰を氣にしながら、聞いてゐるのである。しかし、之を聞いてゐる中に、下人の心には、或勇氣が生まれて來た。それは、さつき門の下で、この男には缺けてゐた勇氣である。さうして、又さつきこの門の上へ上つて、この老婆を捕へた時の勇氣とは、全然、反對な方向に動かうとする勇氣である。下人は、饑死をするか

盜人になるかに、迷はなかつたばかりではない。その時のこの男の心もちから云へば、饑死などと云ふ事は、殆、考へる事さへ出來ない程、意識の外に追ひ出されてゐた。

「きつと、さうか。」

老婆の話が完ると、下人は嘲るやうな聲で念を押した。さうして、一足前へ出ると、不意に右の手を面皰から離して老婆の襟上をつかみながら、噛みつくやうにかう云つた。

「では、己が引剝をしようと恨むまいな。己さうしなければ、饑死をする體なのだ。」

下人は、すばやく、老婆の着物を剝ぎとつた。それから、足にしがみつかうとする老婆を、手荒く死骸の上へ蹴倒した。梯子の口までは、僅に五歩を數へるばかりである。下人は、剝ぎとつた檜皮色の着物をわきにかかへて、またたく間に急な梯子を夜の底へかけ下りた。

暫、死んだやうに倒れてゐた老婆が、死骸の中から、その裸の體を起したのは、それから間もなくの事である。老婆はつぶやくやうな、うめくやうな聲を立てながら、まだ燃えてゐる火の光をたよりに、梯子の口まで、這つて行つた。さうして、そこから、短い白髪を倒にして、門の下を覗きこんだ。外には、唯、黑洞々たる夜があるばかりである。

下人の行方は誰も知らない。

「羅生門」はその初期の作品に屬し、大正四年「帝國大學」に柳川隆之介の名で發表。大正六年五月、阿蘭陀書房刊行の短篇小說集「羅生門」、選集「沙羅の花」等に收錄さる。

雛

箱を出る顧忘れめや雛二對　　飛村

これは或老女の話である。

……横濱の或亞米利加人へ雛を賣る約束の出來たのは十一月頃のことでございます。紀の國屋と申したわたしの家は親代代諸大名のお金御用を勤めて居りましたし、殊に紫竹とか申した祖父は大通の一人にもなつて居りましたから、雛もわたしのではございますが、中中見事に出來て居りました。まあ、申さば、內裏雛は女雛の冠の瓔珞にも珊瑚がはひつて居りますとか、男雛の鹽瀨の石帶にも定紋と替へ紋とが互違ひに繡ひになつて居りますとか、――さう云ふ雛だつたのでございます。

それさへ賣らうと申すのでございますから、わたしの父、――十二代目の紀の國屋伊兵衛はどの位手もとが苦しかつたか、大抵御推量にもなれるでございませう。何しろ德川家の御瓦解以來、

御用金を下げて下すつたのは加州様ばかりでございます。それも三千兩の御用金の中、百兩しか下げては下さいません。因州様などになりますと、四百兩ばかりの御用金のかたに赤間が石の硯を一つ下すつただけでございました。その上火事には二三度も遇ひますし、蝙蝠傘屋などをやりましたのも皆手遠ひになりますし、當時はもう目ぼしい道具もあらかた一家の口すごしに賣り拂つてゐたのでございます。

其處へ雛でも賣つたらと父へ勸めてくれましたのは丸佐と云ふ骨董屋の、……もう故人になりましたが、禿げ頭の主人でございます。この丸佐の禿げ頭位、可笑しかつたものはございません。と申すのは頭のまん中に丁度按摩膏を貼つた位、入れ墨がしてあるのでございます。これは何でも若い時分、ちよいと禿げを隠す爲に彫らせたのださうでございますが、生憎その後頭の方は遠慮なしに禿げてしまひましたから、この腦天の入れ墨だけ取り殘されることになつたのだとか、當人自身申して居りました。……さう云ふことは兎も角も、父はまだ十五のわたしを可哀さうに思つたのでございませう、度度丸佐に勸められても、雛を手放すことだけはためらつてゐたやうでございます。

それをとうとう賣らせたのは英吉と申すわたしの兄、……やはり故人になりましたが、その頃まだ十八だつた、癇の強い兄でございます。兄は開化人とでも申しませうか、英語の讀本を離し

たことのない政治好きの青年でございました。これが雛の話になると、雛祭などは舊弊だとか、あんな實用にならない物は取つて置いても仕方がないとか、いろいろけなすのでございます。その爲に兄は昔風の母とも何度口論をしたかわかりません。しかし雛を手放しさへすれば、この大歳の凌ぎだけはつけられるのに違ひございませんから、母も苦しい父の手前、さうは強いことばかりも申されなかつたのでございませう。雛は前にも申しました通り、十一月の中旬にはとうとう横濱の亞米利加人へ賣り渡すことになつてしまひました。何、わたしでございますか？　それは駄駄もこねましたが、お轉婆だつたせゐでございませう。その割にはあまり悲しいとも思はなかつたものでございます。父は雛を賣りさへすれば、紫繻子の帶を一本買つてやると申して居りましたから。……

その約束の出來た翌晩、丸佐は横濱へ行つた歸りに、わたしの家へ參りました。

わたしの家と申しましても、三度目の火事に遇つた後は普請もほんたうには參りません。燒け殘つた土藏を一家の住居に、それへさしかけて假普請を見世にしてゐたのでございます。尤も當時は俄仕込みの藥屋をやつて居りましたから、正德丸とか安經湯とか或は又胎毒散とか、――さう云ふ藥の金看板だけは藥箪笥の上に並んで居りました。其處に又無盡燈がともつてゐる、……と申したばかりでは多分おわかりになりますまい。無盡燈と申しますのは石油の代りに種油を使

ふ舊式のランプでございます。可笑しい話でございますが、わたしは未に藥種の匂、――陳皮や大黄の匂がすると、必この無盡燈を思ひ出さずには居られません。現にその晩も無盡燈は藥種の匂の漂つた中に、薄暗い光を放つて居りました。

頭の禿げた丸佐の主人はやつと散切りになつた父と、無盡燈を中に坐りました。

「では確かに半金だけ、……どうかちよいとお檢め下さい。」

時候の挨拶をすませて後、丸佐の主人がとり出したのは紙包みのお金でございます。その日に手つけを貰ふことも約束だつたのでございませう。父は火鉢へ手をやつたなり、何も云はずに時儀をしました。丁度この時でございます。わたしは母の云ひつけ通り、お茶のお給仕に參りました。ところがお茶を出さうとすると、丸佐の主人は大聲で、「そりやあいけません。それだけはいけません。」と、突然かう申すではございませんか？　わたしはお茶がいけないのかと、ちよいと呆氣にもとられましたが、丸佐の主人の前を見ると、もう一つ紙に包んだお金がちやんと出てゐるのでございます。

「これやあほんの輕少だが、志はまあ志だから、……」

「いえ、もうお志は確かに頂きました。がゝこりやあどうかお手もとへ、……」

「まあさ、……そんなに又恥をかかせるもんぢやあない。」

「冗談仰有つちやあいけません。檀那こそ恥をおかかせなさる。何も赤の他人ぢやあなし、大檀那以來お世話になつた丸佐のしたことぢやあどわせんか？　まあ、そんな水つ臭いことを仰有らずに、これだけはそちらへおしまひなすつて下さい。……おや、お孃さん。今晩は、おうおう、今日は蝶蝶髷が大へん綺麗にお出來なすつた！」

わたしは別段何の氣なしに、かう云ふ押し問答を聞きながら、土藏の中へ歸つて來ました。

土藏は十二疊も敷かりませうか？　可也廣うございましたが、簞笥もあれば長火鉢もある、長持もあれば置戸棚もある、――と云ふ體裁でございましたから、ずつと手狹な氣がしました。さう云ふ家財道具の中にも、一番人目につき易いのは都合三十幾つかの總桐の箱でございます。もとより雛の箱と申すことは申し上げるまでもございますまい。これが何時でも引き渡せるやうに、窓したの壁に積んでございました。かう云ふ土藏のまん中に、無盡燈は見世へとられましたから、ぼんやり行燈がともつてゐる、――その昔じみた行燈の光に、母は振り出しの袋を縫ひ、兄は小さい古机に例の英語の讀本か何か調べてゐるのでございます。それには變つたこともございませんが、ふと母の顏を見ると、母は針を動かしながら、伏し眼になつた睫毛の裏に涙を一ぱいためて居ります。

お茶のお給仕をすませたわたしは母に褒めて貰ふことを樂しみに……と云ふのは大袈裟にしろ、

待ち設ける氣もちはございました。其處へこの涙でございませう？　わたしは悲しいと思ふよりも、取りつき端に困つてしまひましたから、出來るだけ母を見ないやうに、兄のゐる側へ坐りました。すると急に眼を擧げたのは兄の英吉でございます。兄はちよいとけげんさうに母とわたしとを見比べましたが、忽ち妙な笑ひ方をすると、又横文字を讀み始めました。わたしはまだこの時位、開花を鼻にかける兄を憎んだことはございません。お母さんを莫迦にしてゐる、――一圖にさう思つたのでございます。わたしはいきなり力一ぱい、兄の背中をぶつてやりました。

「何をする？」

兄はわたしを睨みつけました。

「ぶつてやる！　ぶつてやる！」

わたしは泣き聲を出しながら、もう一度兄をぶたうとしました。その時はもう何時の間にか、兄の癇癖の強いことも忘れてしまつたのでございます。が、まだ擧げた手を下さない中に、兄はわたしの横鬢へぴしやりと平手を飛ばせました。

「わからず屋！」

わたしは勿論泣き出しました。と同時に兄の上にも物差しが降つたのでございませう。兄は直と威丈高に母へ食つてかかりました。母もかうなれば承知しません。低い聲を震はせながら、さ

んざん兄と云ひ合ひました。

さう云ふ口論の間中、わたしは唯悔やし泣きに泣き續けてゐたのでございます。丸佐の主人を送り出した父が無盡燈を持つた儘、見世からこちらへはひつて來る迄は。……いえ、わたしばかりではございません。兄も父の顏を見ると、急に默つてしまひました。口數を利かない父位、わたしはもとより當時の兄にも、恐しかつたものはございませんから。……

その晩雛は今月の末、殘りの半金を受け取ると同時に、あの横濱の亞米利加人へ渡してしまふことにきまりました。何、賣り價でございますか？　今になつて考へますと、莫迦莫迦しいやうでございますが、確か三十圓とか申して居りました。それでも當時の諸式にすると、ずゐぶん高價には違ひございません。

その內に雛を手放す日はだんだん近づいて參りました。わたしは前にも申しました通り、格別それを悲しいとは思はなかつたものでございます。ところが一日一日と約束の日が迫つて來ると、何時か雛と別れるのはつらいやうに思ひ出しました。しかし如何に子供とは申せ、一旦手放すときまつた雛を手放さずにすまうとは思ひません。唯人手に渡す前に、もう一度よく見て置きたい。內裏雛、五人囃し、左近の櫻、右近の橘、雪洞、屏風、蒔繪の道具、――もう一度この土藏の中にさう云ふ物を飾つて見たい、――と申すのが心願でございました。が、性來一徹な父は何度わ

たしにせがまれても、これだけのことを許しませんぞ。「一度手附けをとつたとなりやあ、何處にあらうが人様のものだ。人様のものはいちるもんぢやあない。」――かう申すのでございます。

するともう月末に近い、大風の吹いた日でございます。母は風邪に罹つたせゐか、それとも又下脣に出來た粟粒程の腫物のせゐか、氣持が惡いと申したぎり、朝の御飯も頂きません。わたしと臺所を片づけた後は片手に額を抑へながら、唯ぢつと長火鉢の前に俯向いてゐるのでございます。ところが彼是お午時分、ふと顏を擡げたのを見ると、腫物のあつた下脣だけ、丁度赤いお蔭のやうに腫れ上つてゐるではございませんか？　しかも熱の高いことは妙に輝いた眼の色だけでも、直とわかるのでございます。これを見たわたしの驚きは申す迄もございません。わたしは殆ど無我夢中に、父のゐる見世へ飛んで行きました。

「お父さん！　お母さんが大變ですよ。」

父は、……それから其處にゐた兄も父と一しよに奥へ來ました。が、恐しい母の顏には呆氣にとられたのでございませう。ふだんは物に驚かぬ父さへ、この時だけは茫然としたなり、口も少時は利かずに居りました。しかし母はさう云ふ中にも、一生懸命に微笑しながら、こんなことを申すのでございます。

「何、大したことはありますまい。唯ちよいとこのお出來に爪をかけただけなのですから、……今御飯の支度をします。」

「無理をしちやあいけない。御飯の支度なんぞはお鶴にも出來る。」

父は半ば叱るやうに、母の言葉を遮りました。

「英吉！　本間さんを呼んで來い！」

兄はもうさう云はれた時には、一散に大風の見世の外へ飛び出して居つたのでございます。

本間さんと申す漢法醫、――兄は始終藪醫者などと莫迦にした人でございますが、その醫者も母を見た時には、當惑さうに、腕組みをしました。聞けば母の腫物は面疔だと申すのでございますから。……もとより面疔も手術さへ出來れば、恐しい病氣ではございますまい。が、當時の悲しさには手術どころの騒ぎではございません。唯煎藥を飲ませたり、蛭に血を吸はせたり、――そんなことをするだけでございます。父は毎日枕もとに、本間さんの藥を煎じました。兄も毎日十五錢づつ、蛭を買ひに出かけました。わたしも、……わたしは兄に知れないやうに、つい近所のお稲荷様へお百度を踏みに通ひました。――さう云ふ始末でございますから、雛のことも申しては居られません。いえ、一時わたしを始め、誰もあの壁側に積んだ三十ばかりの總桐の箱には眼もやらなかつたのでございます。

ところが十一月の二十九日、――愈雛と別れると申す一日前のことでございます。わたしは雛

と一しよにゐるのも、今日　最後だと考へると、殆ど矢も楯もたまらない位、もう一度箱が明けたくなりました。が、どんなにせがんだにしろ、父は不承知に違ひありません。すると母に話して貰ふ、――わたしは直にさう思ひましたが、何しろその後母の病氣は前よりも一層重つて居ります。食べ物もおも湯を啜る外は一切喉を通りません。殊にこの頃は口中へも、絶えず血の色を交へた膿がたまるやうになつたのでございます。かう云ふ母の姿を見ると、如何に十五の小娘にもせよ、わざわざ雛を飾りたいなぞとは口へ出す勇氣も起りません。わたしは朝から枕もとに、母の機嫌を伺ひ伺ひ、とうとうお八つになる頃迄は何も云ひ出さずにしまひました。

しかしわたしの眼の前には金網を張つた窓の下に、例の總桐の雛の箱が積み上げてあるのでございます。さうしてその雛の箱は今夜一晩過ごしたが最後、遠い横濱の異人屋敷へ、……ことによれば亞米利加へも行つてしまふのでございます。そんなことを考へると、愈我慢は出來ますまい。わたしは母の眠つたのを幸ひ、そつと見世へ出かけました。見世は日當りこそ惡いものの、土藏の中に比べれば、往來の人通りが見えるだけでも、まだしも陽氣でございます。其處に父は帳合ひを檢べ、兄はせつせつと片隅の藥研に甘草か何かを下して居りました。

「ねえ、お父さん。後生一生のお願ひだから、……」

わたしは父の顏を覗きこみながら、毎時もの頼みを持ちかけました。が、父は承知するどころ

か、相手になる景色もございません。

「そんなことはこの間も云つたぢやあないか。……おい、英吉！　お前は今日は明るい内に、ちよいと丸佐へ行つて來てくれ。」

「丸佐へ？……來てくれと云ふんですか？」

「何、ランプを一つ持つて來て貰ふんだが、……お前、歸りに貰つて來ても好い。」

「だつて丸佐にランプはないでせう？」

父はわたしをそつちのけに、珍しい笑ひ顏を見せました。

「燭臺か何かぢやあるまいし、……ランプは買つてくれつて頼んであるんだ。わたしが買ふよりやあ確だから。」

「ぢやあもう無盡燈はお廢止ですか？」

「あれももうお暇の出し時だらう。」

「古いものはどしどし止めることです。第一お母さんもランプになりやあ、ちつとは氣も晴れるでせうから。」

父はそれぎり元のやうに、又算盤を彈き出しました。が、わたしの念願は相手にされなければされないだけ、強くなるばかりでございます。わたしはもう一度後ろから父の肩を搖すぶりまし

た。

「よう。お父さんつてば。よう。」

「うるさい！」

父は後ろを振り向きもせずに、いきなりわたしを叱りつけました。のみならず兄も意地悪さうに、わたしの顔を睨めて居ります。わたしはすつかり悄氣返つた儘、そつと又奥へ歸つて來ました。すると母は何時の間にか、熱のある眼を擧げながら、顔の上にかざした手の平を眺めてゐるのでございます。それがわたしの姿を見ると、思ひの外はつきりかう申しました。

「お前、何をお父さんに叱られたのだえ？」

わたしは返事に困りましたから、枕もとの羽根楊枝をいぢつて居りました。

「又何か無理を云つたのだらう？……」

母はぢつとわたしを見たなり、今度は苦しさうに言葉を繼ぎました。

「わたしはこの通りの體だしね、何も彼もお父さんがなさるのだから、おとなしくしなけりやあいけませんよ。そりやあお隣の娘さんは芝居へも始終お出でなさるさ。……」

「芝居なんぞ見たくはないんだけれど……」

「いえ、芝居に限らずさ。簪だとか半襟だとか、お前にやあ欲しいものだらけでもね、……」

わたしはそれを聞いてゐる中に、悔やしいのだか悲しいのだか、とうとう涙をこぼしてしまひました。

「あのねえ、お母さん。……わたしはねえ、……何も欲しいものはないんだけれどねえ、唯あのお雛様を賣る前にねえ、……」

「お雛様かえ？　お雛様を賣る前に？」

母は一層大きい眼にわたしの顔を見つめました。

「お雛様を賣る前にねえ、……」

わたしはちよいと云ひ澁りました。その途端にふと氣がついて見ると、何時の間にか後ろに立つてゐるのは兄の英吉でございます。兄はわたしを見下しながら、不相變怪貧にかう申しました。

「わからず屋！　又お雛様のことだらう？　お父さんに叱られたのを忘れたのか？」

「まあ、好いぢやあないか？　そんなにがみがみ云はないでも。」

母はうるささうに眼を閉ぢました。が、兄はそれも聞えぬやうに叱り續けるのでございます。

「十五にもなつてゐる癖に、ちつとは理窟もわかりさうなもんだ？　高があんなお雛様位！惜しがりなんぞするやつがあるもんか？」

「お世話燒きぢや！　兄さんのお雛様ぢやあないぢやあないか？」

わたしも負けずに云ひ返しました。その先は何時も同じでございます。二言三言云ひ合ふ中に、兄はわたしの襟上を掴むと、いきなり共處へ引き倒しました。

「お轉婆！」

兄は母さへ止めなければ、この時もきつと二つ三つは折檻して居つたでございませう。が、母は枕の上に半ば頭を擡げながら、喘ぎ喘ぎ兄を叱りました。

「お鶴が何をしやあしまいし、そんな目に遇はせるにやあ當らないぢやあないか。」

「だつてこいつはいくら云つても、あんまり聞き分けがないんですもの。」

「いいえ、お鶴ばかり憎いのぢやあないだらう？　お前は……お前は……」

母は涙をためた儘、悔やしさうに何度も口ごもりました。

「お前はわたしが憎いのだらう？　さもなけりやあわたしが病氣だと云ふのに、お雛樣を……お雛樣を賣りたがつたり、罪もないお鶴をいぢめたり、……そんなことをする筈はないぢやあないか？　さうだらう？　それならなぜ憎いのだか、……」

「お母さん！」

兄は突然かう叫ぶと、母の枕もとに突立つたなり、肘に顏を隱しました。その後父母の死んだ時にも、涙一つ落さなかつた兄、——永年政治に奔走してから、癲狂院へ送られる迄、一度も弱

みを見せなかつた兄、——さう云ふ兄がこの時だけは啜り泣きを始めたのでございます。これは興奮し切つた母にも、意外だつたのでございませう。母は長い溜息をしたぎり、申しかけた言葉も申さずに、もう一度枕をしてしまひました。……

かう云ふ騒ぎがあつてから、一時間程後でございませう。久しぶりに見世へ顏を出したのは肴屋の德藏でございます。いえ、肴屋ではございません。以前は肴屋でございましたが、今は人力車の車夫になつた、出入りの若いものでございます。この德藏には可笑しい話が幾つあつたかわかりません。その中でも未に思ひ出すのは苗字の話でございます。德藏もやはり御一新以後、苗字をつけることになりましたが、どうせつける位ならばと大束をきめたのでございませう、德川と申すのをつけることにしました。ところがお役所へ屆けに出ると、叱られたの叱られないのではございません。何でも德藏の申しますには、今にも斬罪にされ兼ねない權幕だつたさうでございます。……その德藏が氣樂さうに、牡丹に唐獅子の畫を描いた當時の人力車を引張りながら、ぶらりと見世先へやつて來ました。それが又何しに來たのかと思ふと、今日は客のないのを幸ひ、お嬢さんを人力車にお乘せ申して、會津つ原から煉瓦通りへでもお伴をさせて頂きたい、——かう申すのでございます。

「どうする？　お鶴。」

父はわざと眞面目さうに、人力車を見に見世へ出てゐたわたしの顏を眺めました。今日では人力車に乘ることなどはさ程子供も喜びますまい。しかし當時のわたしたちには丁度自働車に乘せて貰ふ位、嬉しいことだつたのでございます。が、母の病氣と申し、殊にああ云ふ大騒ぎのあつた直あとのことでございますから、一概に行きたいとも申されません。わたしはまだ悄氣切つたなり、「行きたい」と小聲に答へました。

「ぢやあお母さんに聞いて來い。折角德藏もさう云ふものだし。」

母はわたしの考へ通り、眼も明かずにほほ笑みながら、「上等だね」と申しました。意地の惡い兄は好い鹽梅に、丸佐へ出かけた留守でございます。わたしは泣いたのも忘れたやうに、早速人力車に飛び乘りました。赤毛布(ゲット)を膝掛けにした、輪のがらがらと鳴る人力車に。

その時見て歩いた景色などは申し上げる必要もございますまい。唯今でも話に出るのは德藏の不平でございます。德藏はわたしを乘せた儘、煉瓦の大通りにさしかかるが早いか、西洋の婦人を乘せた馬車とまともに衝突しかかりました。それはやつと助かりましたが、忌忌しさうに舌打ちをすると、こんなことを申すのでございます。

「どうもいけねえ。お嬢さんはあんまり輕過ぎるから、肝腎の足が踏ん止らねえ。……お嬢さん。乘せる車屋が可哀さうだから、二十前にやあ車へお乘んなさんなよ。」

人力車は煉瓦の大通りから、家の方へ横町を曲りました。すると忽ち出遇つたのは兄の英吉でございます。兄は煤竹の柄のついた置きランプを一臺さげた儘、急ぎ足に其處を歩いて居りました。それがわたしの姿を見ると、「待て」と申す相圖でございませう、ランプをさし擧げるのでございます。が、もうその前に德藏はぐるりと梶棒をまはしながら、兄の方へ車を寄せて居りました。

「御苦勞だね。德さん。何處へ行つたんだい？」

「へえ、何、今日はお嬢さんの江戸見物です。」

兄は苦笑を洩らしながら、人力車の側へ歩み寄りました。

「お鶴。お前、先へこのランプを持つて行つてくれ。わたしは油屋へ寄つて行くから。」

わたしはさつきの喧嘩の手前、わざと何とも返事をせずに、唯ランプだけ受け取りました。兄はそれなり歩きかけましたが、急に又こちらへ向き變へると、人力車の泥除けに手をかけながら、「お鶴」と申すのでございます。

「お鶴、お前、又お父さんにお雜樣のことなんぞ云ふんぢやあないぞ。」

わたしはそれでも默つて居りました。あんなにわたしをいぢめた癖に、又かと思つたのでございます。しかし兄は頓着せずに、小聲の言葉を續けました。

「お父さんが見ちやあいけないと云ふのは手附けをとつたからばかりぢやないぞ。見りやあみんなに未練が出る、……其處も考へてゐるんだぞ。好いか？　わかつたか？　わかつたら、もうさつきのやうに見たいの何のと云ふんぢやあないぞ。」

わたしは兄の聲の中に何時にない情あひを感じました。が、兄の英吉位、妙な人間はございません。優しい聲を出したかと思ふと、今度は又ふだんの通り、突然わたしを嚇すやうにかう申すのでございます。

「そりやあ云ひたけりやあ云つても好い。その代り痛い目に遇はされると思へ。」

兄は憎體に云ひ放つたなり、德藏にも挨拶も何もせずに、さつさと何處かへ行つてしまひました。

その晩のことでございます。わたしたち四人は土藏の中に、夕飯の膳を圍みました。尤も母は枕の上に顏を擧げただけでございますから、圍んだものの數にははひりません。しかしその晩の夕飯は何時もより花やかな氣がしました。それは申す迄もございません。あの薄暗い無盡燈の代りに、今夜は新しいランプの光が輝いてゐるからでございます。兄やわたしは食事のあひ間も、時時ランプを眺めました。石油を透かした硝子（ガラス）の壺、動かない焰を守つた火屋（ほや）、――さう云ふものの美しさに滿ちた珍しいランプを眺めました。

「明るいな。晝のやうだな。」

父も母をかへり見ながら、滿足さうに申しました。

「眩し過ぎる位ですね。」

かう申した母の顏には、殆ど不安に近い色が浮んでゐたものでございます。

「そりやあ無盡燈に慣れてゐたから……だが一度ランプをつけちやあ、もう無盡燈はつけられない。」

「何でも始は眩し過ぎるんですよ。ランプでも、西洋の學問でも、……」

兄は誰よりもはしやいで居りました。

「それでも慣れりや同じことですよ。今にきつとこのランプも暗いと云ふ時が來るんです。」

「大きにそんなものかも知れない。……お鶴。お前、お母さんのお湯はどうしたんだ？」

「お母さんは今夜は澤山なんですつて。」

わたしは母の云つた通り、何の氣もなしに返事をしました。

「困つたな。ちつとも食氣がないのかい？」

母は父に尋ねられると、仕方がなささうに溜息をしました。

「ええ、何だかこの石油の匂が、……舊弊人の證據ですね。」

それぎりわたしたちは言葉少なに、箸ばかり動かし續けました。しかし母は思ひ出したやうに、時時ランプの明るいことを褒めてゐたやうでございます。あの腫れ上つた唇の上にも微笑らしいものさへ浮べながら。

その晩も皆休んだのは十一時過ぎでございます。しかしわたしは眼をつぶつても、容易に寐つくことが出來ません。兄はわたしに雛のことは二度と云ふなと申しました。わたしも雛を出して見るのは出來ない相談とあきらめて居ります。が、出して見たいことはさつきと少しも變りません。雛は明日になつたが最後、遠いところへ行つてしまふ、――さう思へばつぶつた眼の中にも、自然と涙がたまつて來ます。一そみんなの寢てゐる中に、そつと一人出して見ようか？――さうもわたしは考へて見ました。それともあの中の一つだけ、何處か外へ隱して置かうか？――さうも亦わたしは考へて見ました。しかしどちらも見つかつたら、――と思ふとさすがにひるんでしまひます。わたしは正直にその晩位、いろいろ恐しいことばかり考へた覺えはございません。今夜もう一度火事があれば好い。さうすれば人手に渡らぬ前に、すつかり雛も燒けてしまふ。さもなければ亞米利加人も頭の禿げた丸佐の主人もコレラになつてしまへば好い。さうすれば雛は何處へもやらずに、この儘大事にすることが出來る。――そんな空想も浮んで參ります。が、まだ何と申しても、其處は子供でございますから、一時間たつかたたない中に、何時かうとうと眠つ

てしまひました。

それからどの位たちましたか、ふと眠りがさめて見ますと、薄暗い行燈をともした土藏に誰か人の起きてゐるらしい物音が聞えるのでございます。鼠かしら、泥坊かしら、又はもう夜明けになつたのかしら？――わたしはどちらかと迷ひながら、怯づ怯づ細眼を明いて見ました。するとわたしの枕もとには、寢間着の儘の父が一人、こちらへ横顔を向けながら、坐つてゐるのでございます。父が！……しかしわたしを驚かせたのは父ばかりではございません。父の前にはわたしの雛が、――お節句以來見なかつた雛が竝べ立ててあるのでございます。

夢かと思ふと申すのはああ云ふ時でございませう。わたしは殆ど息もつかずに、この不思議を、見守りました。覺束ない行燈の光の中に、象牙の笏をかまへた男雛を、冠の瓔珞を垂れた女雛を、右近の橘を、左近の櫻を、柄の長い日傘を擔いだ仕丁を、眼八分に高坏を捧げた官女を、小さい蒔繪の鏡臺や箪笥を、貝殼盡しの雛屏風を、膳椀を、畫雪洞を、色絲の手鞠を、さうして又父の横顔を、……

夢かと思ふと申すのは、……ああ、それはもう前に申し上げました。が、ほんたうにあの晩の雛は夢だつたのでございませうか？　一圖に雛を見たがつた餘り、知らず識らず造り出した幻ではなかつたのでございませうか？　わたしは未にどうかすると、わたし自身にもほんたうかどう

か、返答に困るのでございます。

しかしわたしはあの夜更けに、獨り雛を眺めてゐる、年とつた父を見かけました。これだけは確かでございます。さうすればたとひ夢にしても、別段悔やしいとは思ひません。兎に角わたしは眼のあたりに、わたしと少しも變らない父を見たのでございますから、女女しい、……その癖おどそかな父を見たのでございますから。

「雛」の話を書きかけたのは何年か前のことである。それを今書き上げたのは瀧田氏の勸めによるのみではない。同時に又四五日前、横濱の或英吉利人の客間に、古雛の首を玩具にしてゐる紅毛の童女に遇つたからである。今はこの話に出て來る雛も、鉛の兵隊やゴムの人形と一つ玩具箱に投げこまれながら、同じ憂きめを見てゐるのかも知れない。（大正十二年十二月）

「齒車」に就て

私は今までに「齒車」を何度讀んだか知れない。その度に書かれてあることがらよりも、すぐに私は芥川龍之介君の顏を想ひ出すのである。不思議に親しい友人の作品を讀んだあとは、誰でもさうであらうが、必らず端麗で思ひ詰めたやうな彼の顏が見えて來る。

芥川君は散歩してゐるときの歩き方に特徴があつて、きつと大跨に威ばつてどんどん歩く、そして鋭い眼で眼に停るものをチラと見る。冬など外套の釦が上から二つくらゐしか掛けられてゐなくて、裾の方が開いてゐる。病中であつても歩き方は元氣である。田端から動坂町へ、それから本郷の大通りの煙ぽい町つづきに、私はよく彼の姿を思ひえがくのである。

第五章の冒頭に、「日の光は僕を苦しめ出した。」と書かれてあるが、この文句は私をなぜか吃驚させた。「齒車」全章を覆うてゐるものは、何か烈しい燈火滅せんとして一瞬の間にかがやくやうなものがあつた。何處かへ突き拔けて出やうとし、もつと素晴らしい文學の奥に踏み込もうとしながらどんどん歩いてゐる姿が眼に見えた。そして實際生活のきれぎれな挿話が、その神經で書いたやうな繊い線でぐいぐい抉られてゐた。その繊いとは云へ、異常な憑かれた人のやうな

逞しい舌の先が、感じられてならないのである。恐らくこの遺稿はじりじりと毎日苦しんでゐるものを、書くことによつて救はれてゐる文學者の救ひが、窺はれる。短かいものばかり書いてゐた芥川君が、遺稿を、分量から言つても相當に書いてゐたことは、全く書くことによつてほつとし、その瞬間にいくらかづつ救はれて行つたものらしい。その氣持が行間を覆うてゐることで解るのだ。

そこへ誰か梯子段を慌しく昇つて來たかと思ふと、すぐに又ばたばた駆け下りて行つた。僕はその誰かが妻だつたことを知り、驚いて體を起すが早いか、丁度梯子段の前にある、薄暗い茶の間へ顔を出した。すると妻は突つ伏したまま息切れをこらへてゐると見え、絶えず肩を震はしてゐた。

「どうした？」

「いえ、どうもしないのです。……」

妻はやつと顔を擡げ、無理に微笑して話しつづけた。

「どうもした訳ではないのですけれどもね、唯何だかお父さんが死んでしまひさうな氣がしたものですから。……」

この數行をじつと見てゐると、芥川君の何とも言へない睫毛の長い瞼のうらに、私は光るものを感じるのである。私の知人のなかでも芥川君ほど涙もろい人を、滅多に見たことがない。

「齒車」の迫るちからは不思議にやさしく、弱り果てたやうでありながらなほ生涯を閉ぢるまで、劍をもつ人が最後までそれで戦ひ挑むやうに、いぢらしくも戦つてゐた。何故、きみは亡くなつたかといふことは殆私の生涯の問題であり、そして分るやうな分らないやうな問題であつた。解らうといふ氣を持つことは私にはもはや艱難な問題だつた。「誰か僕の眠つてゐるうちにそつと絞め殺してくれるものはないか？」といふ終りの一行も、彼の場合にはこの空虚な文字すら、いらいらした弱い美しさに、花びらが零れるやうに書かれてゐるのである。全く芥川龍之介といふ人は花のある木のやうで、それが脆くも散りはてたやうな氣がするのである。遺稿「齒車」一篇は、いたるところに此の悲しい花びらで埋もれてゐる。

けふ私は突然に氣のついたのは芥川君の用語といふものが、その文字を實によく選んであつて潔癖が鋭くにじみ出てゐることである。不愉快な文字をどんどん排いて、その好みによつて快よい觸りのある文字ばかりをえらんでゐた。誰でも作家はさうであるに違ひないが、芥川君のえらび方には一本の徹つた道があるやうである。

齒車

一　レエン・コオト

僕は或知り人の結婚披露式につらなる爲に鞄を一つ下げたまま、東海道の或停車場へその奥の避暑地から自動車を飛ばした。自動車の走る道の兩がはは大抵松ばかり茂つてゐた。上り列車に間に合ふかどうかは可也怪しいのに違ひなかつた。自動車には丁度僕の外に或理髮店の主人も乘り合せてゐた。彼は棗のやうにまるまると肥つた、短い顯髯の持ち主だつた。僕は時間を氣にしながら、時々彼と話をした。

「妙なこともありますね。××さんの屋敷には晝間でも幽靈が出るつて云ふんですが。」

「晝間でもね。」

僕は冬の西日の當つた向うの松山を眺めながら、善い加減に調子を合せてゐた。

「尤も天氣の善い日には出ないさうです。一番多いのは雨のふる日だつて云ふんですが。」

「雨のふる日に濡れて來るんぢやないか？」

「御常談で。……しかしレエン・コオトを着た幽靈だつて云ふんです。」

自動車はラッパを鳴らしながら、或停車場へ横着けになつた。僕は或理髮店の主人に別れ、停車場の中へはひつて行つた。すると果して上り列車は二三分前に出たばかりだつた。待合室のベンチにはレエン・コオトを着た男が一人ぼんやり外を眺めてゐた。僕は今聞いたばかりの幽靈の話を思ひ出した。が、ちよつと苦笑したぎり、兎に角次の列車を待つ爲に停車場前のカッフェへはひることにした。

それはカッフェと云ふ名を與へるのも考へものに近いカッフェだつた。僕は隅のテエブルに坐り、ココアを一杯註文した。テエブルにかけたオイル・クロオスは白地に細い青の線を荒い格子に引いたものだつた。しかしもう隅々には薄汚いカンヴアスを露してゐた。僕は膠臭いココアを飲みながら、人げのないカッフェの中を見まはした。埃じみたカッフェの壁には「親子丼」だの「カツレツ」だのと云ふ紙札が何枚も貼つてあつた。

「地玉子、オムレツ」

僕はかう云ふ紙札に東海道線に近い田舍を感じた。それは麥畠やキャベツ畠の間に電氣機關車の通る田舍だつた。……

次の上り列車に乘つたのはもう日暮に近い頃だつた。僕はいつも二等に乘つてゐた。が、何か

の都合上、その時は三等に乘ることにした。

汽車の中は可也こみ合つてゐた。しかも僕の前後にゐるのは大磯かどこかへ遠足に行つたらしい小學校の女生徒ばかりだつた。僕は卷煙草に火をつけながら、かう云ふ女生徒の群れを眺めてゐた。彼等はいづれも快活だつた。のみならず殆どしやべり續けた。

「寫眞屋さん、ラヴ・シインつて何？」

やはり遠足について來たらしい、僕の前にゐた「寫眞屋さん」は何とかお茶を濁してゐた。しかし十四五の女生徒の一人はまだいろいろのことを問ひかけてゐた。僕はふと彼女の鼻に膿腫症のあることを感じ、何か頬笑まずにはゐられなかつた。それから又僕の隣りにゐた十二三の女生徒の一人は若い女教師の膝の上に坐り、片手に彼女の頸を抱きながら、片手に彼女の頬をさすつてゐた。しかも誰かと話す合ひ間に時々かう女教師に話しかけてゐた。

「可愛いわね、先生は。可愛い目をしていらつしやるわね。」

彼等は僕には女生徒よりも一人前の女と云ふ感じを與へた。林檎を皮ごと嚙じつてゐたり、キヤラメルの紙を剝いでゐることを除けば。……しかし年かさらしい女生徒の一人は僕の側を通る時に誰かの足を踏んだと見え、「御免なさいまし」と聲をかけた。彼女だけは彼等よりもませてゐるだけに反つて僕には女生徒らしかつた。僕は卷煙草を啣へたまま、この矛盾を感じた僕自身

を冷笑しない訣には行かなかつた。

いつか電燈をともした汽車はやつと或郊外の停車場へ着いた。僕は風の寒いプラットフォオムへ下り、一度橋を渡つた上、省線電車の來るのを待つことにした。すると偶然顏を合せたのは或會社にゐるT君だつた。僕等は電車を待つてゐる間に不景氣のことなどを話し合つた。T君は勿論僕などよりもかう云ふ問題に通じてゐた。が、逞しい彼の指には餘り不景氣には緣のない土耳古石の指環も嵌まつてゐた。

「大したものを嵌めてゐるね。」

「これか？　これはハルビンへ商賣に行つてゐた友だちの指環を買はされたんだよ。そいつも今は往生してゐる。コオペラティヴと取引きが出來なくなつたものだから。」

僕等の乘つた省線電車は幸ひにも汽車ほどこんでゐなかつた。僕等は並んで腰をおろし、いろいろのことを話してゐた。T君はついこの春に巴里にある勤め先から東京へ歸つたばかりだつた。從つて僕等の間には巴里の話も出勝ちだつた。カイヨオ夫人の話、蟹料理の話、御外遊中の或殿下の話、……

「佛蘭西は存外困つてはゐないよ。唯元來佛蘭西人と云ふやつは稅を出したがらない國民だから、內閣はいつも倒れるがね。……」

「だつてフランは暴落するしさ。」
「それは新聞を讀んでゐればね。しかし向うにゐて見給へ。新聞紙上の日本なるものはのべつに大地震や大洪水があるから。」
するとレエン・コオトを着た男が一人僕等の向うへ來て腰をおろした。僕はちよつと無氣味になり、何か前に聞いた幽靈の話をT君に話したい心もちを感じた。が、T君はその前に杖の柄をくるりと左へ向け、顏は前を向いたまま、小聲に僕に話しかけた。
「あすこに女が一人ゐるだらう？　鼠色の毛糸のショオルをした、……」
「あの西洋髪に結つた女か？」
「うん、風呂敷包みを抱へてゐる女さ、あいつはこの夏は輕井澤にゐたよ。ちよつと洒落れた洋裝などをしてね。」
しかし彼女は誰の目にも見すぼらしいなりをしてゐるのに違ひなかつた。僕はT君と話しながら、そつと彼女を眺めてゐた。彼女はどこか眉の間に氣違ひらしい感じのする顏をしてゐた。しかもその又風呂敷包みの中から豹に似た海綿をはみ出させてゐた。
「輕井澤にゐた時には若い亞米利加人と踊つたりしてゐたつけ。モダアン……何と云ふやつかね。」

レエン・コオトを着た男は僕のT君と別れる時にはいつかそこにゐなくなつてゐた。僕は省線電車の或停車場からやはり鞄をぶら下げたまま、或ホテルへ歩いて行つた。往來の兩側に立つてゐるのは大抵大きいビルディングだつた。僕はそこを歩いてゐるうちにふと松林を思ひ出した。のみならず僕の視野のうちに妙なものを見つけ出した。妙なものを？——と云ふのは絶えずまはつてゐる半透明の齒車だつた。僕はかう云ふ經驗を前にも何度か持ち合せてゐた。齒車は次第に數を殖やし、半ば僕の視野を塞いでしまふ、が、それも長いことではない、暫らくの後には消え失せる代りに今度は頭痛を感じはじめる、——それはいつも同じことだつた。眼科の醫者はこの錯覺（？）の爲に度々僕に節煙を命じた。しかしかう云ふ齒車は僕の煙草に親まない二十前にも見えないことはなかつた。僕は又はじまつたなと思ひ、左の目の視力をためす爲に片手に右の目を塞いで見た。左の目は果して何ともなかつた。しかし右の目の瞼の裏には齒車が幾つもまはつてゐた。僕は右側のビルディングの次第に消えてしまふのを見ながら、せつせと往來を歩いて行つた。
ホテルの玄關へはひつた時には齒車はもう消え失せてゐた。が、頭痛はまだ殘つてゐた。僕は外套や帽子を預ける次手に部屋を一つとつて貰ふことにした。それから或雜誌社へ電話をかけて金のことを相談した。

結婚披露式の晩餐はとうに始まつてゐたらしかつた。僕はテエブルの隅に坐り、ナイフやフォオクを動かし出した。正面の新郎や新婦をはじめ、白い凹字形のテエブルに就いた五十人あまりの人びとは勿論いづれも陽氣だつた。が、僕の心もちは明るい電燈の光の下にだんだん憂鬱になるばかりだつた。僕はこの心もちを遁れる爲に隣にゐた客に話しかけた。彼は丁度獅子のやうに白い頬髯を伸ばした老人だつた。のみならず僕も名を知つてゐた或名高い漢學者だつた。從つて又僕等の話はいつか古典の上へ落ちて行つた。

「麒麟はつまり一角獸ですね。それから鳳凰もフエニックスと云ふ鳥の、……」

この名高い漢學者はかう云ふ僕の話にも興味を感じてゐるらしかつた。僕は機械的にしやべつてゐるうちにだんだん病的な破壞慾を感じ、堯舜を架空の人物にしたのは勿論、「春秋」の著者もずつと後の漢代の人だつたことを話し出した。するとこの漢學者は露骨に不快な表情を示し、少しも僕の顔を見ずに殆ど虎の唸るやうに僕の話を截り離した。

「もし堯舜もゐなかつたとすれば、孔子は誰をつかれたことになる。聖人の誰をつかれる筈はない。」

僕は勿論默つてしまつた。それから又皿の上の肉へナイフやフォオクを加へようとした。すると小さい蛆が一匹靜かに肉の縁に蠢いてゐた。蛆は僕の頭の中に Worm と云ふ英語を呼び起した。それは又麒麟や鳳凰のやうに或傳說的動物を意味してゐる言葉にも違ひなかつた。僕はナイフやフォオクを置き、いつか僕の杯にシャンパアニュのつがれるのを眺めてゐた。

やつと晩餐のすんだ後、僕は前にとつて置いた僕の部屋へこもる爲に人氣のない廊下を歩いて行つた。廊下は僕にはホテルよりも監獄らしい感じを與へるものだつた。しかし幸ひにも頭痛だけはいつの間にか薄らいでゐた。

僕の部屋には鞄は勿論、帽子や外套も持つて來てあつた。僕は壁にかけた外套に僕自身の立ち姿を感じ、急いでそれを部屋の隅の衣裳戸棚の中へ拋りこんだ。それから鏡臺の前へ行き、ぢつと鏡に僕の顔を映した。鏡に映つた僕の顔は皮膚の下の骨組みを露はしてゐた。蛆はかう云ふ僕の記憶に忽ちはつきり浮かび出した。

僕は戸をあけて廊下へ出、どこと云ふことなしに歩いて行つた。するとロツビイへ出る隅に綠いろの笠をかけた、脊の高いスタンドの電燈が一つ硝子戸に鮮かに映つてゐた。それは何か僕の心に平和な感じを與へるものだつた。僕はその前の椅子に坐り、いろいろのことを考へてゐた。が、そこにも五分とは坐つてゐる訣に行かなかつた。レエン・コオトは今度も亦僕の横にあつた長椅子の背中に如何にもだらりと脫ぎかけてあつた。

「しかも今は寒中だと云ふのに。」

僕はこんなことを考へながら、もう一度廊下を引き返して行つた。廊下の隅の給仕だまりには一人も給仕は見えなかつた。しかし彼等の話し聲はちよつと僕の耳をかすめて行つた。それは何とか言はれたのに答へた All right と云ふ英語だつた。「オオル・ライト」？——僕はいつかこの對話の意味を正確に掴まうとあせつてゐた。「オオル・ライト」？「オオル・ライト」？ 何が一體オオル・ライトなのであらう。

僕の部屋は勿論ひつそりしてゐた。が、戸をあけてはひることは妙に僕には無氣味だつた。僕はちよつとためらつた後、思ひ切つて部屋の中へはひつて行つた。それから鏡を見ないやうにし、机の前の椅子に腰をおろした。椅子は蜥蜴の皮に近い、青いマロツク皮の安樂椅子だつた。僕は鞄をあけて原稿用紙を出し、或短篇を續けようとした。けれどもインクをつけたペンはいつまでたつても動かなかつた。のみならずやつと動いたと思ふと、同じ言葉ばかり書きつづけてゐた。All right……All right……All right, sir……All right……

そこへ突然鳴り出したのはベツドの側にある電話だつた。僕は驚いて立ち上り、受話器を耳へやつて返事をした。

「どなた？」

「あたしです。あたし……」

相手は僕の姉の娘だつた。

「何だい？ どうかしたのかい？」

「ええ、あの大へんなことが起つたんです。ですから、……大へんなことが起つたもんですから、今叔母さんにも電話をかけたんです。」

「大へんなこと？」

「ええ、ですからすぐに來て下さい。すぐにですよ。」

電話はそれぎり切れてしまつた。僕はもとのやうに受話器をかけ、反射的にベルの鈕を押した。しかし僕の手の震へてゐることは僕自身はつきり意識してゐた。給仕は容易にやつて來なかつた。僕は苛立たしさよりも苦しさを感じ、何度もベルの鈕を押した、やつと運命の僕に教へた「オオル・ライト」と云ふ言葉を了解しながら。

僕の姉の夫はその日の午後、東京から餘り離れてゐない或田舍に縊死してゐた。しかも季節に緣のないレエン・コオトをひつかけてゐた。僕はいまもそのホテルの部屋に前の短篇を書きつづけてゐる。眞夜中の廊下には誰も通らない。が、時々戸の外に翼の音の聞えることもある。どこかに鳥でも飼つてあるのかも知れない。

二　復讐

僕はこのホテルの部屋に午前八時頃に目を醒ました。が、ベッドをおりようとすると、スリッパアは不思議にも片つぽしかなかつた。それはこの一二年の間、いつも僕に恐怖だの不安だのを與へる現象だつた。のみならずサンダアルを片つぽだけはいた希臘神話の中の王子を思ひ出させる現象だつた。僕はベルを押して給仕を呼び、スリッパアの片つぽを探して貰ふことにした。給仕はけげんな顏をしながら、狹い部屋の中を探しまはつた。

「ここにありました。このバスの部屋の中に。」

「どうして又そんな所に行つてゐたのだらう？」

「さあ、鼠かも知れません。」

僕は給仕の退いた後、牛乳を入れない珈琲を飲み、前の小說を仕上げにかかつた。凝灰岩を四角に組んだ窓は雪のある庭に向つてゐた。僕はペンを休める度にぼんやりとこの雪を眺めたりした。雪は苔を持つた沈丁花の下に都會の煤煙によごれてゐた。それは何か僕の心に傷ましさを與へる眺めだつた。僕は卷煙草をふかしながら、いつかペンを動かさずにいろいろのことを考へてゐた。妻のことを、子供たちのことを、就中姉の夫のことを。……

姉の夫は自殺する前に放火の嫌疑を蒙つてゐた。それも亦實際仕かたはなかつた。彼は家の燒ける前に家の價格に二倍する火災保險に加入してゐた。しかも僞證罪を犯した爲に執行猶豫中の體になつてゐた。けれども僕を不安にしたのは彼の自殺したことよりも僕の東京へ歸る度に必ず火の燃えるのを見たことだつた。僕は或は汽車の中から山を燒いてゐる火を見たり、或は又自動車の中から（その時は妻子とも一しよだつた。）常磐橋界隈の火事を見たりしてゐた。それは彼の家の燒けない前にもおのづから僕に火事のある豫感を與へない訣には行かなかつた。

「今年は家が火事になるかも知れないぜ。」

「そんな緣起の惡いことを。……それでも火事になつたら大變ですね。保險は孫についてゐないし、……」

僕等はそんなことを話し合つたりした。しかし僕の家は燒けずに、……僕は努めて妄想を押しのけ、もう一度ペンを動かさうとした。が、ペンはどうしても一行とは樂に動かなかつた。僕はとうとう机の前を離れ、ベッドの上に轉がつたまま、トルストイの Polikouchka を讀みはじめた。この小說の主人公は虛榮心や病的傾向や名譽心の入り交つた、複雜な性格の持ち主だつた。しかも彼の一生の悲喜劇は多少の修正を加へさへすれば、僕の一生のカリカテュアだつた。殊に彼の悲喜劇の中に運命の冷笑を感じるのは次第に僕を無氣味にし出した。僕は一時間とたたない

うちにベッドの上から飛び起きるが早いか、窓かけの垂れた部屋の隅へ力一ぱい本を抛りつけた。

「くたばつてしまへ！」

すると大きい鼠が一匹窓かけの下からバスの部屋へ斜めに床の上を走つて行つた。僕は一足飛びにバスの部屋へ行き、戸をあけて中を探しまはつた。が、白いタツブのかげにも鼠らしいものは見えなかつた。僕は急に無氣味になり、慌ててスリツパアを靴に換へると、人氣のない廊下を歩いて行つた。

廊下はけふも不相變牢獄のやうに憂鬱だつた。僕は頭を垂れたまま、階段を上つたり下りたりしてゐるうちにいつかコツク部屋へはひつてゐた。コツク部屋は存外明るかつた。が、片側に並んだ竈は幾つも炎を動かしてゐた。僕はそこを通りぬけながら、白い帽をかぶつたコツクたちの冷やかに僕を見てゐるのを感じた。同時に又僕の墮ちた地獄を感じた。「神よ、我を罰し給へ。怒り給ふこと勿れ。恐らくは我滅びん。」——かう云ふ祈禱もこの瞬間にはおのづから僕の唇にのぼらない訣には行かなかつた。

僕はこのホテルの外へ出ると、青ぞらの映つた雪解けの道をせつせと姉の家へ歩いて行つた。道に沿うた公園の樹木は皆枝や葉を黒ませてゐた。のみならずどれも一本ごとに丁度僕等人間のやうに前や後ろを具へてゐた。それも亦僕には不快よりも恐怖に近いものを運んで來た。僕はダ

ンテの地獄の中にある、樹木になつた魂を思ひ出し、ビルディングばかり並んでゐる電車線路の向うを歩くことにした。しかもそこも一町とは無事に歩くことは出來なかつた。

「ちよつと通りがかりに失禮ですが、……」

それは金釦の制服を着た二十二三の青年だつた。僕は默つてこの青年を見つめ、彼の鼻の左の側に黒子のあることを發見した。彼は帽を脱いだまま、怯づ怯づかう僕に話しかけた。

「Aさんではいらつしやいませんか？」

「さうです。」

「どうもそんな氣がしたものですから、……」

「何か御用ですか？」

「いえ、唯お目にかかりたかつただけです。僕も先生の愛讀者の……」

僕はもうその時にはちよつと帽をとつたぎり、彼を後ろに歩き出してゐた。先生、A先生、——それは僕にはこの頃では最も不快な言葉だつた。僕はあらゆる罪惡を犯してゐることを信じてゐた。しかも彼等は何かの機會に僕を先生と呼びつづけてゐた。僕はそこに僕を嘲る何ものかを感じずにはゐられなかつた。何ものかを？——しかし僕の物質主義は神秘主義を拒絶せずにはゐられなかつた。僕はつい二三箇月前にも或小さい同人雜誌にかう云ふ言葉を發表してゐた。——

「僕は藝術的良心を始め、どう云ふ良心も持つてゐない。僕の持つてゐるのは神經だけである。」

……

姉は三人の子供たちと一しよに露地の奥のバラックに避難してゐた。褐色の紙を貼つたバラックの中は外よりも寒いくらゐだつた。僕等は火鉢に手をかざしながら、いろいろのことを話し合つた。體の逞しい姉の夫は人一倍痩せ細つた僕を本能的に輕蔑してゐた。のみならず僕の作品の不道徳であることを公言してゐた。僕はいつも冷やかにかう云ふ彼を見おろしたまま、一度も打ちとけて話したことはなかつた。しかし姉と話してゐるうちにだんだん彼も僕のやうに地獄に墮ちてゐたことを悟り出した。彼は現に寢臺車の中に幽靈を見たとか云ふことだつた。が、僕は卷煙草に火をつけ、努めて金のことばかり話しつゞけた。

「何しろかう云ふ際だしするから、何も彼も賣つてしまはうと思ふの。」

「それはさうだ。タイプライタアなどは幾らかになるだらう。」

「ええ、それから畫などもあるし。」

「次手にNさん（姉の夫）の肖像畫も賣るか？　しかしあれは……」

僕はバラックの壁にかけた、額縁のない一枚のコンテ畫を見ると、迂濶に常談も言はれないのを感じた。縊死した彼は汽車の爲に顏もすつかり肉塊になり、僅かに唯口髭だけ殘つてゐたとか

云ふことだつた。この話は勿論話自身も薄氣味惡いのに違ひなかつた。しかし彼の肖像畫はどこも完全に描いてあるものの、口髭だけはなぜかぼんやりしてゐた。僕は光線の加減かと思ひ、この一枚のコンテ畫をいろいろの位置から眺めるやうにした。

「何をしてゐるの？」

「何でもないよ。……唯あの肖像畫は口のまはりだけ、……」

姉はちよつと振り返りながら、何も氣づかないやうに返事をした。

「髭だけ妙に薄いやうでせう。」

僕の見たものは錯覺ではなかつた。しかし錯覺ではないとすれば、――僕は午飯の世話にならないうちに姉の家を出ることにした。

「まあ、善いでせう。」

「又あしたでも、……けふは青山まで出かけるのだから。」

「ああ、あすこ？　まだ體の具合は惡いの？」

「やつぱり藥ばかり嚥んでゐる。催眠藥だけでも大變だよ。ヴエロナアル、ノイロナアル、トリオナアル、ヌマアル……」

三十分ばかりたつた後、僕は或ビルディングへはひり、昇降機（リフト）に乘つて三階へのぼつた。それ

から或レストオランの硝子戸を押してはひらうとした。が、硝子戸は動かなかつた。のみならず そこには「定休日」と書いた漆塗りの札も下つてゐた。僕は愈不快になり、硝戸戸の向うのテエブルの上に林檎やバナナを盛つたのを見たまま、もう一度往來へ出ることにした。すると會社員らしい男が二人何か快活にしやべりながら、このビルディングへはひる爲に僕の肩をこすつて行つた。彼等の一人はその拍子に「イライラしてね」と言つたらしかつた。

僕は往來に佇んだなり、タクシイの通るのを待ち合せてゐた。タクシイは容易に通らなかつた。のみならずたまに通つたのは必ず黄いろい車だつた。（この黄いろいタクシイはなぜか僕に交通事故の面倒をかけるのを常としてゐた。）そのうちに僕は縁起の好い緑いろの車を見つけ、兎に角青山の墓地に近い精神病院へ出かけることにした。

「イライラする、――――tantalizing――――Tantalus――――Inferno……」

タンタルスは實際硝子戸越しに果物を眺めた僕自身だつた。僕は二度も僕の目に浮かんだダンテの地獄を詛ひながら、ぢつと運轉手の背中を眺めてゐた。そのうちに又あらゆるものの讃であることを感じ出した。政治、實業、藝術、科學、――いづれも皆かう云ふ僕にはこの恐しい人生を隱した雜色のエナメルに外ならなかつた。僕はだんだん息苦しさを感じ、タクシイの窓をあけ放つたりした。が、何か心臓をしめられる感じは去らなかつた。

緑いろのタクシイはやつと神宮前へ走りかかつた。そこには或精神病院へ曲る横町が一つあるもタクシイを往復させた後、とうとうあきらめておりることにした。

僕はやつとその横町を見つけ、ぬかるみの多い道を曲つて行つた。するといつか道を間違へ、青山齋場の前へ出てしまつた。それは彼是十年前にあつた夏目先生の告別式以來、一度も僕は門の前さへ通つたことのない建物だつた。十年前の僕も幸福ではなかつた。しかし少くとも平和だつた。僕は砂利を敷いた門の中を眺め、「漱石山房」の芭蕉を思ひ出しながら、何か僕の一生も一段落のついたことを感じない訣には行かなかつた。のみならずこの墓地の前へ十年目に僕をつれて來た何ものかを感じない訣にも行なかつた。

或精神病院の門を出た後、僕は又自動車に乘り、前のホテルへ歸ることにした。が、このホテルの玄關へおりると、レエン・コオトを着た男が一人何か給仕と喧嘩をしてゐた。給仕と？――いや、それは給仕ではない、緑いろの服を着た自動車掛りだつた。僕はこのホテルへはひることに何か不吉な心もちを感じ、さつさともとの道を引き返して行つた。

僕の銀座通りへ出た時には彼是日の暮も近づいてゐた。僕は兩側に並んだ店や目まぐるしい人通りに一層憂鬱にならずにはゐられなかつた。殊に往來の人々の罪などと云ふものを知らないや

うに輕快に歩いてゐるのは不快だつた。僕は薄明るい外光に電燈の光のまじつた中をどこまでも北へ歩いて行つた。そのうちに僕の目を捉へたのは雜誌などを積み上げた本屋だつた。僕はこの本屋の店へはひり、ぼんやりと何段かの書棚を見上げた。それから「希臘神話」と云ふ一冊の本へ目を通すことにした。黄いろい表紙をした「希臘神話」は子供の爲に書かれたものらしつた。けれども偶然僕の讀んだ一行は忽ち僕を打ちのめした。

「一番偉いツォイスの神でも復讐の神にはかなひません。……」

僕はこの本屋の店を後ろに人ごみの中を歩いて行つた。いつか曲り出した僕の背中に絶えず僕をつけ狙つてゐる復讐の神を感じながら。……

三　夜

僕は丸善の二階の書棚にストリントベルグの「傳說」を見つけ、二三頁づつ目を通した。それは僕の經驗と大差のないことを書いたものだつた。のみならず黄いろい表紙をしてゐた。僕は「傳說」を書棚へ戻し、今度は殆ど手當り次第に厚い本を一冊引きずり出した。しかしこの本も挿し畫の一枚に僕等人間と變りのない、目鼻のある齒車ばかり並べてゐた。（それは或獨逸人の集めた精神病者の畫集だつた。）僕はいつか憂鬱の中に反抗的精神の起るのを感じ、やぶれかぶ

れになつた賭博狂のやうにいろいろの本を開いて行つた。が、なぜかどの本も必ず文章が挿し畫かの中に多少の針を隱してゐた。どの本も？——僕は何度も讀み返した「マダム・ボヴァリイ」を手にとつた時さへ、畢竟僕自身も中產階級のムッシウ・ボヴァリイに外ならないのを感じた。……

日の暮に近い丸善の二階には僕の外に客もないらしかつた。僕は電燈の光の中に書棚の間をさまよつて行つた。それから「宗教」と云ふ札を掲げた書棚の前に足を休め、綠いろの表紙をした一冊の本へ目を通した。この本は目次の第何章かに「恐しい四つの敵、——疑惑、恐怖、驕慢、官能的欲望」と云ふ言葉を並べてゐた。僕はかう云ふ言葉を見るが早いか、一層反抗的精神の起るのを感じた。それ等の敵と呼ばれるものは少くとも僕には感受性や理智の異名に外ならなかつた。が、傳統的精神もやはり近代的精神のやうにやはり僕を不幸にするのは愈僕にはたまらなかつた。僕はこの本を手にしたまま、ふといつかペン・ネエムに用ひた「壽陵余子」と云ふ言葉を思ひ出した。それは邯鄲の歩みを學ばないうちに壽陵の歩みを忘れてしまひ、蛇行匍匐して歸鄉したと云ふ「韓非子」中の青年だつた。今日の僕は誰の目にも「壽陵余子」であるのに違ひなかつた。しかしまだ地獄へ墮ちなかつた僕もこのペン・ネエムを用ひてゐたことは、——僕は大きい書棚を後ろに努めて妄想を拂ふやうにし、丁度僕の向うにあつたポスタアの展覽室へはひつて

行つた。が、そこにも一枚のポスタアの中には聖ヂョオヂらしい騎士が一人翼のある龍を刺し殺してゐた。しかもその騎士は兜の下に僕の敵の一人に近いしかめ面を半ば露してゐた。僕は又「韓非子」の中の屠龍の技の話を思ひ出し、展覽室へ通りぬけずに幅の廣い階段を下つて行つた。

僕はもう夜になつた日本橋通りを歩きながら、屠龍と云ふ言葉を考へつづけた。それは又僕の持つてゐる硯の銘にも違ひなかつた。この硯を僕に贈つたのは或若い事業家だつた。彼はいろいろの事業に失敗した揚句、とうとう去年の暮に破産してしまつた。僕は高い空を見上げ、無數の星の光の中にどのくらゐこの地球の小さいかと云ふことを、——從つてどのくらゐ僕自身の小さいかと云ふことを考へようとした。しかし晝間は晴れてゐた空もいつかもうすつかり曇つてゐた。僕は突然何ものかの僕に敵意を持つてゐるのを感じ、電車線路の向うにある或カッフェへ避難することにした。

それは「避難」に違ひなかつた。僕はこのカッフェの薔薇色の壁に何か平和に近いものを感じ、一番奥のテエブルの前にやつと樂々と腰をおろした。そこには幸ひ僕の外に二三人の客のあるだけだつた。僕は一杯のココアを吸り、ふだんのやうに卷煙草をふかし出した。卷煙草の煙は薔薇色の壁へかすかに青い煙を立ちのぼらせて行つた。この優しい色の調和もやはり僕には愉快だつた。けれども僕は暫らくの後、僕の左の壁にかけたナポレオンの肖像畫を見つけ、そろそろ又不

安を感じ出した。ナポレオンはまだ學生だつた時、彼の地理のノオト・ブックの最後に「セエント・ヘレナ、小さい島」と記してゐた。それは或は僕等の言ふやうに偶然だつたかも知れなかつた。しかしナポレオン自身にさへ恐怖を呼び起したのは確かだつた。……

僕はナポレオンを見つめたまま、僕自身の作品を考へ出した。するとまづ記憶に浮かんだのは「侏儒の言葉」の中のアフォリズムだつた。(殊に「人生は地獄よりも地獄的である」と云ふ言葉だつた。)それから「地獄變」の主人公、——良秀と云ふ畫師の運命だつた。それから……僕は卷煙草をふかしながら、かう云ふ記憶から逃れる爲にこのカッフェの中を眺めまはした。僕のこへ避難したのは五分もたたない前のことだつた。しかしこのカッフェは短時間の間にすつかり容子を改めてゐた。就中僕を不快にしたのはマホガニイまがひの椅子やテエブルの少しもあたりの薔薇色との壁と調和を保つてゐないことだつた。僕はもう一度人目に見えない苦しみの中に落ちこむのを恐れ、銀貨を一枚投げ出すが早いか、匆々このカッフェを出ようとした。

「もし、もし、二十錢頂きますが、……」

僕の投げ出したのは銅貨だつた。

僕は屈辱を感じながら、ひとり往來を歩いてゐるうちにふと遠い松林の中にある僕の家を思ひ出した。それは或郊外にある僕の養父母の家ではない、唯僕を中心にした家族の爲に借りた家だ

つた。僕は彼是十年前にもかう云ふ家に暮らしてゐた。しかし或事情の爲に輕率にも父母と同居し出した。同時に又奴隷に、暴君に、力のない利己主義者に變り出した。……

前のホテルに歸つたのはもう彼是十時だつた。ずつと長い途を歩いて來た僕は僕の部屋へ歸る力を失ひ、太い丸太の火を燃やした爐の前の椅子に腰をおろした。それから僕の計畫してゐた長篇のことを考へ出した。それは推古から明治に至る各時代の民を主人公にし、大體三十餘りの短篇を時代順に連ねた長篇だつた。僕は火の粉の舞ひ上るのを見ながら、ふと　或銅像を思ひ出した。この銅像は甲冑を着、忠義の心そのもののやうに高だかと馬の上に跨つてゐた。しかし彼の敵だつたのは、——

「讃！」

僕は又遠い過去から目近い現代へすべり落ちた。そこへ幸ひにも來合せたのは或先輩の彫刻家だつた。彼は不相變天鵞絨の服を着、短い山羊髯を反らせてゐた。僕は椅子から立ち上り、彼のさし出した手を握つた。（それは僕の習慣ではない、パリやベルリンに半生を送つた彼の習慣に從つたのだつた。）が、彼の手は不思議にも爬蟲類の皮膚のやうに濕つてゐた。

「君はここに泊つてゐるのですか？」

「ええ、……」

「仕事をしに？」

「ええ、仕事もしてゐるのです。」

彼はぢつと僕の顏を見つめた。僕の目の中に探偵に近い表情を感じた。

「どうです、僕の部屋へ話しに來ては？」

僕は挑戰的に話しかけた。（この勇氣に乏しい癖に忽ち挑戰的態度をとるのは僕の惡癖の一つだつた。）すると彼は微笑しながら、「どこ、君の部屋は？」と尋ね返した。

僕等は親友のやうに肩を並べ、靜かに話してゐる外國人たちの中を僕の部屋へ歸つて行つた。彼は僕の部屋へ來ると、鏡を後ろにして腰をおろした。それからいろいろのことを話し出した。いろいろのことを？——しかし大抵は女の話だつた。僕は罪を犯した爲に地獄に墮ちた一人に違ひなかつた。が、それだけに惡德の話は愈僕を憂鬱にした。僕は一時的淸敎徒になり、それ等の女を嘲り出した。

「S子さんの唇を見給へ。あれは何人もの接吻の爲に……」

僕はふと口を噤み、鏡の中に彼の後ろ姿を見つめた。彼は丁度耳の下に黃いろい膏藥を貼りつけてゐた。

「何人もの接吻の爲に？」

「そんな人のやうに思ひますがね。」

彼は微笑して頷いてゐた。僕は彼の内心では僕の祕密を知る爲に絶えず僕を注意してゐるのを感じた。けれどもやはり僕等の話は女のことを離れなかつた。僕は彼を憎むよりも僕自身の氣の弱いのを恥ぢ、愈憂鬱にならずにはゐられなかつた。

やつと彼の歸つた後、僕はベッドの上に轉がつたまま、「暗夜行路」を讀みはじめた。主人公の精神的闘爭は一々僕には痛切だつた。僕はこの主人公に比べると、どのくらゐ僕の阿呆だつたかを感じ、いつか涙を流してゐた。同時に又涙は僕の氣もちにいつか平和を與へてゐた。が、それも長いことではなかつた。僕の右の目はもう一度半透明の齒車を感じ出した。齒車はやはりまはりながら、次第に數を殖やして行つた。僕は頭痛のはじまることを恐れ、枕もとに本を置いたまま、〇・八グラムのヴェロナァルを嚥み、兎に角ぐつすりと眠ることにした。

けれども僕は夢の中に或ブウルを眺めてゐた。そこには又男女の子供たちが何人も泳いだりもぐつたりしてゐた。僕はこのブウルを後ろに向うの松林へ歩いて行つた。すると誰か後ろから「おとうさん」と僕に聲をかけた。僕はちよつとふり返り、ブウルの前に立つた妻を見つけた。同時に又烈しい後悔を感じた。

「おとうさん、タオルは？」

「タオルは入らない。子供たちに氣をつけるのだよ。」

僕は又歩みをつづけ出した。が、僕の歩いてゐるのはいつかプラットフォオムに變つてゐた。それは田舍の停車場だつたと見え、長い生け垣のあるプラットフォオムだつた。そこには又Hと云ふ大學生や年をとつた女も佇んでゐた。彼等は僕の顏を見ると、僕の前に歩み寄り、口々に僕へ話しかけた。

「大火事でしたわね。」

「僕もやつと逃げて來たの。」

僕はこの年をとつた女に何か見覺えのあるやうに感じた。のみならず彼女と話してゐることに或愉快な興奮を感じた。そこへ汽車は煙をあげながら、靜かにプラットフォオムへ横づけになつた。僕はひとりこの汽車に乘り、兩側に白い布を垂らした寢臺の間を歩いて行つた。すると或寢臺の上にミイラに近い裸體の女が一人こちらを向いて横になつてゐた。それは又僕の復讐の神、——或狂人の娘に違ひなかつた。……

僕は目を醒ますが早いか、思はずベッドを飛び下りてゐた。僕の部屋は不相變電燈の光に明るかつた。が、どこかに翼の音や鼠のきしる音も聞えてゐた。僕は戸をあけて廊下へ出、前の爐の前へ急いで行つた。それから椅子に腰をおろしたまま、覺束ない炎を眺め出した。そこへ白い服

を着た給仕が一人焚き木を加へに歩み寄つた。

「何時？」

「三時半ぐらゐでございます。」

しかし向うのロツビイの隅には亞米利加人らしい女が一人何か本を讀みつづけた。彼女の着てゐるのは遠目に見ても綠いろのドレツスに違ひなかつた。僕は何か救はれたのを感じ、ぢつと夜のあけるのを待つことにした。長年の病苦に惱み拔いた揚句、靜かに死を待つてゐる老人のやうに。……

四　まだ？

僕はこのホテルの部屋にやつと前の短篇を書き上げ、或雜誌に送ることにした。尤も僕の原稿料は一週間の滯在費にも足りないものだつた。が、僕は僕の仕事を片づけたことに滿足し、何か精神的强壯劑を求める爲に銀座の或本屋へ出かけることにした。

冬の日の當つたアスファルトの上には紙屑が幾つもころがつてゐた。それ等の紙屑は光の加減か、いづれも薔薇の花にそつくりだつた。僕は何ものかの好意を感じ、その本屋の店へはひつて行つた。そこも亦ふだんよりも小綺麗だつた。唯目金をかけた小娘が一人何か店員と話してゐたのは僕には氣がかりにならないこともなかつた。けれども僕は往來に落ちた紙屑の薔薇の花を思ひ出し、「アナトオル・フランスの對話集」や「メリメエの書簡集」を買ふことにした。

僕は二冊の本を抱へ、或カッフェへはひつて行つた。それから一番奥のテエブルの前に珈琲の來るのを待つことにした。僕の向うには親子らしい男女が二人坐つてゐた。その息子は僕よりも若かつたものの、殆ど僕にそつくりだつた。のみならず彼等は戀人同志のやうに顏を近づけて話し合つてゐた。僕の彼等を見てゐるうちに少くとも息子は性的にも母親に慰めを與へてゐることを意識してゐるのに氣づき出した。それは僕にも覺えのある親和力の一例に違ひなかつた。同時に又現世を地獄にする或意志の一例にも違ひなかつた。しかし、――僕は又苦しみに陷るのを恐れ、丁度珈琲の來たのを幸ひ、「メリメエの書簡集」を讀みはじめた。彼はこの書簡集の中にも彼の小說の中のやうに鋭いアフォリズムを閃かせてゐた。それ等のアフォリズムは僕の氣もちをいつか鐵のやうに嚴疊にし出した。（この影響を受け易いことも僕の弱點の一つだつた。）僕は一杯の珈琲を飲み了つた後、「何でも來い」と云ふ氣になり、さつさとこのカッフェを後ろにして行つた。

僕は往來を歩きながら、いろいろの飾り窓を覗いて行つた。或額緣屋の飾り窓はベエトオヴェンの肖像畫を掲げてゐた。それは髮を逆立てた天才そのものらしい肖像畫だつた。僕はこのベエ

トオヴェンを滑稽に感ぜずにはゐられなかつた。……

そのうちにふと出合つたのは高等學校以來の舊友だつた。この應用化學の大學教授は大きい中折れ鞄を抱へ、片目だけまつ赤に血を流してゐた。

「どうした、君の目は？」

「これか？　これは唯の結膜炎さ。」

僕はふと十四五年以來、いつも親和力を感じる度に僕の目も彼の目のやうに結膜炎を起すのを思ひ出した。が、何とも言はなかつた。彼は僕の肩を叩き、僕等の友だちのことを話し出した。それから話をつづけたまま、或カッフェへ僕をつれて行つた。

「久しぶりだなあ。朱舜水の建碑式以來だらう。」

彼は葉卷に火をつけた後、大理石のテエブル越しにかう僕に話しかけた。

「さうだ。あのシュシュン……」

僕はなぜか朱舜水と云ふ言葉を正確に發音出來なかつた。それは日本語だつただけにちよつと僕を不安にした。しかし彼は無頓着にいろいろのことを話して行つた。Kと云ふ小說家のことを、彼の買つたブル・ドッグのことを、リウイサイトと云ふ毒瓦斯のことを。……

「君はちつとも書かないやうだね。『點鬼簿』と云ふのは讀んだけれども。……あれは君の自敍

傳かい？」

「うん、僕の自敍傳だ。」

「あれはちよつと病的だつたぜ、この頃は體は善いのかい？」

「不相變藥ばかり嚥んでゐる始末だ。」

「僕もこの頃は不眠症だがね。」

「僕も？——どうして君は『僕も』と言ふのだ？」

「だつて君も不眠症だつて言ふぢやないか？　不眠症は危險だぜ。……」

彼は左だけ充血した目に微笑に近いものを浮かべてゐた。僕は返事をする前に「不眠症」のシヤウの發音を正確に出來ないのを感じ出した。

「氣違ひの息子には當り前だ。」

僕は十分とたたないうちにひとり又往來を歩いて行つた。アスファルトの上に落ちた紙屑は時時僕等人間の顏のやうにも見えないことはなかつた。すると向うから斷髮にした女が一人通りかかつた。彼女は遠目には美しかつた。けれども目の前へ來たのを見ると、小皺のある上に醜い顏をしてゐた。のみならず姙娠してゐるらしかつた。僕は思はず顏をそむけ、廣い横町を曲つて行つた。が、暫らく歩いてゐるうちに痔の痛みを感じ出した。それは僕には坐浴より外に癒すとと

の出來ない痛みだつた。

「坐浴、――ペエトオヴェンもやはり坐浴をしてゐた。……」

坐浴に使ふ硫黄の匂ひは忽ち僕の鼻を襲ひ出した。しかし勿論往來にはどこにも硫黄は見えなかつた。僕はもう一度紙屑の薔薇の花を思ひ出しながら、努めてしつかりと歩いて行つた。

一時間ばかりたつた後、僕は僕の部屋にとぢこもつたまま、窓の前の机に向かひ、新らしい小説にとりかかつてゐた。ペンは僕にも不思議だつたくらゐ、ずんずん原稿用紙の上を走つて行つた。しかしそれも二三時間の後には誰か僕の目に見えないものに抑へられたやうにとまつてしまつた。僕はやむを得ず机の前を離れ、あちこちと部屋の中を歩きまはつた。僕の諦大妄想はかう云ふ時に最も著しかつた。僕は野蠻な歎びの中に僕には兩親もなければ妻子もない、唯僕のペンから流れ出した命だけあると云ふ氣になつてゐた。

けれども僕は四五分の後、電話に向はなければならなかつた。電話は何度返事をしても、唯何か曖昧な言葉を繰り返して傳へるばかりだつた。が、それは兎も角もモオルと聞えたのに違ひなかつた。僕はとうとう電話を離れ、もう一度部屋の中を歩き出した。しかしモオルと云ふ言葉だけは妙に氣になつてならなかつた。

「モオル――Mole……」

モオルは鼹鼠と云ふ英語だつた。この聯想も僕には愉快ではなかつた。が、僕は二三秒の後、Mole を la mort に綴り直した。ラ・モオルは、――死と云ふ佛蘭西語は忽ち僕を不安にした。死は姉の夫に迫つてゐたやうに僕にも迫つてゐるらしかつた。けれども僕は不安の中にも何か可笑しさを感じてゐた。のみならずいつか微笑してゐた。この可笑しさは何の爲に起るか？――それは僕自身にもわからなかつた。僕は久しぶりに鏡の前に立ち、まともに僕の影と向ひ合つた。僕の影も勿論微笑してゐた。僕はこの影を見つめてゐるうちに第二の僕のことを思ひ出した。第二の僕、――獨逸人の所謂 Doppelgaenger は仕合せにも僕自身に見えたことはなかつた。しかし亞米利加の映畫俳優になつたK君の夫人は第二の僕を帝劇の廊下に見かけてゐた。（僕は突然K君の夫人に「先達はつい御挨拶もしませんで」と言はれ、當惑したことを覺えてゐる。）それからもう故人になつた或斐脚の飜譯家もやはり銀座の或煙草屋に第二の僕を見かけてゐた。死は或は僕よりも第二の僕に來るのかも知れなかつた。若し又僕に來たとしても、――僕は鏡に後ろを向け、窓の前の机へ歸つて行つた。

四角に凝灰岩を組んだ窓は枯芝や池を覗かせてゐた。僕はこの庭を眺めながら、遠い松林の中に燒いた何冊かのノオト・ブックや未完成の戯曲を思ひ出した。それからペンをとり上げると、もう一度新らしい小説を書きはじめた。

日の光は僕を苦しめ出した。僕は實際鼠のやうに窓の前へカアテンをおろし、晝間も電燈をともしたまま、せつせと前の小説をつづけて行つた。それから仕事に疲れると、テエヌの英吉利文學史をひろげ、詩人たちの生涯に目を通した。彼等はいづれも不幸だつた。エリザベス朝の巨人たちさへ、――一代の學者だつたベン・ジョンソンさへ彼の足の親指の上に羅馬とカルセエヂとの軍勢の戰ひを始めるのを眺めたほど神經的疲勞に陷つてゐた。僕はかう云ふ彼等の不幸に殘酷な惡意に充ち滿ちた歡びを感じずにはゐられなかつた。

或東かぜの强い夜、（それは僕には善い徵だつた。）僕は地下室を拔けて往來へ出、或老人を尋ねることにした。彼は或聖書會社の屋根裏にたつた一人小使ひをしながら、祈禱や讀書に精進してゐた。僕等は火鉢に手をかざしながら、壁にかけた十字架の下にいろいろのことを話し合つた。なぜ僕の母は發狂したか？　なぜ僕の父の事業は失敗したか？　なぜ又僕は罰せられたか？――それ等の祕密を知つてゐる彼は妙に嚴かな微笑を浮かべ、いつまでも僕の相手をした。のみならず時々短い言葉に人生のカリカチュアを描いたりした。僕はこの屋根裏の隱者を尊敬しない訣には行かなかつた。しかし彼と話してゐるうちに彼も亦親和力の爲に動かされてゐることを發見した。――

「その植木屋の娘と云ふのは器量も善いし、氣立ても善いし、――それはわたしに優しくしてくれるのです。」

「いくつ？」

「ことしで十八です。」

それは彼には父らしい愛であるかも知れなかつた。しかし僕は彼の目の中に情熱を感じずにはゐられなかつた。のみならず彼の勸めた林檎はいつか黃ばんだ皮の上へ一角獸の姿を現してゐた。（僕は木目や珈琲茶碗の龜裂に度たび神話的動物を發見してゐた。）一角獸は麒麟に違ひなかつた。僕は或敵意のある批評家の僕を「九百十年代の麒麟兒」と呼んだのを思ひ出し、この十字架のかつた屋根裏も安全地帶ではないことを感じた。

「如何ですか、この頃は？」

「不相變神經ばかり苛々してね。」

「それは藥では駄目ですよ。信者になる氣はありませんか？」

「若し僕でもなれるものなら……」

「何もむづかしいことはないのです。唯神を信じ、神の子の基督を信じ、基督の行つた奇蹟を

信じさへすれば……」

「惡魔を信じることは出來ますがね。……」

「ではなぜ神を信じないのです？　若し影を信じるならば、光も信じずにはゐられないでせう？」

「しかし光のない暗もあるでせう。」

「光のない暗とは？」

僕は默るより外はなかつた。彼も亦僕のやうに暗の中を歩いてゐた。が、暗のある以上は光もあると信じてゐた。僕等の論理の異るのは唯かう云ふ一點だけだつた。しかしそれは少くとも僕には越えられない溝に違ひなかつた。……

「けれども光は必ずあるのです。その證據には奇蹟があるのですから。……奇蹟などと云ふものは今でも度たび起つてゐるのですよ。」

「それは惡魔の行ふ奇蹟は。……」

「どうして又惡魔などと云ふのです？」

僕はこの一二年の間、僕自身の經驗したことを彼に話したい誘惑を感じた。が、彼から妻子に傳はり、僕も亦母のやうに精神病院にはひることを恐れない訣にも行かなかつた。

「あすこにあるのは？」

この逞しい老人は古い書棚をふり返り、何か牧羊神らしい表情を示した。

「ドストエフスキイ全集です。『罪と罰』はお讀みですか？」

僕は勿論十年前にも四五冊のドストエフスキイに親しんでゐた。が、偶然（？）彼の言つた『罪と罰』と云ふ言葉に感動し、この本を貸して貰つた上、前のホテルへ歸ることにした。電燈の光に輝いた、人通りの多い往來はやはり僕には不快だつた。殊に知り人に遇ふことは到底堪へられないのに違ひなかつた。僕は努めて暗い往來を選び、盜人のやうに歩いて行つた。

しかし僕は暫らくの後、いつか胃の痛みを感じ出した。この痛みを止めるものは一杯のウイスキイのあるだけだつた。僕は或バアを見つけ、その戸を押してはひらうとした。けれども狹いバアの中には煙草の煙の立ちこめた中に藝術家らしい青年たちが何人も群がつて酒を飲んでゐた。のみならず彼等のまん中には耳隱しに結つた女が一人熱心にマンドリンを彈きつづけてゐた。僕は忽ち當惑を感じ、戸の中へはひらずに引き返した。するといつか僕の影の左右に搖れてゐるのを發見した。しかも僕を照らしてゐるのは無氣味にも赤い光だつた。僕は往來に立ちどまつた。けれども僕の影は前のやうに絶えず左右に動いてゐた。僕は怯づ怯づふり返り、やつとこのバアの軒に吊つた色硝子のランタアンを發見した。ランタアンは烈しい風の爲に徐ろに空中に動いて

ゐた。……

僕の次にはひつたのは或地下室のレストオランだつた。僕はそこのバアの前に立ち、ウィスキイを一杯註文した。

「ウィスキイを？ Black and White ばかりでございますが、……」

僕は曹達水の中にウィスキイを入れ、默つて一口づつ飲みはじめた。僕の隣には新聞記者らしい三十前後の男が二人何か小聲に話してゐた。のみならず佛蘭西語を使つてゐた。僕は彼等に背中を向けたまま、全身に彼等の視線を感じた。それは實際電波のやうに僕の體にこたへるものだつた。彼等は確かに僕の名を知り、僕の噂をしてゐるらしかつた。

「Bien……très mauvais……pourquoi？……」

「Pourquoi？……le diable est mort！……」

「Oui, oui……d'enfer……」

僕は銀貨を一枚投げ出し、（それは僕の持つてゐる最後の一枚の銀貨だつた。）この地下室の外へのがれることにした。夜風の吹き渡る往來は多少胃の痛みの薄らいだ僕の神經を丈夫にした。僕はラスコルニコフを思ひ出し、何ごとも懺悔したい欲望を感じた。が、それは僕自身の外にも、――いや、僕の家族の外にも悲劇を生じるのに違ひなかつた。のみならずこの欲望さへ眞實かど

うかは疑はしかつた。若し僕の神經さへ常人のやうに丈夫になれば、――けれども僕はその爲にはどこかへ行かなければならなかつた。マドリツドへ、リオへ、サマルカンドへ、……

そのうちに或店の軒に吊つた、白い小型の看板は突然僕を不安にした。それは自動車のタイアに翼のある商標を描いたものだつた。僕はこの商標に人工の翼を手よりにした古代の希臘人を思ひ出した。彼は空中に舞ひ上つた揚句、太陽の光に翼を燒かれ、とうとう海中に溺死してゐた。マドリツドへ、リオへ、サマルカンドへ、――僕はかう云ふ僕の夢を嘲笑はない訣には行かなかつた。同時に又復讐の神に追はれたオレステスを考へない訣にも行かなかつた。

僕は運河に沿ひながら、暗い往來を歩いて行つた。そのうちに或郊外にある養父母の家を思ひ出した。養父母は勿論僕の歸るのを待ち暮らしてゐるのに違ひなかつた。恐らくは僕の子供たちも、――しかし僕はそこへ歸ると、おのづから僕を束縛してしまふ或力を恐れずにはゐられなかつた。運河は波立つた水の上に遠磨船を一艘横づけにしてゐた。その又遠磨船は船の底から薄い光を洩らしてゐた。そこにも何人かの男女の家族は生活してゐるのに違ひなかつた。やはり愛し合ふ爲に憎み合ひながら。……が、僕はもう一度戰鬪的精神を呼び起し、ウィスキイの醉ひを感じたまま、前のホテルへ歸ることにした。

僕は又机に向ひ、「メリメエの書簡集」を讀みつづけた。それは又いつの間にか僕に生活力を

興へてゐた。しかし僕は晩年のメリメエの新教徒になつてゐたことを知ると、俄かに假面のかげにあるメリメエの顏を感じ出した。彼も亦やはり僕等のやうに暗の中を歩いてゐる一人だつた。暗の中を？——「暗夜行路」はかう云ふ僕には恐しい本に變りはじめた。僕は憂鬱を忘れる爲に「アナトオル・フランスの對話集」を讀みはじめた。が、この近代の牧羊神もやはり十字架を荷つてゐた。……

一時間ばかりたつた後、給仕は僕に一束の郵便物を渡しに顏を出した。それ等の一つはライプツィッヒの本屋から僕に「近代の日本の女」と云ふ小論文を書けと云ふものだつた。なぜ彼等は特に僕にかう云ふ小論文を書かせるのであらう？　のみならずこの英語の手紙は「我々は丁度日本畫のやうに黑と白の外に色彩のない女の肖像畫でも滿足である」と云ふ肉筆のP・Sを加へてゐた。僕はかう云ふ一行に Black and White と云ふウィスキイの名を想ひ出し、ずたずたにこの手紙を破つてしまつた。それから今度は手當り次第に一つの手紙の封を切り、黃いろい書簡箋に目を通した。この手紙を書いたのは僕の知らない青年だつた。しかし二三行も讀まないうちに「あなたの『地獄變』は……」と云ふ言葉は僕を苛立たせずには措かなかつた。三番目に封を切つた手紙は僕の甥から來たものだつた。僕はやつと一息つき、家事上の問題なぞを讀んで行つた。けれどもそれさへ最後へ來ると、いきなり僕を打ちのめした。

「歌集『赤光』の再版を送りますから……」

赤光！　僕は何ものかの冷笑を感じ、僕の部屋の外へ避難することにした。廊下には誰も人かげはなかつた。僕は片手に壁を抑へ、やつとロッビイへ歩いて行つた。それから椅子に腰をおろし、兎に角卷煙草に火を移すことにした。卷煙草はなぜかエエア・シップだつた。（僕はこのホテルへ落ち着いてから、いつもスタアばかり吸ふことにしてゐた。）人工の翼はもう一度僕の目の前へ浮かび出した。僕は向うにゐる給仕を呼び、スタアを二箱貰ふことにした。しかし給仕を信用すれば、スタアだけは生憎品切れだつた。

「エエア・シップならばございますが、……」

僕は頭を振つたまま、廣いロッビイを眺めまはした。僕の向うには外國人が四五人テエブルを圍んで話してゐた。しかも彼等の中の一人、——赤いワン・ピイスを着た女は小聲に彼等と話しながら、時々僕を見てゐるらしかつた。

「Mrs. Townshead……」

何か僕の目に見えないものはかう僕に囁いて行つた。ミセス・タウンズヘッドなどと云ふ名は勿論僕の知らないものだつた。たとひ向うにゐる女の名にしても、——僕は又椅子から立ち上り、發狂することを恐れながら、僕の部屋へ歸ることにした。

僕は僕の部屋へ歸ると、すぐに或精神病院へ電話をかけるつもりだつた。が、そこへはひることは僕には死ぬことに變らなかつた。僕はさんざんためらつた後、この恐怖を紛らす爲に「罪と罰」を讀みはじめた。しかし偶然開いた頁は「カラマゾフ兄弟」の一節だつた。僕は本を間違へたのかと思ひ、本の表紙へ目を落した。「罪と罰」——本は「罪と罰」に違ひなかつた。僕はこの製本屋の綴ぢ違へに、——その又綴ぢ違へた頁を開いたことに運命の指の動いてゐるのを感じ、やむを得ずそこを讀んで行つた。けれども一頁も讀まないうちに全身が震へるのを感じ出した。そこは惡魔に苦しめられるイヴァンを描いた一節だつた。イヴァンを、ストリントベルグを、モオパスサンを、或はこの部屋にゐる僕自身を。……

かう云ふ僕を救ふものは唯眠りのあるだけだつた。しかし催眠劑はいつの間か一包みも殘らずになくなつてゐた。僕は到底眠らずに苦しみつづけるのに堪へなかつた。が、絶望的な勇氣を生じ、珈琲を持つて來て貰つた上、死にもの狂ひにペンを動かすことにした。二枚、五枚、七枚、十枚、——原稿は見る見る出來上つて行つた。僕はこの小説の世界を超自然の動物に滿たしてゐた。のみならずその動物の一匹に僕自身の肖像畫を描いてゐた。けれども疲勞は徐ろに僕の頭を曇らせはじめた。僕はとうとう机の前を離れ、ベッドの上へ仰向けになつた。それから四五十分間は眠つたらしかつた。しかし又誰か僕の耳にかう云ふ言葉を囁いたのを感じ、忽ち目を醉まし

て立ち上つた。

「Le diable est mort」

凝灰岩の窓の外はいつか冷えびえと明けかかつてゐた。僕は丁度戸の前に佇み、誰もゐない部屋の中を眺めまはした。すると向うの窓硝子は斑らに外氣に曇つた上に小さな風景を現してゐた。それは黄ばんだ松林の向うに海のある風景に違ひなかつた。僕は怯づ怯づ窓の前へ近づき、この風景を造つてゐるものは實は庭の枯芝や池だつたことを發見した。けれども僕の錯覺はいつか僕の家に對する鄕愁に近いものを呼び起してゐた。

僕は九時にでもなり次第、或雜誌社へ電話をかけ、兎に角金の都合をした上、僕の家へ歸る決心をした。机の上に置いた鞄の中へ本や原稿を押しこみながら。

六　飛行機

僕は東海道線の或停車場からその奥の或避暑地へ自動車を飛ばした。運轉手はなぜかこの寒さに古いレエン・コオトをひつかけてゐた。僕はこの暗合を無氣味に思ひ、努めて彼を見ないやうに窓の外に目をやることにした。すると低い松の生えた向うに、——恐らくは古い街道に葬式が一列通るのを見つけた。白張りの提灯や龍燈はその中に加はつてゐないらしかつた。が、金銀の

遺花の薄は靜かに輿の前後に搖いで行つた。……

やつと僕の家へ歸つた後、僕は妻子や催眠藥の力により、二三日は可也平和に暮らした。僕の二階は松林の上にかすかに海を覗かせてゐた。僕はこの二階の机に向かひ、鳩の聲を聞きながら、午前だけ仕事をすることにした。鳥は鳩や鴉の外に雀も緣側へ舞ひこんだりした。それは亦僕には愉快だつた。「喜雀堂に入る。」——僕はペンを持つたまま、その度にこんな言葉を思ひ出した。

或生暖かい曇天の午後、僕は或雜貨店へインクを買ひに出かけて行つた。するとその店に並んでゐるのはセピア色のインクばかりだつた。セピア色のインクはどのインクよりも僕を不快にするのを常としてゐた。僕はやむを得ずこの店を出、人通りの少ない往來をぶらぶらひとり歩いて行つた。そこへ向うから近眼らしい四十前後の外國人が一人肩を聳かせて通りかかつた。彼はこに住んでゐる被害妄想狂の瑞典人だつた。しかも彼の名はストリントベルグだつた。僕は彼とすれ違ふ時、肉體的に何かこたへるのを感じた。

この往來は僅かに二三町だつた。が、その二三町を通るうちに丁度半面だけ黑い犬は四度も僕の側を通つて行つた。僕は横町を曲りながら、ブラック・アンド・ホワイトのウィスキイを思ひ出した。のみならず今のストリントベルグのタイも黑と白だつたのを思ひ出した。それは僕にはどうしても偶然であるとは考へられなかつた。若し偶然でないとすれば、——僕は頭だけ歩いて

ゐるやうに感じ、ちよつと往來に立ち止まつた。道ばたには針金の柵の中にかすかに虹の色を帶びた硝子の鉢が一つ捨ててあつた。この鉢は又底のまはりに翼らしい模樣を浮き上らせてゐた。そこへ松の梢から雀が何羽も舞ひ下つて來た。が、この鉢のあたりへ來ると、どの雀も皆言ひ合はせたやうに一度に空中へ逃げのぼつて行つた。……

僕は妻の實家へ行き、庭先の籐椅子に腰をおろした。庭の隅の金網の中には白いレグホオン種の鷄が何羽も靜かに歩いてゐた。それから又僕の足もとには黑犬も一匹横になつてゐた。僕は誰にもわからない疑問を解かうとあせりながら、兎に角外見だけは冷やかに妻の母や弟と世間話をした。

「靜かですね、ここへ來ると。」

「それはまだ東京よりもね。」

「ここでもうるさいことはあるのですか？」

「だつてここも世の中ですもの。」

妻の母はかう言つて笑つてゐた。實際この避暑地も亦「世の中」であるのに違ひなかつた。僕は僅かに一年ばかりの間にどのくらゐここにも罪惡や悲劇の行はれてゐるかを知り悉してゐた。徐ろに患者を毒殺しようとした醫者、養子夫婦の家に放火した老婆、妹の資産を奪はうとした辯

護士、――それ等の人々の家を見ることは僕にはいつも人生の中に地獄を見ることに異らなかつた。

「この町には氣違ひが一人ゐますね。」

「Hちやんでせう。あれは氣違ひぢやないのですよ。莫迦になつてしまつたのですよ。」

「早發性痴呆と云ふやつですね。僕はあいつを見る度に氣味が惡くつてたまりません。あいつはこの間もどう云ふ量見か、馬頭觀世音の前にお時宜をしてゐました。」

「氣味が惡くなるなんて、……もつと強くならなければ駄目ですよ。」

「兄さんは僕などよりも強いのだけれども、――」

無精髭を伸ばした妻の弟も寢床の上に起き直つたまま、いつもの通り遠慮勝ちに僕等の話に加はり出した。

「強い中に弱いところもあるから。……」

「おやおや、それは困りましたね。」

僕はかう言つた妻の母を見、苦笑しない訣には行かなかつた。すると弟も微笑しながら、遠い垣の外の松林を眺め、何かうつとりと話しつづけた。（この若い病後の弟は時々僕には肉體を脱した精神そのもののやうに見えるのだつた。）

「妙に人間離れをしてゐるかと思へば、人間的欲望もずいぶん烈しいし、……」

「善人かと思へば、惡人でもあるしさ。」

「いや、善惡と云ふよりも何かもつと反對なものが、……」

「ぢや大人の中に子供もあるのだらう。」

「さうでもない。僕にははつきりと言へないけれど、……電氣の兩極に似てゐるのかな。何しろ反對なものを一しよに持つてゐる。」

そこへ僕等を驚かしたのは烈しい飛行機の響きだつた。僕は思はず空を見上げ、松の梢に觸れないばかりに舞ひ上つた飛行機を發見した。それは翼を黄いろに塗つた、珍らしい單葉の飛行機だつた。鶏や犬はこの響きに驚き、それぞれ八方へ逃げまはつた。殊に犬は吠え立てながら、尾を捲いて緣の下へはひつてしまつた。

「あの飛行機は落ちはしないか？」

「大丈夫。……兄さんは飛行機病と云ふ病氣を知つてゐる？」

僕は卷煙草に火をつけながら、「いや」と云ふ代りに頭を振つた。

「ああ云ふ飛行機に乘つてゐる人は高空の空氣ばかり吸つてゐるものだから、だんだんこの地面の上の空氣に堪へられないやうになつてしまふのだつて。……」

妻の母の家を後ろにした後、僕は枝一つ動かさない松林の中を歩きながら、ちりぢり憂鬱になつて行つた。なぜあの飛行機はほかへ行かずに僕の頭の上を通つたのであらう？　なぜ又あのホテルは卷煙草のエエア・シツプばかり賣つてゐたのであらう？　僕はいろいろの疑問に苦しみ、人氣のない道を選つて歩いて行つた。

海は低い砂山の向うに一面に灰色に疊つてゐた。その又砂山にはブランコのないブランコ臺が一つ突つ立つてゐた。僕はこのブランコ臺を眺め、忽ち絞首臺を思ひ出した。實際又ブランコ臺の上には鴉が二三羽とまつてゐた。鴉は皆僕を見ても、飛び立つ氣色さへ示さなかつた。のみならずまん中にとまつてゐた鴉は大きい嘴を空へ擧げながら、確かに四たび聲を出した。

僕は芝の枯れた砂土手に沿ひ、別莊の多い小みちを曲ることにした。この小みちの右側にはやはり高い松の中に二階のある木造の西洋家屋が一軒白じらと立つてゐる筈だつた。（僕の親友はこの家のことを「春のゐる家」と稱してゐた。）が、この家の前へ通りかかると、そこにはコンクリイトの土臺の上にバス・タツブが一つあるだけだつた。火事――僕はすぐにかう考へ、そちらを見ないやうに歩いて行つた。すると自轉車に乘つた男が一人まつすぐに向うから近づき出した。彼は焦茶いろの鳥打ち帽をかぶり、妙にぢつと目を据ゑたまま、ハンドルの上へ身をかがめてゐた。僕はふと彼の顏に姉の夫の顏を感じ、彼の目の前へ來ないうちに横の小みちへはひることにした。しかしこの小みちのまん中にも腐つた鼠の死骸が一つ腹を上にして轉がつてゐた。

何ものかの僕を狙つてゐることは一足毎に僕を不安にし出した。そこへ半透明な齒車も一つづつ僕の視野を遮り出した。僕は愈最後の時の近づいたことを恐れながら、頸すぢをまつ直にして歩いて行つた。齒車は數の殖えるのにつれ、だんだん急にきはりはじめた。同時に又右の松林はひつそりと枝をかはしたまま、丁度細かい切子硝子を透かして見るやうになりはじめた。僕は動悸の高まるのを感じ、何度も道ばたに立ち止まらうとした。けれども誰かに押されるやうに立ち止まることさへ容易ではなかつた。

三十分ばかりたつた後、僕は僕の二階に仰向けになり、ぢつと目をつぶつたまま、烈しい頭痛をこらへてゐた。すると僕の眶の裏に銀色の羽根を鱗のやうに疊んだ翼が一つ見えはじめた。それは實際網膜の上にはつきりと映つてゐるものだつた。僕は目をあいて天井を見上げ、勿論何も天井にはそんなもののないことを確めた上、もう一度目をつぶることにした。しかしやはり銀色の翼はちやんと暗い中に映つてゐた。僕はふとこの間乘つた自動車のラディエエタア・キヤツプにも翼のついてゐたことを思ひ出した。……

そこへ誰か梯子段を慌しく昇つて來たかと思ふと、すぐに又ばたばた駈け下りて行つた。僕はその誰かの妻だつたことを知り、驚いて體を起すが早いか、丁度梯子段の前にある、薄暗い茶の

間へ顔を出した。すると妻は突つ伏したまま、息切れをこらへてゐると見え、絶えず肩を震はしてゐた。

「どうした？」

「いえ、どうもしないのです。……」

妻はやつと顔を擡げ、無理に微笑して話しつづけた。

「どうもした訣ではないのですけれどもね、唯何だかお父さんが死んでしまひさうな氣がしたものですから。……」

それは僕の一生の中でも最も恐しい經驗だつた。——僕はもうこの先を書きつづける力を持つてゐない。かう云ふ氣もちの中に生きてゐるのは何とも言はれない苦痛である。誰か僕の眠つてゐるうちにそつと絞め殺してくれるものはないか？

「齒車」は遺稿である。昭和二年十月の「文藝春秋」誌に掲載された。
但し「一レエン・コオト」のみは、生前「大調和」誌上に掲載された。

「玄鶴山房」「秋」「トロッコ」「蜜柑」「子供の病氣」「お時儀」「點鬼簿」の諸作に就て

「玄鶴山房」には彼が懷いてゐた憂鬱な氣魂が泌み出てゐる。「玄鶴山房」には壓搾の美があるかも知れない。そして又甲野は種々な家庭から家庭へ渡り歩く看護婦としての天職に苛酷なほど忠實であることが、時折その眼を上げて、徐ろに觀察の微妙をその女性らしい心に落してゐる。

「玄鶴山房」は在來の彼の物語であるよりも一層物語のさねに障つてゐるところの、彼の鋭い爪に抉られ彫られたしごとの一つである。自分はこれらの人生に各々一人づつの人間に美を感じた。玄鶴には玄鶴の美、甲野には甲野の美、お芳にはお芳の美、其他の人間にも美を會得した。これを「秋」と較べると幽かな新派哀愁とも云ふべきものか、もう熏蒸された憂鬱をたたんで「玄鶴」に聳立してゐる。しかも色で云へば「玄鶴」は澁好みであると云つてよい。讀み終へて舌さはりに殘るものは彼の澁好みであらう。

小說は落筆前の材料で一度作者を苦しめるものであることは事實であるが、彼の場合時折息苦

しい折疊をこころみてゐる時に、いつでも何か美がある。或る批評家の論文の中にチラチラ光るものを感じると言つてゐるが、それは彼の文章の構成や結構が折りたたむ襞の一種ではないか。これは又彼から見遁してはならないものだ。此チラチラ光るものは要するに彼の質の冴えのやうなもので、永年彼が知らず識らずの間に磨き上げたものだと思ふ。遺憾乍ら「河童」の中にチラチラ光るものがあれば、アートペエパアを捌くやうなそれであり、「玄鶴」の中にある冴鋭なるチラチラではない。「羅生門」の丹の剝げた柱にきりぎりすを點出した彼は、「秋」の宵口に電燈の球に止つてゐる蒼蠅を按配した。これは決してチラチラの中のものではない。彼はつひに「玄鶴」に甲野さんを按配するのは殆ど當然のことであつたらう。

或る批評家は「河童」を彼の智識的なる產物として批評した。また批評家は彼でなければ書けぬものだと所斷した。孰れも當り孰れも當らないやうであつた。自分に言はすれば「河童」は彼の苦汁のやうなおもちや箱を彼が整理して見たまでのものであるやうな氣がする。或はさうでないかも知れぬ。併乍ら彼のおもちや箱は何時もあいふふうの品に充ち、あいふふうのおもちやが一杯に詰つてゐたことは嘘ではない。——彼はこの作に於て彼の人生觀、社會的なものに一應何等かの結論を試みようとしてゐたらしかつたのだ。

彼の文章に壓搾の美のあることは既に述べた。同時に材料もともに壓搾されてゐることも見遁

されぬ。志賀直哉氏は生のままの文章で行くが、彼の縹渺の趣を缺いてゐる。しかも里見弴氏のうがちは無く谷崎潤一郎氏の壯大は覗へないかも知れないが、脈々として糸吐く蠶の縹渺を含んでゐる。又凝り上ると峻嚴な、練るほどつやを吐く糸のやうである。樹で云へば常盤木の美であるかも知れぬ。隨筆集「點心」の中に彼は文藝上の作品では簡潔なる文體が長持ちのする所以を述べてゐる。彼は文章の荒糸だけを丹念に拔いてそれを統べたり編んだりしてゐる。大正十一年作の「トロツコ」には手堅い寫實的な、淡さりした手法を用ひて效果を得てゐる。

> 或夕方、——それは二月の初旬だつた。良平は二つ下の弟や、弟と同じ年の隣の子供と、トロツコの置いてある村外れへ行つた。トロツコは泥だらけになつた儘、薄明るい中に蹲んでゐる。が、その他は何處を見ても工夫の姿は見えなかつた。三人の子供は恐る恐る、一番端にあるトロツコを押した。トロツコは三人の力が揃ふと、突然ゴロリと車輪をまはした。良平はこの音にひやりとした。しかし二度目の車輪の音は、もう彼を驚かさなかつた。……（トロツコ）

此描寫の中に無駄は一字もない。或意味で寫實の奥を撮きさぐつてゐるやうなところがある。自分は世にいふ名文といふものは知らないが、恐らく名文といふものには此種の文章が名づけられてもいいものであらうと思つてゐる。此中に壯麗も見榮も氣取もない。あつさりと餘裕のある、

まだ幾らでも書ける筆勢が見えるやうである。愛すべき小品「蜜柑」の中の「しかし汽車はその時分には、もう安々と隧道を辷りぬけて、枯草の山と山の間に挾まれた、或貧しい町はづれの踏切りに通りかかつてゐた。踏切りの近くには、いづれも見すぼらしい茸屋根や瓦屋根がごみごみと狹苦しく建てこんで、……」の數行は、その布置が稗氣の見えるまでに正直な、その上或る憂鬱のある景色を描いてゐる。「トロッコ」の人生は活潑な人生である。「蜜柑」も同樣に子女をあつかひ乍らも、人生の風雪は素早く「蜜柑」の少女を傷めてゐる。行文に一味の陰鬱が覗はれるのもその爲めであらう。併し乍ら「蜜柑」は大正八年の作であり、或意味でその後の作品である「トロッコ」の清澄簡潔には及ばない。

「子供の病氣」は彼の生活的な日錄のやうなものであるが、時に妙に思ひ上つた樣なところのある「保吉」物よりも私の愛讀するものである。これは彼の所謂素直物の一つであるかも知れない。彼の散文詩めいた物の中にも素直物が折々にある。「仕事は相不變捗どらなかつた。が、それは必ずしも子供の病氣のせゐばかりではなかつた。その中に、庭木を鳴らしながら、蒸暑い雨が降り出した。」夏の雨らしい大粒な景色が描かれてゐる。これは彼が發句に丹念してゐるために締付けられた文章と見るのは當を得てゐない、――自分は彼の大作よりも何故か寧ろ小品に近い物ばかりを擧げてゐるやうであるが、これは自分の趣味ばかりではなく彼の小品めいたものを

愛讀するからである。

彼を理智の冷徹な作家とすることも一評的であらうが、寧ろ人生には愛情のある作家であることは特記して置きたい。彼といふ人物や生活には人懷こいものがあるやうに、存外冷徹な理智者の彼に自分はその愛情の匂ひを嗅いでゐる。「お時儀」の中の人生は誰でも屢々經驗するところのものであるが、汽車から降り立つ何時も宜く逢ふ女の人に、思はずひよいとお時儀をする彼は全く彼らしい人と善い氣輕な氣持を持つてゐる。それにこの作の中に愛情を有つ彼が愉快げに佇んでゐるのが行間に泌み出てゐる。「――お嬢さんは今目の前に立つた。保吉は頭を擡げたまま、まともにお嬢さんの顏を眺めた。お嬢さんもぢつと彼の顏へ落着いた目を注いでゐる。二人は顏を見合せたなり、何ごとなしに行き違はうとした。」

「丁度その刹那だつた。彼はお嬢さんの目に何か動搖に似たものを感じた。同時に又殆、體中にお時儀をしたい衝動を感じた。」彼の謂ふところの簡潔と壓搾とが遺憾なく表現され、その折の氣もちが鮮鋭に透つてゐる。彼は此お嬢さんを可成高びしやな、上から見卸すやうにしてゐながら、遂にお時儀をしたい衝動を感じてゐるところに、彼らしい氣もちが出てゐる。これだけに絞つて書くことは却々容易なことではない。

彼の文章に型のあることは總ゆる作家に型のあると又同樣である。併乍ら彼の型は彼を苦しめ

はすれ樂にはさせてゐない。大概の作家は樂々と型に這入つて行くが、彼はいつも身悶えをしてその型に這入つて行く。しかも「玄鶴山房」あたりには、型の角がとれてゐた。内側から型にふくらみを付けたことは實際である。内容が文章の上へ出てゐる、――文章が下地になつてきらきらしてゐることに氣がつく。誰でもかうなるとは決つてゐない。「彼等は竈に封印した後、薄汚い馬車に乘つて火葬場の門を出ようとした。すると意外にもお芳が一人、煉瓦塀の前に佇んだまま、彼等の馬車に目禮してゐた。重吉はちよつと狼狽し、彼の帽を上げようとした。しかし彼等を乘せた馬車はその時にはもう傾きながら、ポプラの枯れた道を走つてゐた。」又甲野といふ看護婦を描くのに彼は刺し徹すやうな數行を四の末端で結んでゐる。彼の簡潔の中に並々ならぬ深い用意のあることを感じる。「お鈴の聲は離れに近い緣側から響いて來るらしかつた。甲野はこの聲を聞いた時、澄み渡つた鏡に向つたまま、初めてにやりと冷笑を洩らした。それからさも驚いたやうに「はい唯今」と返事をした。」彼の諸種の作品の内でこの數行の如き透徹冷嚴の旨みは、容易に見出せるものではない。殊に第二聯の逆手を打つた逆描の冴えは、他人は知らず自分の推賞したいところである。全く歴歴と目に見えるまでに描いてゐる。かういふ彼の中にあまさは微塵もなくぎりぎりに詰めてゐる。

彼の描く人生の量や幅や深淺の程度は、いつも文章と喰ひちがひなく嵌り込み、食み出してゐ

るところは少しもない。「點鬼簿」は「點鬼簿」以外のものではなく、さながらの過去帳であり點鬼簿である。そのまま四六判の書物になり小穴隆一の裝幀を思ふほど、四六判へ辷つて行く作がらである。彼のどの作も金緣の額へではなく好ましい額緣へはまり込んでゐる。

彼のどの作にも同じ種類の人生、同じい生活の再出は見られぬ。一作ごとに何等かの變化を全然異つた人生を表はすことに苦心してゐる。樂なものを後方に左うでない難しいものへ進んで行くことは特記に値する。絶えず毛色の違つたものへの進展は、樂々と書けさうなものを後廻しにさせてゐる。しかも彼は彼の自敍傳らしいものに殆手をつけてゐない。作家の最初に手を付けるものを彼は最後に廻してゐるのも、奥床しくないことはない。「就中恐る可きものは停滯だ。いや藝術に停滯といふことはない。進歩しなければ必ず退歩だ。藝術家が退歩する時、常に一種の自動作用が始まる。といふ意味は、同じやうな作品ばかりを書くことだ。」彼はさうも言ひ停滯の危險なことを警戒してゐる。藝術家の死に瀕してゐるものは同じ事ばかりを書く事であることを言つてゐる。

彼のどの作も彼自身に取り又私だけの見方としては、何時も試みらしい作のやうに思へてならなかつた。絶えず材料の轉換に悶えてゐる彼には、作を透してさへ其等の氣持がちかに感じられてゐた。あらゆる作家の内で彼ほど描かれた小説の事柄以外に、彼の「藝術」を感じられる作家

は殆ど稀なやうである。何か彼らしいものを（これは一種の文章がもつ人格的なものかも知れない。）自分はその小説以外に感じられてならなかつた。これは志賀直哉氏の場合には感じられる氣魄的な文章のもつ靈魂みたいなものである。決して亡靈ではない。（文章の靈魂とは變な言葉であるが、さういふものが存在してゐるやうな氣がするのだ。他の何者にもそれがなくとも文章にはその靈魂がこもつてゐるやうに思ふ。）彼の文章は次第に「玄鶴山房」に見るがやうに、殆内容を盛るだけの用を爲すに停まり、在來の文章そのものの肉を避けて行くやうになつた。文章のすじばかりを彼一流の氣魂で練り上げて行くのでもあつた。

彼の名文家でないことは述べたが、しかも彼は大正時代に於て文章が單なる文章の肉を必要としないところの、清癖の一文體を築き上げたこと、その一文型は在來の描寫が有つ病的なほど過剩された文字の堆積から、完全に隔れた一新様式を練り上げたことは認めてよいことである。あれだけの文章はただ簡勁だといふに片づけてはならぬ。あれだけのものを逸早く築き上げたことは誰も氣付いてゐないやうである。あらゆる文章の進んで行く速度は恐らく十年目くらゐに或變化を與へてゐる。硯友社時代と獨歩時代、そして大正時代との間に微しても明らかである。更にこの後十年程づつを距てて變化が起るとすればわが龍之介の壓搾の美も、そこでは可成りな健實な踏臺となるに違ひない。あらゆる藝術的なるものは次の時代の足つぎになることに存在するか

らである。

玄鶴山房

一

……それは小ぢんまりと出來上つた、奥床しい門構への家だつた。尤もこの界隈にはかう云ふ家も珍しくはなかつた。が、「玄鶴山房」の額や塀越しに見える庭木などはどの家よりも數奇を凝らしてゐた。

この家の主人、堀越玄鶴は畫家としても多少は知られてゐた。しかし資産を作つたのはゴム印の特許を受けた爲だつた。或はゴム印の特許を受けてから地所の賣買をした爲だつた。現に彼が持つてゐた郊外の或地面などは生姜さへ碌に出來ないらしかつた。けれども今はもう赤瓦の家や青瓦の家の立ち並んだ所謂「文化村」に變つてゐた。……

しかし「玄鶴山房」は兎に角小ぢんまりと出來上つた、奥床しい門構への家だつた。殊に近頃は見越しの松に雪よけの繩がかかつたり、玄關の前に敷いた枯れ松葉に藪柑子の實が赤らんだり、一層風流に見えるのだつた。のみならずこの家のある横町も殆ど人通りと云ふものはなかつた。

豆腐屋さへそこを通る時には荷を大通りへおろしたなり、喇叭を吹いて通るだけだつた。

「玄鶴山房――玄鶴と云ふのは何だらう？」

たまたまこの家の前を通りかかつた、髪の毛の長い畫學生は細長い繪の具箱を小脇にしたまま、同じ金釦の制服を着たもう一人の畫學生にかう言つたりした。

「何だかな、まさか嚴格と云ふ洒落でもあるまい。」

彼等は二人とも笑ひながら、氣輕にこの家の前を通つて行つた。そのあとには唯凍て切つた道に彼等のどちらかが捨てて行つた「ゴルデン・バット」の吸ひ殼が一本、かすかに青い一すぢの煙を細ぼそと立ててゐるばかりだつた。……

二

重吉は玄鶴の婿になる前から或銀行へ勤めてゐた。從つて家に歸つて來るのはいつも電燈のともる頃だつた。彼はこの數日以來、門の内へはひるが早いか、忽ち妙な臭氣を感じた。それは老人には珍しい肺結核の床に就いてゐる玄鶴の息の匂だつた。が、勿論家の外にはそんな匂の出る筈はなかつた。冬の外套の腋の下に折鞄を抱へた重吉は玄關前の踏み石を歩きながら、かういふ彼の神經を怪まない訣には行かなかつた。

玄鶴は「離れ」に床をとり、横になつてゐない時には夜着の山によりかかつてゐた。重吉は外套や帽子をとると、必ずこの「離れ」へ顔を出し、「唯今」とか「けふは如何ですか」とか言葉をかけるのを常としてゐた。しかし「離れ」の闕の肉へは滅多に足も入れたことはなかつた。それは舅の肺結核に感染するのを怖れる爲でもあり、又一つには息の匂を不快に思ふ爲でもあつた。玄鶴は彼の顔を見る度にいつも唯「ああ」とか「お歸り」とか答へた。その聲は又力の無い、聲よりも息に近いものだつた。重吉は舅にかう言はれると、時々彼の不人情に後ろめいた思ひもしない訣ではなかつた。けれども「離れ」へはひることはどうも彼には無氣味だつた。

それから重吉は茶の間の鄰りにやはり床に就いてゐる姑のお烏を見舞ふのだつた。お烏は玄鶴の寢こまない前から、――七八年前から腰拔けになり、便所へも通へない體になつてゐた。玄鶴が彼女を貰つたのは彼女が或大藩の家老の娘と云ふ外にも器量望みからだと云ふことだつた。彼女はそれだけに年をとつても、どこか目などは美しかつた。しかしこれも床の上に坐り、丹念に白足袋などを繕つてゐるのは餘りミイラと變らなかつた。重吉はやはり彼女にも「お母さん、けふはどうですか？」と云ふ、手短な一語を殘したまま、六疊の茶の間へはひるのだつた。

妻のお鈴は茶の間にゐなければ、信州生まれの女中のお松と狹い臺所に働いてゐた。小綺麗に片づいた茶の間は勿論、文化竈を据ゑた臺所さへ舅や姑の居間よりも遙かに重吉には親しかつた。

彼は一時は知事などにもなつた或政治家の次男だつた。が、豪傑肌の父親よりも昔の女流歌人だつた母親に近い秀才だつた。それは又彼の人懷こい目や細つそりした顎にも明らかだつた。重吉はこの茶の間へはひると、洋服を和服に着換へた上、樂々と長火鉢の前に坐り、安い葉卷を吹かしたり、今年やつと小學校にはひつた一人息子の武夫にからかつたりした。

重吉はいつもお鈴や武夫とチヤブ臺を圍んで食事をした。彼等の食事は賑かだつた。が、近頃は「賑か」と云つても、どこか又窮窟にも遠ひなかつた。それは唯玄鶴につき添ふ甲野と云ふ看護婦の來てゐる爲だつた。尤も武夫は「甲野さん」がゐても、ふざけるのに少しも變らなかつた。いや、或は「甲野さん」がゐる爲に餘計ふざける位だつた。お鈴は時々眉をひそめ、かう云ふ武夫を睨んだりした。しかし武夫はきよとんとしたまま、わざと大仰に茶碗の飯を掻きこんで見せたりするだけだつた。重吉は小說などを讀んでゐるだけに武夫のはしやぐのにも「男」を感じ、不快になることもないではなかつた。が、大抵は微笑したぎり、默つて飯を食つてゐるのだつた。

「玄鶴山房」の夜は靜かだつた。朝早く家を出る武夫は勿論、重吉夫婦も大抵は十時には床に就くことにしてゐた。その後でもまだ起きてゐるのは九時前後から夜伽をする看護婦の甲野ばかりだつた。甲野は玄鶴の枕もとに赤あかと火の起つた火鉢を抱へ、居睡りもせずに坐つてゐた。

玄鶴は、――玄鶴も時々は目を醒ましてゐた。が、湯たんぽが冷えたとか、濕布が乾いたとか云

ふ以外に殆ど口を利いたことはなかつた。かう云ふ「離れ」に聞えて來るものは植え込みの竹の戰ぎだけだつた。甲野は薄ら寒い靜かさの中にぢつと玄鶴を見守つたまま、いろいろのことを考へてゐた。この一家の人々の心もちや彼女自身の行く末などを。……

三

或雪の晴れ上つた午後、二十四五の女が一人、か細い男の子の手を引いたまま、引き窓越しに青空の見える堀越家の臺所へ顔を出した。重吉は勿論家にゐなかつた。丁度ミシンをかけてゐたお鈴は多少豫期はしてゐたものの、ちよつと當惑に近いものを感じた。しかし兎に角この客を迎へに長火鉢の前を立つて行つた。客は臺所へ上つた後、彼女自身の履き物や男の子の靴を揃へ直した。(男の子は白いスウェエタアを着てゐた。)彼女がひけ目を感じてゐることはかう云ふ所作だけにも明らかだつた。が、それも無理はなかつた。彼女はこの五六年以來、東京の或近在に玄鶴が公然と圍つて置いた女中上りのお芳だつた。

お鈴はお芳の顔を見た時、存外彼女が老けたことを感じた。しかもそれは顔ばかりではなかつた。お芳は四五年以前には圓まると肥つた手をしてゐた。が、年は彼女の手さへ靜脈の見えるほど細らせてゐた。それから彼女が身につけたものも、——お鈴は彼女の安ものの指環に何か世帶

じみた寂しさを感じた。

「これは兄が檀那樣に差し上げてくれと申しましたから。」

お芳は愈氣後れのしたやうに古い新聞紙の包みを一つ、茶の間へ膝を入れる前にそつと臺所の隅へ出した。折から洗ひものをしてゐたお松はせつせと手を動かしながら、水々しい銀杏返しに結つたお芳を時々尻目に窺つたりしてゐた。が、この新聞紙の包みを見ると、更に惡意のある表情をした。それは又實際文化竈や華奢な皿小鉢と調和しない惡臭を放つてゐるのに違ひなかつた。お芳はお松を見なかつたものの、少くともお鈴の顔色に妙なけはひを感じたと見え「これは、あの、大蒜でございます」と說明した。それから指を噛んでゐた子供に「さあ、坊ちやん、お時宜なさい」と聲をかけた。男の子は勿論玄鶴がお芳に生ませた文太郎だつた。この子供をお芳が「坊ちやん」と呼ぶのはお鈴には如何にも氣の毒だつた。けれども彼女の常識はすぐにそれもかう云ふ女には仕かたがないことと思ひ返した。お鈴はさりげない顔をしたまま、茶の間の隅に坐つた親子に有り合せの菓子や茶などをすすめ、玄鶴の容態を話したり、文太郎の機嫌をとつたりし出した。……

玄鶴はお芳を圍ひ出した後、省線電車の乘り換へも苦にせず、一週間に一二度づつは必ず妾宅へ通つて行つた。お鈴はかう云ふ父の氣もちに始めのうちは嫌惡を感じてゐた。「ちつとはお母

さんの手前も考へれば善いのに、」――そんなことも度たび考へたりした。尤もお鳥は何ごとも諦め切つてゐるらしかつた。しかしお鈴はそれだけ一層母を氣の毒に思ひ、父が妾宅へ出かけた後でも母には「けふは詩の會ですつて」などと白々しい謊をついたりしてゐた。その謊が役に立たないことは彼女自身も知らないのではなかつた。が、時々母の顏に冷笑に近い表情を見ると、謊をついたことを後悔する、――と云ふよりも寧ろ彼女の心も汲み分けてくれない腰ぬけの母に何か情無さを感じ勝ちだつた。

お鈴は父を送り出した後、一家のことを考へる爲にミシンの手をやめるのも度たびだつた。玄鶴はお芳を圍ひ出さない前にも彼女には「立派なお父さん」ではなかつた。しかも勿論そんなことは氣の優しい彼女にはどちらでも善かつた。唯彼女が氣がかりだつたのは父が書畫骨董までもずんずん妾宅へ運ぶことだつた。お鈴はお芳が女中だつた時から、彼女を惡人と思つたことはなかつた。いや、寧ろ人並みよりも内氣な女と思つてゐた。が、東京の或場末に希屋をしてゐるお芳の兄は何をたくらんでゐるかわからなかつた。實際又彼は彼女の目には妙に惡賢い男らしかつた。お鈴は時々重吉をつかまへ、彼女の心配を打ち明けたりした。けれども彼は取り合はなかつた。「僕からお父さんに言ふ訣には行かない。」――お鈴は彼にかう言はれて見ると、默つてしまふより外はなかつた。

「まさかお父さんも羅兩峯の畫がお芳にわかるとも思つてゐないんでせうが。」

重吉も時たまお鳥にはそれとなしにこんなことも話したりしてゐた。が、お鳥は重吉を見上げ、いつも唯苦笑してかう言ふのだつた。

「それがお父さんの性分なのさ。何しろお父さんはあたしにさへ『この硯はどうだ？』などと言ふ人なんだからね。」

しかしそんなことも今になつて見れば、誰にも莫迦莫迦しい心配だつた。玄鶴は今年の冬以來、どつと病の重つた爲に妾宅通ひも出來なくなると、重吉が持ち出した手切れ話に（尤もその話の條件などは事實上彼よりもお鳥やお鈴が拵へたと言ふのに近いものだつた。）存外素直に承諾した。それは又お鈴が恐れてゐたお芳の兄も同じことだつた。お芳は千圓の手切れ金を貰ひ、上總の或海岸にある兩親の家へ歸つた上、月々文太郎の養育料として若干の金を送つて貰ふ、――彼はかう云ふ條件に少しも異存を唱へなかつた。のみならず妾宅に置いてあつた玄鶴の祕藏の煎茶道具なども催促されぬうちに運んで來た。お鈴は前に疑つてゐただけに一層彼に好意を感じた。

「就きましては、妹のやつが若しお手でも足りませんやうなら、御看病に上りたいと申してをりますんですが。」

お鈴はこの頼みに應じる前に腰ぬけの母に相談した。それは彼女の失策と云つても差し支へな

いものに違ひなかつた。お鳥は彼女の相談を受けると、あしたにもお芳に文太郎をつれて來て貰ふやうに勸め出した。お鈴は母の氣もちの外にも一家の空氣の擾されるのを惧れ、何度も母に考へ直させようとした（その癖又一面には父の玄鶴とお芳の兄との中間に立つてゐる關係上、いつか素氣なく先方の頼みを斷れない氣もちにも落ちこんでゐた。）が、お鳥は彼女の言葉をどうしても素直には取り上げなかつた。

「これがまだあたしの耳へはひらない前ならば格別だけれども――お芳の手前も羞しいやね。」

お鈴はやむを得ずお芳の兄にお芳の來ることを承諾した。それも亦或は世間を知らない彼女の失策だつたかも知れなかつた。現に重吉は銀行から歸り、お鈴にこの話を聞いた時、女のやうに優しい眉の間にちよつと不快らしい表情を示した。「そりや人手が殖えることは難有いにも違ひないがね。……お父さんにも一應話して見れば善いのに。お父さんから斷るのならばお前にも責任のない訣なんだから。」――そんなことも口に出して言つたりした。お鈴はいつになく鬱ぎこんだまま、「さうだつたわね」などと返事をしてゐた。しかし玄鶴に相談することは、――お芳に勿論未練のある瀕死の父に相談することは彼女には今になつて見ても出來ない相談に違ひなかつた。

……お鈴はお芳親子を相手にしながら、かう云ふ曲折を思ひ出したりした。お芳は長火鉢に手

もかさず、途絶え勝ちに彼女の兄のことや文太郎のことを話してゐた。彼女の言葉は四五年前のやうに「それは」を S-rya と發音する田舍訛りを改めなかつた。お鈴はこの田舍訛りにいつか彼女の心もちも或氣安さを持ち出したのを感じた。同時に又襖一重向うに咳一つしずにゐる母のお鳥に何か漠然とした不安も感じた。

「ぢや一週間位はゐてくれられるの？」

「はい、こちら樣さへお差支へございませんければ。」

「でも着換へ位なくちやいけなかないの？」

「それは兄が夜分にでも屆けると申してをりましたから。」

お芳はかう答へながら、退屈らしい文太郎に懐のキャラメルを出してやつたりした。

「ぢやお父さんにさう言つて來ませう。お父さんもすつかり弱つてしまつてね。障子の方へ向つてゐる耳だけ霜焼けが出來たりしてゐるのよ。」

お鈴は長火鉢の前を離れる前に何となしに鐵瓶をかけ直した。

「お母さん。」

お鳥は何か返事をした。それはやつと彼女の聲に目を醒ましたらしい粘り聲だつた。

「お母さん。お芳さんが見えましたよ。」

お鈴はほつとした氣もちになり、お芳の顔を見ないやうに早速長火鉢の前を立ち上つた。それから次の間を通りしなにもう一度「お芳さんが」と聲をかけた。お鳥は横になつたまま、夜着の襟に口もとを埋めてゐた。が、彼女を見上げると、目だけに微笑に近いものを浮かべ、「おや、まあ、よく早く」と返事をした。お鈴ははつきりと彼女の背中にお芳の來ることを感じながら、雪のある庭に向つた廊下をそはそは「離れ」へ急いで行つた。

「離れ」は明るい廊下から突然はひつて來たお鈴の目には實際以上に薄暗かつた。玄鶴は丁度起き直つたまま、甲野に新聞を讀ませてゐた。が、お鈴の顔を見ると、いきなり「お芳か？」と聲をかけた。それは妙に切迫した、詰問に近い嗄れ聲だつた。お鈴は襖側に佇んだなり、反射的に「ええ」と返事をした。それから、――誰も口を利かなかつた。

「すぐにここへよこしますから。」

「うん。……お芳一人かい？」

「いいえ。……」

玄鶴は默つて頷いてゐた。

「ぢや甲野さん、ちよつとこちらへ。」

お鈴は甲野よりも一足先に小走りに廊下を急いで行つた。丁度雪の殘つた棕櫚の葉の上には鶯

鵠が一羽尾を振つてゐた。しかし彼女はそんなことよりも病人臭い「離れ」の中から何か氣味の惡いものがついて來るやうに感じてならなかつた。

四

お芳が泊りこむやうになつてから、一家の空氣は目に見えて險惡になるばかりだつた。それはまづ武夫が文太郎をいぢめることから始まつてゐた。文太郎は父の玄鶴よりも母のお芳に似た子供だつた。しかも氣の弱い所まで母のお芳に似た子供だつた。お鈴は勿論かう云ふ子供に同情しない訣ではないらしかつた。が時々は文太郎を意氣地なしと思ふこともあるらしかつた。

看護婦の甲野は職業がら、冷やかにこのありふれた家庭的悲劇を眺めてゐた、――と云ふよりも寧ろ享樂してゐた。彼女の過去は暗いものだつた。彼女は病家の主人だの病院の醫者だのとの關係上、何度一塊の青酸加里を嚥まうとしたことだか知れなかつた。この過去はいつか彼女の心に他人の苦痛を享樂する病的な興味を植ゑつけてゐた。彼女は堀越家へはひつて來た時、腰ぬけのお鳥が便をする度に手を洗はないのを發見した。「この家のお嫁さんは氣が利いてゐる。あたしたちにも氣づかないやうに水を持つて行つてやるやうだから。」――そんなことも一時は疑深い彼女の心に影を落した。が、四五日ゐるうちにそれは全然お嬢樣育ちのお鈴の手落ちだつたの

を發見した。彼女はこの發見に何か滿足に近いものを感じ、お鳥の便をする度に洗面器の水を運んでやつた。

「甲野さん、あなたのおかげさまで人間並みに手が洗へます。」

お鳥は手を合せて涙をこぼした。甲野はお鳥の喜びには少しも心を動かさなかつた。しかしそれ以來三度に一度は水を持つて行かなければならぬお鈴を見ることは愉快だつた。從つてかう云ふ彼女には子供たちの喧嘩も不快ではなかつた。彼女は玄鶴にはお芳親子に同情のあるらしい素振りを示した。同時に又お鳥にはお芳親子に惡意のあるらしい素振りを示した。それはたとひ徐ろにもせよ、確實に效果を與へるものだつた。

お芳が泊つてから一週間ほどの後、武夫は又文太郎と喧嘩をした。喧嘩は唯豚の尻つ尾は牛の尻つ尾よりも太いとか細いとか云ふことから始まつてゐた。武夫は彼の勉强部屋の隅に、——玄關の隣の四疊半の隅にか細い文太郎を押しつけた上、さんざん打つたり蹴つたりした。そこへ丁度來合せたお芳は泣き聲も出ない文太郎を抱き上げ、かう武夫をたしなめにかゝつた。

「坊ちやん、弱いものいぢめをなすつていけません。」

それは內氣な彼女には珍らしい棘のある言葉だつた。武夫はお芳の權幕に驚き、今度は彼自身泣きながら、お鈴のゐる茶の間へ逃げこもつた。するとお鈴もかつとしたと見え、手ミシンの仕

事をやりかけたまま、お芳親子のゐる所へ無理八理に武夫を引きずつて行つた。

「お前が一體我儘なんです。さあ、お芳さんにおあやまりなさい、ちやんと手をついておあやまりなさい。」

お芳はかう云ふお鈴の前に文太郎と一しよに涙を流し、平あやまりにあやまる外はなかつた。その又仲裁役を勤めるものは必ず看護婦の甲野だつた。甲野は顏を赤めたお鈴を一生懸命に押し戻しながら、いつももう一人の人間の、——ぢつとこの騷ぎを聞いてゐる玄鶴の心もちを想像し、內心には冷笑を浮かべてゐた。が、勿論そんな素ぶりは決して顏色にも見せたことはなかつた。

けれども一家を不安にしたものは必しも子供の喧嘩ばかりではなかつた。お芳は又いつの間にか何ごともあきらめ切つたらしいお鳥の嫉妬を煽つてゐた。尤もお鳥はお芳自身には一度も怨みなどを言つたことはなかつた。（これは又五六年前、お芳がまだ女中部屋に寢起きしてゐた頃も同じだつた。）が、全然關係のない重吉に何かと當り勝ちだつた。重吉は勿論とり合はなかつた。お鈴はそれを氣の毒に思ひ、時々母の代りに詫びたりした。しかし彼は苦笑したぎり、「お前までヒステリイになつては困る」と話を反らせるのを常としてゐた。

甲野はお鳥の嫉妬にもやはり興味を感じてゐた。お鳥の嫉妬それ自身は勿論、彼女が重吉に當る氣もちも甲野にははつきりとわかつてゐた。のみならず彼女はいつの間にか彼女自身も重吉夫

婦に嫉妬に近いものを感じてゐた。お鈴は彼女には「お嬢様」だつた。重吉も――重吉は兎に角世間並みに出來上つた男に違ひなかつた。が、彼女の輕蔑する一匹の雄にも違ひなかつた。かう云ふ彼等の幸福は彼女には殆ど不正だつた。彼女はこの不正を矯める爲に（！）重吉に馴れ馴れしい素振りを示した。それは或は重吉には何ともないものかも知れなかつた。けれどもお鳥を苛立たせるには絶好の機會を與へるものだつた。お鳥は膝頭も露はにしたまま、「重吉、お前はあたしの娘では――腰ぬけの娘では不足なのかい？」と毒々しい口をきいたりした。

しかしお鈴だけはその爲に重吉を疑つたりはしないらしかつた。いや、實際甲野にも氣の毒に思つてゐるらしかつた。甲野はそこに不滿を持つたばかりか、今更のやうに人の善いお鈴を輕蔑せずにはゐられなかつた。が、いつか重吉が彼女を避け出したのは愉快だつた。のみならず彼女を避けてゐるうちに反て彼女に男らしい好奇心を持ち出したのは愉快だつた。彼は前には甲野がゐる時でも、豪所の側の風呂へはひる爲に裸になることをかまはなかつた。けれども近頃ではそんな姿を一度も甲野に見せないやうになつた。それは彼が羽根を抜いた雄鷄に近い彼の體を羞ぢてゐる爲に違ひなかつた。甲野はかう云ふ彼を見ながら、（彼の顏も亦雀斑だらけだつた。）一體彼はお鈴以外の誰に惚れられるつもりだらうなどと祕かに彼を嘲つたりしてゐた。

或霜曇りに曇つた朝、甲野は彼女の部屋になつた玄關の三疊に鏡を据ゑ、いつも彼女が結びつ

けたオオル・バックに髪を結びかけてゐた。それは丁度愈お芳が田舍へ歸らうと言ふ前日だつた。お芳がこの家を去ることは重吉夫婦には嬉しいらしかつた。が、反つてお鳥には一層苛立たしさを與へるらしかつた。甲野は髪を結びながら、甲高いお鳥の聲を聞き、いつか彼女の友だちが話した或女のことを思ひ出した。彼女はパリに住んでゐるうちにだんだん烈しい懷鄕病に落ちこみ、夫の友だちが歸朝するのを幸ひ、一しよに船へ乘りこむことにした。長い航海も彼女には存外苦痛ではないらしかつた。しかし彼女は紀州沖へかかると、急になぜか興奮しはじめ、とうとう海へ身を投げてしまつた。日本へ近づけば近づくほど、懷鄕病も逆に昂ぶつて來る、――甲野は靜かに油つ手を拭き、腰ぬけのお鳥の嫉妬は勿論、彼女自身の嫉妬にもやはりかう云ふ神祕な力が働いてゐることを考へたりしてゐた。

「まあ、お母さん、どうしたんです？　こんな所まで這ひ出して來て。お母さんつたら。――甲野さん、ちよつと來て下さい。」

お鈴の聲は「離れ」に近い緣側から響いて來るらしかつた。甲野はこの聲を聞いた時、澄み渡つた鏡に向つたまま、始めてにやりと冷笑を洩らした。それからさも驚いたやうに「はい唯今」と返事をした。

五

玄鶴はだんだん衰弱して行つた。彼の永年の病苦は勿論、彼の背中から腰へかけた床ずれの痛みも烈しかつた。彼は時々唸り聲を擧げ、僅かに苦しみを紛らせてゐた。しかし彼を惱ませたものは必しも肉體的苦痛ばかりではなかつた。彼はお芳の泊つてゐる間は多少の慰めを受けた代りにお鳥の嫉妬や子供たちの喧嘩にしつきりない苦しみを感じてゐた。けれどもそれはまだ善かつた。玄鶴はお芳の去つた後は恐しい孤獨を感じた上、長い彼の一生と向ひ合はない訣には行かなかつた。

玄鶴の一生はかう云ふ彼には如何にも淺ましい一生だつた。成程ゴム印の特許を受けた當座は——花札や酒に日を暮らした當座は比較的彼の一生でも明るい時代には違ひなかつた。しかしそこにも倚賴の嫉妬や彼の利益を失ふまいとする彼自身の焦燥の念は絶えず彼を苦しめてゐた。またしてお芳を圍ひ出した後は、——彼は家庭のいざこざの外にも彼等の知らない金の工面にいつも重荷を背負ひつづけだつた。しかも更に淺ましいことには年の若いお芳に惹かれてゐたものの、少くともこの一二年は何度内心にお芳親子を死んでしまへと思つたか知れなかつた。

「淺ましい？——しかしそれも考へて見れば、格別わしだけに限つたことではない。」

彼は夜などはかう考へ、彼の親戚や知人のことを一々細かに思ひ出したりした。彼の妻の父親は唯「憲政を擁護する爲に」彼よりも腕の利かない敵を何人も社會的に殺してゐた。それから彼に一番親しい或年輩の骨董屋は先妻の娘に通じてゐた。それから或辯護士は供託金を費消してゐた。それから或篆刻家は、——しかし彼等の犯した罪は不思議にも彼の苦しみには何の變化も與へなかつた。のみならず逆に生そのものにも暗い影を擴げるばかりだつた。

「何、この苦しみも長いことはない。お目出度くなつてしまひさへすれば……」

これは玄鶴にも殘つてゐたたつた一つの慰めだつた。彼は心身に食ひこんで來るいろいろの苦しみを紛らす爲に樂しい記憶を思ひ起さうとした。けれども彼の一生は前にも言つたやうに淺ましかつた。若しそこに少しでも赫かしい一面があるとすれば、それは唯何も知らない幼年時代の記憶だけだつた。彼は度たび夢うつつの間に彼の兩親の住んでゐた信州の或山峽の村を、——殊に石を置いた板葺き屋根や蠶臭い桑ボヤを思ひ出した。が、その記憶もつづかなかつた。彼は時時唸り聲の間に觀音經を唱へて見たり、昔のはやり歌をうたつて見たりした。しかも「妙音觀世音、梵音海潮音、勝彼世間音」を唱へた後、「かつぽれ、かつぽれ」をうたふことは滑稽にも彼には勿體ない氣がした。

「寢るが極樂。寢るが極樂……」

玄鶴は何も彼も忘れる爲に唯ぐつすり眠りたかつた。實際又甲野は彼の爲に催眠藥を與へる外にもヘロインなどを注射してゐた。けれども彼には眠りさへいつも安らかには限らなかつた。彼は時々夢の中にお芳や文太郎に出合つたりした。それは彼には、――夢の中の彼には明るい心もちのするものだつた。（彼は或夜の夢の中にはまだ新しい花札の「櫻の二十」と話してゐた。しかもその又「櫻の二十」は四五年前のお芳の顏をしてゐた。）しかしそれだけに目の醒めた後は一層彼を見じめにした。玄鶴はいつか眠ることにも恐怖に近い不安を感ずるやうになつた。

大晦日もそろそろ近づいた或午後、玄鶴は仰向けに横たはつたなり、枕もとの甲野へ聲をかけた。

「甲野さん、わしはな、久しく褌をしめたことがないから、晒し木綿を六尺買はせて下さい。」

晒し木綿を手に入れることはわざわざ近所の呉服屋へお松を買ひにやるまでもなかつた。

「しめるのはわしが自分でしめます。ここへ疊んで置いて行つて下さい。」

玄鶴はこの褌を便りに、――この褌に縊れ死ぬことを便りにやつと短い半日を暮した。しかし床の上に起き直ることさへ人手を借りなければならぬ彼には容易にその機會も得られなかつた。のみならず死はいざとなつて見ると、玄鶴にもやはり恐しかつた。彼は薄暗い電燈の光に黄檗の一行ものを眺めたまま、未だに生を貪らずにはゐられぬ彼自身を嘲つたりした。

「甲野さん、ちよつと起して下さい。」

それはもう夜の十時頃だつた。

「わしはな、これからひと眠りします。あなたも御遠慮なくお休みなすつて下さい。」

甲野は妙に玄鶴を見つめ、かう素つ氣ない返事をした。

「いえ、わたくしは起きてをります。これがわたくしの勤めでございますから。」

玄鶴は彼の計畫も甲野の爲に看破られたのを感じた。が、ちよつと頷いたぎり、何も言はずに狸寢入りをした。甲野は彼の枕もとに婦人雜誌の新年號をひろげ、何か讀み耽けつてゐるらしかつた。玄鶴はやはり蒲團の側の褌のことを考へながら、薄目に甲野を見守つてゐた。すると――急に可笑しさを感じた。

「甲野さん。」

甲野も玄鶴の顏を見た時はさすがにぎよつとしたらしかつた。玄鶴は夜着によりかかつたまま、いつかとめどなしに笑つてゐた。

「なんでございます？」

「いや、何でもない。何にも可笑しいことはありません。――」

玄鶴はまだ笑ひながら、細い右手を振つて見せたりした。

「今度は……なぜかかう可笑しうなつてな。……今度はどうか横にして下さい。」

一時間ばかりたつた後、玄鶴はいつか眠つてゐた。その晩は夢も恐しかつた。彼は樹木の茂つた中に立ち、腰の高い障子の隙から茶室めいた部屋を覗いてゐた。そこには又まる裸の子供が一人、こちらへ顔を向けて横になつてゐた。それは子供とは云ふものの、老人のやうに皺くちやだつた。玄鶴は聲を擧げようとし、寢汗だらけになつて目を醒ました。……

「離れ」には誰も來てゐなかつた。のみならずまだ薄暗かつた。まだ？——しかし玄鶴は置き時計を見、彼是正午に近いことを知つた。彼の心は一瞬間、ほつとしただけに明るかつた。けれども又いつものやうに忽ち陰鬱になつて行つた。彼は仰向けになつたまま、彼自身の呼吸を數へてゐた。それは丁度何ものかに「今だぞ」とせかれてゐる氣もちだつた。玄鶴はそつと褌を引き寄せ、彼の頭に卷つけると、兩手でぐつと引つばるやうにした。

そこへ丁度顔を出したのはまるまると着膨れた武夫だつた。

「やあ、お爺さんがあんなことをしてゐらあ。」

武夫はかう囃しながら、一散に茶の間へ走つて行つた。

六

一週間ばかりたつた後、玄鶴は家族たちに圍まれたまま、肺結核の爲に絶命した。彼の告別式は盛大（！）だつた。（唯、腰ぬけのお鳥だけはその式にも出る訣に行かなかつた。）彼の家に集まつた人々は重吉夫婦に悔みを述べた上、白い綸子に蔽はれた彼の柩の前に燒香した。が、門を出る時には大抵彼のことを忘れてゐた。尤も彼の故朋輩だけは例外だつたのに違ひなかつた。

「あの爺さんも本望だつたらう。若い妾も持つてゐれば、小金もためてゐたんだから。」——彼等は誰も同じやうにこんなことばかり話し合つてゐた。

彼の柩をのせた葬用馬車は一輛の馬車を從へたまま、日の光も落ちない師走の町を或火葬場へ走つて行つた。薄汚い後の馬車に乘つてゐるのは重吉や彼の從弟だつた。彼の從弟の大學生は馬車の動搖を氣にしながら、重吉と餘り話もせずに小型の本に讀み耽つてゐた。それは Liebknecht の「追憶錄」の英譯本だつた。が、重吉は通夜疲れの爲にうとうと居睡りをしてゐなければ、窓の外の新開町を眺め、「この邊もすつかり變つた」などと氣のない獨り語を洩らしてゐた。

二輛の馬車は霜どけの道をやつと火葬場へ辿り着いた。しかし豫め電話をかけて打ち合せて置いたのにも關らず、一等の竈は滿員になり、二等だけ殘つてゐると云ふことだつた。それは彼等

にはどちらでも善かつた。が、重吉は易よりも寧ろお鈴の思惑を考へ、半月形の窓越しに熱心に事務員と交渉した。「實は手遅れになつた病人だしするから、せめて火葬にする時だけは一等にしたいと思ふんですがね。」——そんな謊もついて見たりした。それは彼の豫期したよりも效果の多い謊らしかつた。

「ではかうしませう。一等はもう滿員ですから、特別に一等の料金で特等で燒いて上げることにしませう。」

重吉は幾分か間の惡さを感じ、何度も事務員に禮を言つた。事務員は眞鍮の眼鏡をかけた好人物らしい老人だつた。

「いえ、何、お禮には及びません。」

彼等は竈に封印した後、薄汚い馬車に乘つて火葬場の門を出ようとした。すると意外にもお芳が一人、煉瓦塀の前に佇んだまま、彼等の馬車に目禮してゐた。重吉はちよつと狼狽し、彼の帽を上げようとした。しかし彼等を乘せた馬車はその時にはもう傾きながら、ポプラアの枯れた道を走つてゐた。

「あれですね？」

「うん、……俺たちの來た時もあすこにゐたかしら。」

「さあ、乞食ばかりゐたやうに思ひますがね。……あの女はこの先どうするでせう？」

重吉は一本の敷島に火をつけ、出來るだけ冷淡に返事をした。

「あさ、どう云ふことになるか。……」

彼の從弟は默つてゐた。が、彼の想像は上總の或海岸の漁師町を描いてゐた。それからその漁師町に住まなければならぬお芳親子も。——彼は急に險しい顏をし、いつかさしはじめた日の光の中にもう一度リイブクネヒトを讀みはじめた。

この作は昭和二年一月、二月の「中央公論」誌上に掲載された。後、昭和十七年四月、岩波書店から刊行された短篇集「或阿呆の一生」に收められてゐる。

秋

一

信子は女子大學にゐた時から、才媛の名聲を擔つてゐた。彼女が早晩作家として文壇に打つて出る事は、殆誰も疑はなかつた。中には彼女が在學中、既に三百何枚かの自叙傳體小說を書き上げたなどと吹聽して歩くものもあつた。が、學校を卒業して見ると、まだ女學校も出てゐない妹の照子と彼女とを抱へて、後家を立て通して來た母の手前も、さうは我儘を云はれない、複雜な事情もないではなかつた。そこで彼女は創作を始める前に、まづ世間の習慣通り、緣談からきめてかかるべく餘儀なくされた。

彼女には俊吉と云ふ從兄があつた。彼は當時まだ大學の文科に籍を置いてゐたが、やはり將來は作家仲間に身を投ずる意志があるらしかつた。信子はこの從兄の大學生と、昔から親しく往來してゐた。それが互に文學と云ふ共通の話題が出來てからは、愈親しみが增したやうであつた。唯、彼は信子と違つて、當世流行のトルストイズムなどには一向敬意を表さなかつた。さうして

始終フランス仕込みの皮肉や警句ばかり並べてゐた。かう云ふ俊吉の冷笑的な態度は、時々萬事眞面目な信子を怒らせてしまふ事があつた。が、彼女は怒りながらも俊吉の皮肉や警句の中に、何か輕蔑出來ないものを感じない訣には行かなかつた。

だから彼女は在學中も、彼も一しよに展覽會や音樂會へ行く事が稀ではなかつた。尤も大抵そんな時には、妹の照子も同伴であつた。彼等三人は行きも返りも、氣兼ねなく笑つたり話したりした。が、妹の照子だけは、時々話の圈外へ置きざりにされる事もあつた。それでも照子は子供らしく、飾窓の中のパラソルや絹のショオルを覗き歩いて、格別閑却された事を不平に思つてもゐないらしかつた。信子はしかしそれに氣がつくと、必話頭を轉換して、すぐに又元の通り妹にも口をきかせようとした。その辯まづ照子を忘れるものは、何時も信子自身であつた。俊吉はすべてに無頓着なのか、不相變氣の利いた冗談ばかり投げつけながら、目まぐるしい往來の人通りの中を、大股にゆつくり歩いて行つた。……

信子と從兄との間からは、勿論誰の眼に見ても、來るべき彼等の結婚を豫想させるのに十分であつた。同窓たちは彼女の未來をてんでに羨んだり妬んだりした。殊に俊吉を知らないものは、(滑稽と云ふより外はないが、)一層これが甚しかつた。信子も亦一方では彼等の推測を打ち消しながら、他方ではその確な事をそれとなく故意に仄かせたりした。從つて同窓たちの頭の中には、

彼等が學校を出るまでの間に、何時か彼女と俊吉との姿が、恰も新婦新郎の寫眞の如く、一しよにはつきり焼きつけられてゐた。

所が學校を卒業すると、信子は彼等の豫期に反して、大阪の或商事會社へ近頃勤務する事になつた、高商出身の青年と、突然結婚してしまつた。さうして式後二三日してから、新夫と一しよに勤め先きの大阪へ向けて立つてしまつた。その時中央停車場へ見送りに行つたものの話によると、信子は何時もと變りなく、晴れ晴れした微笑を浮べながら、ともすれば涙を落し勝ちな妹の照子をいろいろと慰めてゐたと云ふ事であつた。

同窓たちは皆不思議がつた。その不思議がる心の中には、妙に嬉しい感情と、前とは全然違つた意味で妬ましい感情とが交つてゐた。或者は彼女を信頼して、すべてを母親の意志に歸した。又或ものは彼女を疑つて、心がはりがしたとも云ひふらした。が、それらの解釋が結局想像に過ぎない事は、彼等自身さへ知らない訣ではなかつた。彼女はなぜ俊吉と結婚しなかつたか？　彼等はその後暫くの間、よるとさはると重大らしく、必この疑問を話題にした。さうして彼是二月ばかり經つと――全く信子を忘れてしまつた。勿論彼女が書く筈だつた長篇小説の噂なぞも。

信子はその間に大阪の郊外へ、幸福なるべき新家庭をつくつた。彼等の家はその界隈でも、最も閑靜な松林にあつた。松脂の匂と日の光と、――それが何時でも夫の留守は、二階建の新しい

借家の中に、活き活きした沈默を領してゐた。信子はさう云ふ寂しい午後、時々理由もなく氣が沈むと、きつと針箱の引出しを開けては、その底に疊んでしまつてある桃色の書簡箋をひろげて見た。書簡箋の上にはこんな事が、細々とペンで書いてあつた。

「――もう今日かぎり御姉様と御一しよにゐる事が出來ないと思ふと、これを書いてゐる間でさへ、止め度なく涙が溢れて來ます。御姉様。どうか、どうか私を御赦し下さい。照子は勿體ない御姉様の犧牲の前に、何と申し上げて好いかもわからずに居ります。

「御姉様は私の爲に、今度の御縁談を御きめになりました。さうではないと仰有つても、私にはよくわかつて居ります。何時ぞや御一しよに帝劇を見物した晩、御姉様は私に俊さんは好きかと御尋きになりました。それから又好きならば、御姉様がきつと骨を折るから、俊さんの所へ行けとも仰有いました。あの時もう御姉様は、私が俊さんに差上げる筈の手紙を讀んでいらしつたのでせう。あの手紙がなくなつた時、ほんたうに私は御姉様を御恨めしく思ひました。

（御免遊ばせ。この事だけでも私はどの位申し譯がないかわかりません。）ですからその晩も私には、御姉様の親切な御言葉も、皮肉のやうな氣さへ致しました。私が怒つて御返事らしい御返事も碌に致さなかつた事は、もちろん御忘れになりもなさりますまい。けれどもあれから二三日經つて、御姉様の御縁談が急にきまつてしまつた時、私はそれこそ死んででも、御詫びをしようか

と思ひました。御姉様も俊さんが御好きなのでございますもの。（御隠しになつてはいや。私はよく存じて居りましてよ。）私の事さへ御かまひにならなければ、きつと御自分が俊さんの所へいらしつたのに違ひございません。それでも御姉様は私に、俊さんなぞは思つてゐないと、何度も繰返して仰有いました。さうしてとうとう心にもない御結婚をなすつて御しまひになりました。私の大事な御姉様。私が今日鶏を抱いて來て、大阪へいらつしやる御姉様に、御挨拶をなさいと申した事をまだ覺えていらしつて？　私は飼つてゐる鶏にも、私と一しよに御姉様へ御詫びを申して貰ひたかつたの。さうしたら、何にも御存知ない御母様まで御泣きになりましたのね。

「御姉様。もう明日は大阪へいらしつて御しまひなさるでせう。けれどもどうか何時までも、御姉様の照子を見捨てずに頂戴、照子は毎朝鶏に餌をやりながら、御姉様の事を思ひ出して、誰にも知れず泣いてゐます。……」

信子はこの少女らしい手紙を讀む毎に、必涙が滲んで來た。殊に中央停車場から汽車に乘らうとする間際、そつとこの手紙を彼女に渡した照子の姿を思ひ出すと、何とも云はれずにいぢらしかつた。が、彼女の結婚は果して妹の想像通り、全然犠牲的なそれであらうか。さう疑を挾む事は、涙の後の彼女の心へ、重苦しい氣持ちを擴げ勝ちであつた。信子はこの重苦しさを避ける爲に、大抵はじつと快い感傷の中に浸つてゐた。そのうちに外の松林へ一面に當つた日の光が、だ

んだん黄ばんだ暮方の色に變つて行くのを眺めながら。

二

結婚後彼是三月ばかりは、あらゆる新婚の夫婦の如く、彼等も亦幸福な日を送つた。

夫は何處か女性的な、口數を利かない人物であつた。それが毎日會社から歸つて來ると、必ず晩餐後の何時間かは、信子と一しよに過す事にしてゐた。信子は編物の針を動かしながら、近頃世間に騒がれてゐる小説や戯曲の話などもした。その話の中には時によると、基督教の匂のする女子大學趣味の人生觀が織りこまれてゐる事もあつた。夫は晩酌の頰を赤らめた儘、讀みかけた夕刊を膝へのせて、珍しさうに耳を傾けてゐた。が、彼自身の意見らしいものは、一言も加へた事がなかつた。

彼等は又殆日曜毎に、大阪やその近郊の遊覽地へ氣散じな一日を暮しに行つた。信子は汽車電車へ乘る度に、何處でも飲食する事を憚らない關西人が皆卑しく見えた。それだけおとなしい夫の態度が、格段に上品なのを嬉しく感じた。實際身綺麗な夫の姿は、さう云ふ人中に交つてゐると、帽子からも、背廣からも、或は又赤皮の編上げからも、化粧石鹸の匂に似た、一種清新な雰圍氣を放散させてゐるやうであつた。殊に夏の休暇中、舞子まで足を延した時には、同じ茶屋に

來合せた夫の同僚たちに比べて見て、一層誇りがましいやうな心もちがせずにはゐられなかつた。が、夫はその下卑た同僚たちに、存外親しみを持つてゐるらしかつた。

その内に信子は長い間、捨ててあつた創作を思ひ出した。そこで夫の留守の内だけ、一二時間づつ机に向ふ事にした。夫はその話を聞くと、「愈女流作家になるかね。」と云つて、やさしい口もとに薄笑ひを見せた。しかし机に向ふにしても、思ひの外ペンは進まなかつた。彼女はぼんやり頬杖をついて、炎天の松林の蟬の聲に、我知れず耳を傾けてゐる彼女自身を見出し勝ちであつた。

所が殘暑が初秋へ振り變らうとする時分、夫は或日會社の出がけに、汗じみた襟を取變へようとした。が、生憎襟は一本殘らず洗濯屋の手に渡つてゐた。夫は日頃身綺麗なだけに、不快らしく顏を曇らせた。さうしてズボン吊を掛けながら、「小說ばかり書いてゐちや困る。」と何時になく厭味を云つた。信子は默つて眼を伏せて、上衣の埃を拂つてゐた。

それから二三日過ぎた或夜、夫は夕刊に出てゐた食糧問題から、月々の經費をもう少し輕減出來ないものかと云ひ出した。「お前だつて何時までも女學生ぢやあるまいし。」——そんな事も口へ出した。信子は氣のない返事をしながら、夫の襟飾の絹刺しをしてゐた。すると夫は意外な位執拗に、「その襟飾にしてもさ、買ふ方が反つて安くつくぢやないか。」と、やはりねちねちした

調子で云つた。彼女は猶更口が利けなくなつた。夫もしまひには白けた顏をして、つまらなさうに商賣向きの雜誌か何かばかり讀んでゐた。が、寢室の電燈を消してから、信子は夫に背を向けた儘、「もう小說なんど書きません。」と、囁くやうな聲で云つた。夫はそれでも默つてゐた。暫くして彼女は、同じ言葉を前よりもかすかに繰返した。それから間もなく泣く聲が洩れた。夫は二言三言彼女を叱つた。その後でも彼女の啜泣きは、また絶え絶えに聞えてゐた。が、信子は何時の間にか、しつかりと夫にすがつてゐた。……

翌日彼等は又元の通り、仲の好い夫婦に返つてゐた。

と思ふと今度は十二時過ぎても、まだ夫が會社から歸つて來ない晩があつた。しかも漸く歸つて來ると、雨外套も一人では脫げない程、酒臭い匂を呼吸してゐた。信子は眉をひそめながら、甲斐甲斐しく夫に着換へさせた。夫はそれにも關らず、まはらない舌で皮肉さへ云つた。「今夜は僕が歸らなかつたから、餘つ程小說が捗取つたらう。」——さう云ふ言葉が、何度となく女のやうな口から出た。彼女はその晩床にはいると、思はず涙がほろほろ落ちた。こんな處を照子が見たら、どんなに一しよに泣いてくれるであらう。照子。照子。私が便りに思ふのは、たつたお前一人ぎりだ。——信子は度々心の中でかう妹に呼びかけながら、夫の酒臭い寢息に苦しまされて、殆夜中まんじりともせずに、寢返りばかり打つてゐた。

が、それも亦翌日になると、自然と仲直りが出來上つてゐた。

そんな事が何度か繰返される内に、だんだん秋が深くなつて來た。信子は何時か机に向つて、ペンを執る事が稀になつた。その時にはもう夫の方も、前程彼女の文學談を珍しがらないやうになつてゐた。彼等は夜毎に長火鉢を隔てて、瑣末な家庭の經濟の話に時間を殺す事を覺え出した。その上又かう云ふ話題は、少くとも晩酌後の夫にとつて、最も興味があるらしかつた。それでも信子は氣の毒さうに、時々夫の顏色を窺つて見る事があつた。が、彼は何も知らず、近頃延した髭を嚙みながら、何時もより餘程快活に、「これで子供でも出來て見ると——」なぞと、考へ考へ話してゐた。

するとその頃から月々の雜誌に、從兄の名前が見えるやうになつた。信子は結婚後忘れたやうに、俊吉との文通を絶つてゐた。唯、彼の動靜は、——大學の文科を卒業したとか、同人雜誌を始めたとか云ふ事は、妹から手紙で知るだけであつた。又それ以上彼の事を知りたいと云ふ氣も起さなかつた。が、彼の小說が雜誌に載つてゐるのを見ると、懷しさは昔と同じであつた。彼女はその頁をはぐりながら、何度も獨り微笑を洩らした。俊吉はやはり小說の中でも、冷笑と諧謔との二つの武器を宮本武藏のやうに使つてゐた。彼女にはしかし氣のせゐか、その輕快な皮肉の後に、何か今までの從兄にはない、寂しさうな捨鉢の調子が潛んでゐるやうに思はれた。と同時

にさう思ふ事が、後めたいやうな氣もしないではなかつた。

信子はそれ以來夫に對して、一層優しく振舞ふやうになつた。夫は夜寒の長火鉢の向うに、何時も晴れ晴れと微笑してゐる彼女の顏を見出した。その顏は以前より若々しく、化粧をしてゐるのが常であつた。彼女は針仕事の店を擴げながら、彼等が東京で式を擧げた當時の記憶なぞも話したりした。夫にはその記憶の細かいのが、意外でもあり、嬉しさうでもあつた。「お前はよくそんな事まで覺えてゐるね。」——夫にかう調戲はれると、信子は必無言の儘、眼にだけ媚のある返事を見せた。が、何故それ程忘れずにゐるか、彼女自身も心の内では、不思議に思ふ事が度度あつた。

それから程なく、母の手紙が、信子に妹の結納が濟んだと云ふ事を報じて來た。その手紙の中には又、俊吉が照子を迎へる爲に、山の手の或郊外へ新居を設けた事もつけ加へてあつた。彼女は早速母と妹とへ、長い祝ひの手紙を書いた。何分當方は無人故、式には不本意ながら參りかね候へども……」——そんな文句を書いてゐる内に、(彼女には何故かわからなかつたが、)筆の澁る事も再三あつた。すると彼女は眼を擧げて、必外の松林を眺めた。松は初冬の空の下に、簇々と蒼黑く茂つてゐた。

その晩信子と夫とは、照子の結婚を話題にした。夫は何時もの薄笑ひを浮べながら、彼女が妹

の口眞似をするのを、面白さうに聞いてゐた。が、彼女には何となく、彼女自身に照子の事を話してゐるやうな心もちがした。「どれ、寢るかな。」――二三時間の後、夫は柔な髭を撫でながら、大儀さうに長火鉢の前を離れた。信子はまだ妹へ祝つてやる品を決し兼ねて、火箸で灰文字を書いてゐたが、この時急に顏を擧げて、「でも妙なものね、私にも弟が一人出來るのだと思ふと。」と云つた。「當り前ぢやないか、妹もゐるんだから。」――彼女は夫にかう云はれても、考深い眼つきをした儘、何とも返事をしなかつた。

照子と俊吉とは、師走の中旬に式を擧げた。當日は午少し前から、ちらちら白い物が落ち始めた。信子は獨り午の食事をすま●た後、何時までもその時の魚の匂が、口について離れなかつた。「東京も雪が降つてゐるかしら。」――こんな事を考へながら、信子はじつとうす暗い茶の間の長火鉢にもたれてゐた。雪が愈烈しくなつた。が、口中の生臭さは、やはり執念く消えなかつた。

……

三

信子はその翌年の秋、社命を帶びた夫と一しよに、久しぶりで東京の土を踏んだ。が、短い日限内に、果すべき用向きの多かつた夫は、唯彼女の母親の所へ、來匆々顏を出した時の外は、殆

ど一日も彼女をつれて、外出する機會を見出さなかつた。彼女はそこで妹夫婦の郊外の新居を尋ねる時も、新開地じみた電車の終點から、たつた一人俥に搖られて行つた。

彼等の家は、町並が葱畑に移る近くにあつた。しかし隣近所には、いづれも借家らしい新築が、せせこましく軒を並べてゐた。のき打ちの門、要もちの垣、それから竿に干した洗濯物、――すべてがどの家も變りはなかつた。この平凡な住居の容子は、多少信子を失望させた。

が、彼女が案内を求めた時、聲に應じて出て來たのは、意外にも從兄の方であつた。俊吉は以前と同じやうに、この珍客の顏を見ると、「やあ。」と快活な聲を擧げた。彼女は彼が何時の間にか、いが栗頭でなくなつたのを見た。「暫らく。」「さあ、御上り。生憎僕一人だが。」「照子は？留守？」「使に行つた。女中も。」――信子は妙に恥しさを感じながら、派手な裏のついた上衣をそつと玄關の隅に脱いだ。

俊吉は彼女を書齋兼客間の八疊へ坐らせた。座敷の中には何處を見ても、本ばかり亂雜に積んであつた。殊に午後の日の當つた障子際の、小さな紫檀の机のまはりには、新聞雜誌や原稿用紙が、手のつけやうもない程散らかつてゐた。その中に若い細君の存在を語つてゐるものは、唯床の間の壁に立てかけた、新しい一面の琴だけであつた。信子はかう云ふ周圍から、暫らく物珍しい眼を離さなかつた。

「來ることは手紙で知つてゐたけれど、今日來ようとは思はなかつた。」――俊吉は卷煙草へ火をつけると、さすがに懐しさうな眼つきをした。「どうです、大阪の御生活は？」「俊さんこそ如何？　幸福？」――信子も亦二言三言話す内に、やはり昔のやうな懐しさが、よみ返つて來るのを意識した。文通さへ碌にしなかつた、彼是二年越しの氣まづい記憶は、思つたより彼女を煩はさなかつた。

彼等は一つ火鉢に手をかざしながら、いろいろな事を話し合つた。俊吉の小説だの、共通な知人の噂だの、東京と大阪との比較だの、話題はいくら話しても、盡きない位澤山あつた。が、二人とも云ひ合せたやうに、全然暮し向きの問題には、觸れなかつた。それが信子には一層從兄と、話してゐると云ふ感じを強くさせた。

時々はしかし沈默が、二人の間に來る事もあつた。その度に彼女は微笑した儘、眼を火鉢の灰に落した。其處には待つとは云へない程、かすかに何かを待つ心もちがあつた。すると故意か偶然か、俊吉はすぐに話題を見つけて、何時もその心もちを打ち破つた。彼女は次第に從兄の顏を窺はずにはゐられなくなつた。が、彼は平然と卷煙草の煙を呼吸しながら、格別不自然な表情を裝つてゐる氣色も見えなかつた。

その内に照子が歸つて來た。彼女は姉の顏を見ると、手をとり合はないばかりに嬉しがつた。

信子も脣は笑ひながら、眼には何時かもう涙があつた。二人は暫くは俊吉も忘れて、去年以來の生活を互に尋ねたり尋ねられたりしてゐた。殊に照子は活き活きと、血の色を頰に透かせながら、今でも飼つてゐる鷄の事まで、話して聞かせる事を忘れなかつた。俊吉は卷煙草を啣へた儘、滿足さうに二人を眺めて、不相變にやにや笑つてゐた。

其處へ女中も歸つて來た。俊吉はその女中の手から、何枚かの端書を受取ると、早速側の机へ向つて、せつせとペンを動かし始めた。照子は女中も留守だつた事が、意外らしい氣色を見せた。「ぢや御姉樣がいらしつた時は、誰も家にゐなかつたの。」「ええ、俊さんだけ。」――信子はかう答へる事が、平氣を強ひるやうな心もちがした。すると俊吉が向うを向いたなり、「旦那樣に感謝しろ。その茶も僕が入れたんだ。」と云つた。照子は姉と眼を見合せて、惡戲さうにくすりと笑つた。が、夫にはわざとらしく、何とも返事をしなかつた。

間もなく信子は、妹夫婦と一しよに、晩飯の食卓を圍むことになつた。照子の說明する所によると、膳に上つた玉子は皆、家の鷄が產んだものであつた。俊吉は信子に葡萄酒をすすめながら、「人間の生活は掠奪で持つてゐるんだね。小はこの玉子から――」なぞと社會主義じみた理窟を並べたりした。その辯此處にゐる三人の中で、一番玉子に愛着のあるのは俊吉自身に違ひなかつた。照子はそれが可笑しいと云つて、子供のやうな笑ひ聲を立てた。信子はかう云ふ食卓の空氣

にも、遠い松林の中にある、寂しい茶の間の暮方を思ひ出さずにゐられなかつた。

話は食後の果物を荒した後も盡きなかつた。微醉を帶びた俊吉は、夜長の電燈の下にあぐらをかいて、盛に彼一流の詭辯を弄した。その談論風發が、もう一度信子を若返らせた。彼女は熱のある眼つきをして、「私も小說を書き出さうかしら。」と云つた。すると從兄は返事をする代りに、グウルモンの警句を拋りつけた。それは「ミュウズたちは女だから、彼等を自由に虜にするものは、男だけだ。」と云ふ言葉であつた。信子と照子とは同盟して、グウルモンの權威を認めなかつた。「ぢや女でなけりや、音樂家になれなくつて？　アポロは男ぢやありませんか。」――照子は眞面目にこんな事まで云つた。

その暇に夜が更けた。信子はとうとう泊る事になつた。

寢る前に俊吉は、緣側の雨戸を一枚開けて、寢間着の儘狹い庭へ下りた。それから誰を呼ぶともなく「ちよいと出て御覽。好い月だから。」と聲をかけた。信子は獨り彼の後から、沓脫ぎの庭下駄へ足を下した。足袋を脫いだ彼女の足には、冷たい露の感じがあつた。

月は庭の隅にある、痩せがれた檜の梢にあつた。從兄はその檜の下に立つて、うす明い夜空を眺めてゐた。「大へん草が生えてゐるのね。」――信子は荒れた庭を氣味惡さうに、怯づ怯づ彼のゐる方へ歩み寄つた。が、彼はやはり空を見ながら、「十三夜かな。」と呟いただけであつた。

暫く沈默が續いた後、俊吉は靜に眼を返して、「鷄小屋へ行つて見ようか。」と云つた。信子は默つて頷いた。鷄小屋は丁度檜とは反對の庭の隅にあつた。二人は肩を並べながら、ゆつくり其處まで歩いて行つた。しかし蓆圍ひの內には、唯鷄の匂のする、朧げな光と影ばかりであつた。俊吉はその小屋を覗いて見て、殆ど獨り言かと思ふやうに、「寢てゐる。」と彼女に囁いた。「玉子を人に取られた鷄が。」――信子は草の中に佇んだ儘、さう考へずにはゐられなかつた。……

二人が庭から返つて來ると、照子は夫の机の前に、ぼんやり電燈を眺めてゐた。靑い橫ばひがたつた一つ、笠に這つてゐる電燈を。

四

翌朝俊吉は一張羅の背廣を着て、食後匆々玄關へ行つた。何でも亡友の一周忌の墓參をするのだとか云ふ事であつた。「好いかい。待つてゐるんだぜ。午頃までにやきつと歸つて來るから。」――彼は外套をひつかけながら、かう信子に念を押した。が彼女は華奢な手に彼の中折を持つた儘、默つて微笑したばかりであつた。

照子は夫を送り出すと、姉を長火鉢の向うに招じて、まめまめしく茶をすすめなどした。隣の奧さんの話、訪問記者の話、それから俊吉と見に行つた或外國の歌劇團の話、――その外愉快な

るべき話題が、彼女にはまだいろいろあるらしかつた。が、信子の心は沈んでゐた。彼女はふと氣がつくと、何時も好い加減な返事ばかりしてゐる彼女自身が其處にあつた。それがとうとうしまひには、照子の眼にさへ止るやうになつた。妹は心配さうに彼女の顏を覗きこんで、「どうして？」と尋ねてくれたりした。しかし信子にもどうしたのだか、はつきりした事はわからなかつた。

柱時計が十時を打つた時、信子は懶さうな眼を擧げて、「俊さんは中々歸りさうもないわね。」と云つた。照子も姉の言葉につれて、ちよいと時計を仰いだが、これは存外冷淡に、「まだ――。」とだけしか答へなかつた。信子にはその言葉の中に、夫の愛に飽き足りてゐる新妻の心があるやうな氣がした。さう思ふと愈彼女の氣もちは、憂鬱に傾かずにはゐられなかつた。

「照さんは幸福ね。」――信子は頤を半襟に埋めながら、冗談のやうにかう云つた。が、自然と其處へ忍びこんだ、眞面目な羨望の調子だけは、どうする事も出來なかつた。照子はしかし無邪氣らしく、やはり活き活きと微笑しながら、「覺えていらつしやい。」と睨む眞似をした。それからすぐに又「お姉様だつて幸福の癖に。」と、甘えるやうにつけ加へた。その言葉がぴしりと信子を打つた。

彼女は心もち瞼を上げて、「さう思つて？」と問ひ返した。問ひ返して、すぐに後悔した。照

子は一瞬間妙な顏をして、姉と眼を見合せた。その顏にも亦蔽ひ難い後悔の心が動いてゐた。信子は強ひて微笑した。――「さう思はれるだけでも幸福ね。」

二人の間には沈默が來た。彼等は柱時計の時を刻む下に、長火鉢の鐵瓶がたぎる音を聞くともなく聞き澄ませてゐた。

「でもお兄様は御優しくはなくつて？」――やがて照子は小さな聲で、恐る恐るかう尋ねた。その聲の中には明かに、氣の毒さうな響が籠つてゐた。が、この場合信子の心は、何よりも憐憫を反撥した。彼女は新聞を膝の上へのせて、それに眼を落したなり、わざと何とも答へなかつた。新聞には大阪と同じやうに、米價問題が掲げてあつた。

その內に靜な茶の間の中には、かすかに人の泣くけはひが聞え出した。信子は新聞から眼を離して、袂を顏に當てた妹を長火鉢の向うに見出した。「泣かなくたつて好いのよ。」――照子は姉にさう慰められても、容易に泣き止まうとはしなかつた。信子は殘酷な喜びを感じながら、暫くは妹の震へる肩へ無言の視線を注いでゐた。それから女中の耳を憚るやうに、照子の方へ顏をやりながら、「惡るかつたら、私があやまるわ。私は照さんさへ幸福なら、何より有難いと思つてゐるの。ほんたうよ。俊さんが照さんを愛してゐてくれれば――」と、低い聲で云ひ續けた。云ひ續ける內に、彼女の聲も、彼女自身の言葉に動かされて、だんだん感傷的になり始めた。する

と突然照子は袖を落して、涙に濡れてゐる顔を擧げた。彼女の眼の中には、意外な事に、悲しみも怒りも見えなかつた。が、唯、抑へ切れない嫉妬の情が、燃えるやうに瞳を火照らせてゐた。

「ぢや御姉様は――御姉様は何故昨夜も――」照子は皆まで云はない内に、又顔を袖に埋めて、發作的に烈しく泣き始めた。……

二三時間の後、信子は電車の終點に急ぐべく、幌俥の上に搖られてゐた。彼女の眼にはひる外の世界は、前部の幌を切りぬいた、四角なセルロイドの窓だけであつた。其處には場末らしい家家と色づいた雜木の梢とが、徐にしかも絶え間なく、後へ後へと流れて行つた。もしその中に一つでも動かないものがあれば、それは薄雲を漂はせた、冷やかな秋の空だけであつた。

彼女の心は靜かであつた。が、その靜かさを支配するものは、寂しい諦めに外ならなかつた。照子の發作が終つた後、和解は新しい涙と共に、容易く二人を元の通り仲の好い姉妹に返してゐた。しかし事實は事實として、今でも信子の心を離れなかつた。彼女は從兄の歸りも待たずこの俥上に身を託した時、既に妹とは永久に他人になつたやうな心もちが、意地惡く彼女の胸の中に氷を張らせてゐたのであつた。――

信子はふと眼を擧げた。その時セルロイドの窓の中には、どみどみした町を歩いて來る、杖を抱へた從兄の姿が見えた。彼女の心は動搖した。俥を止めようか。それともこの儘行き遙はうか。

彼女は動悸を抑へながら、暫くは唯幌の下に、空しい逡巡を重ねてゐた。が、俊吉と彼女との距離は、見る見る内に近くなつて來た。彼は薄日の光を浴びて、水溜りの多い往來にゆつくりと靴を運んでゐた。

「俊さん。」――さう云ふ聲が一瞬間、信子の脣から洩れようとした。實際俊吉はその時もう、彼女の俥のすぐ側に、見慣れた姿を現してゐた。が、彼女は又ためらつた。その暇に何も知らない彼は、とうとうこの幌俥とすれ違つた。薄濁つた空、疎らな屋並、高い木々の黄ばんだ梢、――後には不相變人通りの少い場末の町があるばかりであつた。

「秋――」

信子はうすら寒い幌の下に、全身で寂しさを感じながら、しみじみかう思はずにはゐられなかつた。

「秋」は大正九年四月の「中央公論」誌に發表され、大正十年三月、新潮社刊行の短篇小說集「夜來の花」及び大正十一年八月、改造社刊行の選集「沙羅の花」、大正十四年四月、新潮社刊行になる「芥川龍之介集」（現代小說全集第一卷）に收む。

トロツコ

小田原熱海間に、輕便鐵道敷設の工事が始まつたのは、良平の八つの年だつた。良平は毎日村外れへ、その工事を見物に行つた。工事を――といつた所が、唯トロツコで土を運搬する――それが面白さに見に行つたのである。

トロツコの上には土工が二人、土を積んだ後に佇んでゐる。トロツコは山を下るのだから、人手を借りずに走つて來る。煽るやうに車臺が動いたり、土工の袢纏の裾がひらついたり、細い線路がしなつたり――良平はそんなけしきを眺めながら、土工になりたいと思ふ事がある。せめては一度でも土工と一しよに、トロツコへ乘りたいと思ふ事もある。トロツコは村外れの平地へ來ると、自然と其處に止まつてしまふ。と同時に土工たちは、身輕にトロツコを飛び降りるが早いか、その線路の終點に車の土をぶちまける。それから今度はトロツコを押し押し、もと來た山の方へ登り始める。良平はその時乘れないまでも、押す事さへ出來たらと思ふのである。

或夕方、――それは二月の初旬だつた。良平は二つ下の弟や、弟と同じ年の隣の子供と、トロツコの置いてある村外れへ行つた。トロツコは泥だらけになつた儘、薄明るい中に並んでゐるが、

その外は何處を見ても、土工たちの姿は見えなかつた。三人の子供は恐る恐る、一番端にあるトロツコを押した。トロツコは三人の力が揃ふと、突然ごろりと車輪をまはした。良平はこの音にひやりとした。しかし二度目の車輪の音は、もう彼を驚かさなかつた。ごろり、ごろり、――トロツコはさう云ふ音と共に、三人の手に押されながら、そろそろ線路を登つて行つた。

その内に彼是十間程來ると、線路の勾配が急になり出した。トロツコも三人の力では、いくら押しても動かなくなつた。どうかすれば車と一しよに、押し戻されさうにもなる事がある。良平はもう好いと思つたから、年下の二人に合圖をした。

「さあ、乘らう。」

彼等は一度に手をはなすと、トロツコの上へ飛び乘つた。トロツコは最初徐ろに、それから見る見る勢よく、一息に線路を下り出した。その途端につき當りの風景は、忽ち兩側へ分かれるやうに、ずんずん目の前へ展開して來る。――良平は顏に吹きつける日の暮の風を感じながら殆ど有頂點になつてしまつた。

しかしトロツコは二三分の後、もうもとの終點に止まつてゐた。

「さあ、もう一度押すぢやあ。」

良平は年下の二人と一しよに、又トロツコを押し上げにかかつた。が、まだ車輪も動かない内

に、突然彼等の後には、誰かの足音が聞え出した。のみならずそれは聞え出したと思ふと、急にかう云ふ怒鳴り聲に變つた。

「この野郎！　誰に斷つてトロに觸つた？」

其處には古い印袢纏に、季節外れの麥藁帽をかぶつた、脊の高い土工が佇んでゐる。——さう云ふ姿が目にはひつた時、良平は年下の二人と一しよに、もう五六間逃げ出してゐた。——それぎり良平は使の歸りに、人氣のない工事場のトロツコを見ても、二度と乘つて見ようと思つた事はない。唯その時の土工の姿は、今でも良平の頭の何處かに、はつきりした記憶を殘してゐる。薄明りの中に仄めいた、小さい黃色の麥藁帽、——しかしその記憶さへも、年毎に色彩は薄れるらしい。

その後十日餘りたつてから、良平は又たつた一人、午過ぎの工事場に佇みながら、トロツコの來るのを眺めてゐた。すると土を積んだトロツコの外に、枕木を積んだトロツコが一輛、これは本線になる筈の、太い線路を登つて來た。このトロツコを押してゐるのは、二人とも若い男だつた。良平は彼等を見た時から、何だか親しみ易いやうな氣がした。「この人たちならば叱られない。」——彼はさう思ひながら、トロツコの側へ馳けて行つた。

「おぢさん。押してやらうか？」

その中の一人、——縞のシヤツを着てゐる男は、俯向きにトロツコを押した儘、思つた通り快い返事をした。

「おお、押してくよう。」

良平は二人の間にはひると、力一杯押し始めた。

「われは中中力があるな。」

他の一人、——耳に卷煙草を挾んだ男も、かう良平を褒めてくれた。

その内に線路の勾配は、たんだん樂になり始めた。「もう押さなくとも好い。」——良平は今にも云はれるかと內心氣がかりでならなかつた。が、若い二人の土工は、前よりも腰を起したぎり默默と車を押し續けてゐた。良平はたうとうこらへ切れずに、怯づ怯づこんな事を尋ねて見た。

「何時までも押してゐて好い？」

「好いとも。」

二人は同時に返事をした。良平は「優しい人たちだ」と思つた。

五六町餘り押し續けたら、線路はもう一度急勾配になつた。其處には兩側の蜜柑畑に、黃色い實がいくつも日を受けてゐる。

「登り路の方が好い、何時までも押させてくれるから。」——良平はそんな事を考へながら、全

身でトロッコを押すやうにした。

蜜柑畑の間を登りつめると、急に線路は下りになつた。縞のシャツを着てゐる男は、良平に「やい、乘れ」と云つた。良平は直に飛び乘つた。トロッコは三人が乘り移ると同時に、蜜柑畑の匂を煽りながら、ひた辷りに線路を走り出した。「押すよりも乘る方がずつと好い。」——良平は羽織に風を孕ませながら、當り前の事を考へた。「行きに押す所が多ければ、歸りに又乘る所が多い。」——さうも亦考へたりした。

竹藪のある所へ來ると、トロッコは靜かに走るのを止めた。三人は又前のやうに、重いトロッコを押始めた。竹藪は何時か雜木林になつた。爪先上りの所所には、赤錆の線路も見えない程、落葉のたまつてゐる場所もあつた。その路をやつと登り切つたら、今度は高い崖の向うに、廣廣と薄ら寒い海が開けた。と同時に良平の頭には、餘り遠く來過ぎた事が、急にはつきりと感じられた。

三人は又トロッコへ乘つた。車は海を右にしながら、雜木の枝の下を走つて行つた。しかし良平はさつきのやうに、面白い氣もちにはなれなかつた。「もう歸つてくれれば好い。」——彼はさうも念じて見た。が、行く所まで行きつかなければ、トロッコも彼等も歸れない事は、勿論彼にもわかり切つてゐた。

その次に車の止まつたのは、切崩した山を背負つてゐる、藁屋根の茶店の前だつた。二人の土工はその店へはひると、乳呑兒をおぶつた上さんを相手に、悠悠と茶などを飯み始めた。良平は獨りいらいらしながら、トロッコのまはりをまはつて見た。トロッコには頑丈な車臺の板に、跳ねかへた泥が乾いてゐた。

少時の後茶店を出て來しなに、卷煙草を耳に挾んだ男は、(その時はもう挾んでゐなかつたが)トロッコの側にゐる良平に新聞紙に包んだ駄菓子をくれた。良平は冷淡に「有難う」と云つた。が、直に冷淡にしては、相手にすまないと思ひ直した。彼はその冷淡さを取り繕ふやうに、包み菓子の一つを口へ入れた。菓子には新聞紙にあつたらしい、石油の匂がしみついてゐた。

三人はトロッコを押しながら緩い傾斜を登つて行つた。良平は車に手をかけてゐても、心は外のことを考へてゐた。

その坂を向うへ下り切ると、又同じやうな茶店があつた。土工たちがその中へはひつた後、良平はトロッコに腰をかけながら、歸る事ばかり氣にしてゐた。茶店の前には花のさいた梅に、西日の光が消えかかつてゐる。「もう日が暮れる。」——彼はさう考へると、ぼんやり腰かけてもゐられなかつた。トロッコの車輪を蹴つて見たり、一人では動かないのを承知しながらうんうんそれを押して見たり、——そんな事に氣もちを紛らせてゐた。

所が土工たちは出て來ると、車の上の枕木に手をかけながら、無造作に彼にかう云つた。

「われはもう歸んな。おれたちは今日は向う泊りだから。」

「あんまり歸りが遲くなるとわれの家でも心配するずら。」

良平は一瞬間呆氣にとられた。もう彼是暗くなる事、去年の暮母と岩村まで來たが、今日の途はその三四倍ある事、それを今からたつた一人、歩いて歸らなければならない事、——さう云ふ事が一時にわかつたのである。良平は殆ど泣きさうになつた。が、泣いても仕方がないと思つた。泣いてゐる場合ではないとも思つた。彼は若い二人の土工に、取つて附けたやうな御時宜をすると、どんどん線路傳ひに走り出した。

良平は少時無我夢中に線路の側を走り續けた。その內に懷の菓子包みが、邪魔になる事に氣がついたから、それを路側へ拋り出す次手に、板草履も共處へ脫ぎ捨ててしまつた。すると薄い足袋の裏へじかに小石が食ひこんだが、足だけは遙かに輕くなつた。彼は左に海を感じながら、急な坂路を駈け登つた。時時涙がこみ上げて來ると、自然に顏が歪んで來る。——それは無理に我慢しても、鼻だけは絕えずくうくう鳴つた。

竹藪の側を駈け拔けると、夕燒けのした日金山の空も、もう火照りが消えかかつてゐた。良平は愈氣が氣でなかつた。往きと返りと變るせゐか、景色の違ふのも不安だつた。すると今度は着

物までも、汗の濡れ通つたのが氣になつたから、やはり必死に駈け續けたなり、羽織を路側へ脫いで捨てた。

蜜柑畑へ來る頃には、あたりは暗くなる一方だつた。「命さへ助かれば——」良平はさう思ひながら、辷つてもつまづいても走つて行つた。

やつと遠い夕闇の中に、村外れの工事場が見えた時、良平は一思ひに泣きたくなつた。しかしその時もべそはかいたが、たうとう泣かずに駈け續けた。

彼の村へはひつて見ると、もう兩側の家家には、電燈の光がさし合つてゐた。良平はその電燈の光に頭から汗の湯氣の立つのが、彼自身にもはつきりわかつた。井戸端に水を汲んでゐる女衆や、畑から歸つて來る男衆は、良平が喘ぎ喘ぎ走るのを見ては、「おいどうしたね？」などと聲をかけた。が、彼は無言の儘、雜貨屋だの床屋だの、明るい家の前を走り過ぎた。

彼の家の門口へ駈けこんだ時、良平はたうとう大聲に、わつと泣き出さずにはゐられなかつた。その泣き聲は彼の周圍へ、一時に父や母を集まらせた。殊に母は何とか云ひながら、良平の體を抱へるやうにした。が、良平は手足をもがきながら、吸り上げ吸り上げ泣き續けた。その聲が餘り激しかつたせゐか、近所の女衆も三四人、薄暗い門口へ集つて來た。父母は勿論その人たちは、口口に彼の泣く訣を尋ねた。しかし彼は何と云はれても泣き立てるより外に仕方がなかつた。あ

の遠い路を駈け通して來た、今までの心細さをふり返ると、いくら大聲に泣き續けても、足りない氣もちに迫られながら、……

良平は二十六の年、妻子と一しよに東京へ出て來た。今では或雜誌社の二階に、校正の朱筆を握つてゐる。が、彼はどうかすると、全然何の理由もないのに、その時の彼を思ひ出す事がある。全然何の理由もないのに？——塵勞に疲れた彼の前には今でもやはりその時のやうに、薄暗い藪や坂のある路が、細細と一すぢ斷續してゐる。……

「トロッコ」は大正十一年の作。大正十二年五月、春陽堂刊行の短篇小說集「春服」及び新潮社刊行の「芥川龍之介集」に收む。

蜜柑

或曇つた冬の日暮である。私は横須賀發上り二等客車の隅に腰を下して、ぼんやり發車の笛を待つてゐた。とうに電燈のついた客車の中には、珍らしく私の外に一人も乘客はゐなかつた。外を覗くと、うす暗いプラットフォオムにも、今日は珍しく見送りの人影さへ跡を絕つて、唯、檻に入れられた小犬が一匹、時々悲しさうに、吠え立ててゐた。これらはその時の私の心もちと、不思議な位似つかはしい景色だつた。私の頭の中には云ひやうのない疲勞と倦怠とが、まるで雪曇りの空のやうなどんよりした影を落してゐた。私は外套のポケットへぢつと兩手をつつこんだ儘、そこにはいつてゐる夕刊を出して見ようと云ふ元氣さへ起らなかつた。

が、やがて發車の笛が鳴つた。私はかすかな心の寬ぎを感じながら、後の窓枠へ頭をもたせて、眼の前の停車場がずるずると後ずさりを始めるのを待つともなく待ちかまへてゐた。所がそれよりも先にけたたましい日和下駄の音が、改札口の方から聞え出したと思ふと、間もなく車掌の何か云ひ罵る聲と共に、私の乘つてゐる二等室の戸ががらりと開いて、十三四の小娘が一人、慌しく中へはいつて來た、と同時に一つぐしりと搖れて、徐に汽車は動き出した。一本づつ眼をくぎ

つて行くプラットフォオムの柱、置き忘れたやうな運水車、それから車内の誰かに祝儀の禮を云つてゐる赤帽――さう云ふすべては、窓へ吹きつける煤煙の中に、未練がましく後へ倒れて行つた。私は漸くほつとした心もちになつて、卷煙草に火をつけながら、始めて懶い瞼をあげて、前の席に腰に下してゐた小娘の顏を一瞥した。

それは油氣のない髮をひつつめの銀杏返しに結つて、横なでの痕のある鞭だらけの兩頰を氣持の惡い程赤く火照らせた、如何にも田舍者らしい娘だつた。しかも垢じみた萌黃色の毛絲の襟卷がだらりと垂れ下つた膝の上には、大きな風呂敷包みがあつた。その又包みを抱いた霜燒けの手の中には、三等の赤切符が大事さうにしつかり握られてゐた。私はこの小娘の下品な顏だちを好まなかつた。それから彼女の服裝が不潔なのもやはり不快だつた。最後にその二等と三等との區別さへも辨へない愚鈍な心が腹立たしかつた。だから卷煙草に火をつけた私は、一つにはこの小娘の存在を忘れたいと云ふ心もちもあつて、今度はポケットの夕刊を漫然と膝の上へひろげて見た。すると其時夕刊の紙面に落ちてゐた外光が、突然電燈の光に變つて、刷の惡い何欄かの活字が意外な位鮮に私の眼の前へ浮んで來た。云ふまでもなく汽車は今、横須賀線に多い隧道の最初のそれへはいつたのである。

しかしその電燈の光に照らされた夕刊の紙面を見渡しても、やはり私の憂鬱を慰むべく、世間

は餘りに平凡な出來事ばかりで持ち切つてゐた。講和問題、新婦新郎、瀆職事件、死亡廣告――私は隧道へはいつた一瞬間、汽車の走つてゐる方向が逆になつたやうな錯覺を感じながら、それらの索漠とした記事から記事へ殆機械的に眼を通した。が、その間も勿論あの小娘が、恰も卑俗な現實を人間にしたやうな面持ちで、私の前に坐つてゐる事を絶えず意識せずにはゐられなかつた。この隧道の中の汽車と、この田舍者の小娘と、さうして又この平凡な記事に埋つてゐる夕刊と、――これが象徴でなくて何であらう。不可解な、下等な、退屈な人生の象徴でなくて何であらう。私は一切がくだらなくなつて、讀みかけた夕刊を拋り出すと、又窓枠に頭を靠せながら、死んだやうに眼をつぶつて、うつらうつらし始めた。

それから幾分か過ぎた後であつた。ふと何かに脅されたやうな心もちがして、思はずあたりを見まはすと、何時の間にか例の小娘が、向う側から席を私の隣へ移して、頻に窓を開けようとしてゐる。が、重い硝子戸は中々思ふやうにあがらないらしい。あの鞭だらけの頰は愈々赤くなつて、時々鼻涙をすすり込む音が、小さな息の切れる聲と一しよに、せはしなく耳へはいつて來る。これは勿論私にも、幾分ながら同情を惹くに足るものには相違なかつた。しかし汽車が今將に隧道の口へさしかからうとしてゐる事は、暮色の中に枯草ばかり明るい兩側の山腹が、間近く窓側に迫つて來たのでも、すぐに合點の行く事であつた。にも關らずこの小娘は、わざわざしめてあ

る窓の戸を下さうとする、――その理由が私には呑みこめなかつた。いや、それが私には、單にこの小娘の氣まぐれだとしか考へられなかつた。だから私は腹の底に依然として險しい感情を蓄へながら、あの霜焼けの手が硝子戸を掻げようとして惡戰苦鬪する容子を、まるでそれが永久に成功しない事でも祈るやうな冷酷な眼で眺めてゐた。すると間もなく凄じい音をはためかせて、汽車が隧道へなだれこむと同時に、小娘の開けようとした硝子戸は、とうとうばたりと下へ落ちた。さうしてその四角な穴の中から、煤を溶したやうなどす黒い空氣が、俄に息苦しい煙になつて、濛々と車内へ漲り出した。元來咽喉を害してゐた私は、手巾を顏に當てる暇さへなく、この煙を滿面に浴びせられたおかげで、殆息もつけない程咳きこまなければならなかつた。が、小娘は私に頓着する氣色も見えず、窓から外へ首をのばして、鬢を吹く風に銀杏返しの鬢の毛を戰がせながら、ぢつと汽車の進む方向を見やつてゐる。その姿を煤煙と電燈の光との中に眺めた時、もう窓の外が見る見る明くなつて、そこから土の匂や枯草の匂や水の匂が冷かに流れこんで來なかつたなら、漸咳きやんだ私は、この見知らない小娘を頭ごなしに叱りつけてでも、又元の通り窓の戸をしめさせたのに相違なかつたのである。

しかし汽車はその時分には、もう安々と隧道を辷りぬけて、枯草の山と山との間に挾まれた、或貧しい町はづれの踏切りに通りかかつてゐた。踏切りの近くには、いづれも見すぼらしい藁屋

根や瓦屋根がごみごみと狹苦しく建てこんで、踏切り番が振るのであらう、唯一旒のうす白い旗が懶げに暮色を搖つてゐた。やつと隧道を出たと思ふ――その時その蕭索として踏切りの柵の向うに、私は頰の赤い三人の男の子が、目白押しに並んで立つてゐるのを見た。彼等は皆、この曇天に押しすくめられたかと思ふ程、揃つて背が低かつた。さうして又この町はづれの陰慘たる風物と同じやうな色の着物を着てゐた。それが汽車の通るのを仰ぎ見ながら、一齊に手を擧げるが早いか、いたいけな喉を高く反らせて、何とも意味の分らない喊聲を一生懸命に迸らせた。するとその瞬間である。窓から半身を乘り出してゐた例の娘が、あの霜焼けの手をつとのばして、勢よく左右に振つたと思ふと、忽ち心を躍らすばかり暖な日の色に染まつてゐる蜜柑が凡そ五つ六つ、汽車を見送つた子供たちの上へばらばらと空から降つて來た。私は思はず息を呑んだ。さうして刹那に一切を了解した。小娘は、恐らくはこれから奉公先へ赴かうとしてゐる小娘は、その懷に藏してゐた幾顆の蜜柑を窓から投げて、わざわざ踏切りまで見送りに來た弟たちの勞に報いたのである。

暮色を帶びた町はづれの踏切りと、小鳥のやうに聲を擧げた三人の子供たちと、さうしてその上に亂落する鮮な蜜柑の色と――すべては汽車の窓の外に、瞬く暇もなく通り過ぎた。が、私の心の上には、切ない程はつきりと、この光景が焼きつけられた。さうしてそこから、或得體の知

れない朗な心もちが湧き上つて來るのを意識した。私は昂然と頭を擧げて、まるで別人を見るやうにあの小娘を注視した。小娘は何時かもう私の前の席に返つて、相不變皺だらけの頰を萌黃色の毛絲の襟卷に埋めながら、大きな風呂敷包みを抱へた手に、しつかりと三等切符を握つてゐる。

……

私はこの時始めて、云ひやうのない疲勞と倦怠とを、さうして又不可解な、下等な、退屈な人生を僅に忘れる事が出來たのである。

沼地

或雨の降る日の午後であつた。私は或繪畫展覽會場の一室で、小さな油繪を一枚發見した。發見――と云ふと大袈裟だが、實際さう云つても差支へない程、この畫だけは思ひ切つて採光の惡い片隅に、それも恐しく貧弱な緣へはいつて、忘れられたやうに懸かつてゐたのである。畫は確、「沼地」とか云ふので、畫家は知名の人でも何でもなかつた。又畫そのものも、唯濁つた水と、濕つた土と、さうしてその土に繁茂する草木とを描いただけだから、恐らく尋常の見物からは、文字通り一顧さへも受けなかつた事であらう。

その上不思議な事にこの畫家は、蓊鬱たる草木を描きながら、一刷毛も綠の色を使つてゐない。蘆や白楊や無花果を彩るものは、どこを見ても濁つた黃色である。まるで濡れた壁土のやうな、重苦しい黃色である。この畫家には草木の色が實際さう見えたのであらうか。それとも別に好む所があつて、故意こんな誇張を加へたのであらうか。――私はこの畫の前に立つて、それから受ける感じを味ふと共に、かう云ふ疑問も亦挾まずにはゐられなかつたのである。

しかしその畫の中に恐しい力が潜んでゐる事は、見てゐるに從つて分つて來た。殊に前景の土

の如きは、そこを踏む時の足の心もちまでもまざまざと感じさせる程、それ程的確に描いてあつた。踏むとぶすりと音をさせて踝が隠れるやうな、滑な淤泥の心もちである。私はこの小さな油畫の中に、鋭く自然を掴まうとしてゐる、傷しい藝術家の姿を見出した。さうしてあらゆる優れた藝術品から受ける様に、この黄いろい沼地の草木からも恍惚たる悲壯の感激を受けた。實際同じ會場に懸かつてゐる大小さまざまな畫の中で、この一枚に抗抗し得る程力強い畫は、どこにも見出す事が出來なかつたのである。

「大へんに感心してゐますね。」

かう云ふ言と共に肩を叩かれた私は、恰も何かが心から振ひ落されたやうな氣もちがして、卒然と後をふり返つた。

「どうです、これは。」

相手は無頓着にかう云ひながら、剃刀を當てたばかりの顎で、沼地の畫をさし示した。流行の茶の背廣を着た、恰幅の好い、消息通を以て自ら任じてゐる、——新聞の美術記者である。私はこの記者から前にも一二度不快な印象を受けた覺えがあるので、不承々々に返事をした。

「傑作です。」

「傑作——ですか。これは面白い。」

記者は腹を搖つて笑つた。その聲に驚かされたのであらう。近くで畫を見てゐた二三人の見物が皆云ひ合せたやうにこちらを見た。私は愈不快になつた。

「これは面白い。元來この畫はね、會員の畫ぢやないのです。が、何しろ當人が口癖のやうにここへ出す出すと云つてゐたものですから、遺族が審査員へ賴んで、やつとこの隅へ懸ける事になつたのです。」

「遺族？　ぢやこの畫を描いた人は死んでゐるのですか。」

「死んでゐるのです。尤も生きてゐる中から、死んだやうなものでしたが。」

私の好奇心は何時か私の不快な感情より強くなつてゐた。

「どうして？」

「この畫描きは餘程前から氣が違つてゐたのです。」

「この畫を書いた時もですか。」

「勿論です。氣違ひででもなければ、誰がこんな色の畫を描くものですか。それをあなたは傑作だと云つて感心してお出でなさる。そこが大に面白いですね。」

記者は又得意さうに、聲を擧げて笑つた。彼は私が私の不明を恥ぢるだらうと豫測してゐたのであらう。或は一歩進めて、鑑賞上に於ける彼自身の優越を私に印象させようと思つてゐたのか

も知れない。しかし彼の期待は二つとも無駄になつた。彼の話を聞くと共に、殆嚴肅にも近い感情が私の全精神に云ひやうのない波動を與へたからである。私は悚然として再びこの沼地の畫を凝視した。さうして再びこの小さなカンヴアスの中に、恐しい焦燥と不安とに虐まれてゐる傷しい藝術家の姿を見出した。

「尤も畫が思ふやうに描けないと云ふので、氣が遙つたらしいのですがね。その點だけはまあ買へば買つてやれるのです。」

記者は晴々した顏をして、殆嬉しさうに微笑した。これが無名の藝術家が――我々の一人が、その生命を犧牲にして僅に世間から購ひ得た唯一の報酬だつたのである。私は全身に異樣な戰慄を感じて、三度この憂鬱な油畫を覗いて見た。そこにはうす暗い空と水との間に、濡れた黃土の色をした蘆が、白楊が、無花果が、自然それ自身を見るやうな淒じい勢で生きてゐる。……

「傑作です。」

私は記者の顏をまともに見つめながら、昂然としてかう繰返した。

「蜜柑」は大正八年の作、大正九年一月春陽堂刊行の短篇小說集「影燈籠」及び選集「沙羅の花」「芥川龍之介集」等に收載。「沼地」は大正八年の作、同じく「影燈籠」に收載。

子供の病氣

――一遊亭に――

夏目先生は書の幅を見ると、獨り語のやうに「旭窓だね」と云つた。落款は成程旭窓外史だつた。自分は先生にかう云つた。「旭窓は淡窓の孫でせう。淡窓の子は何と言ひましたかしら？」先生は卽座に「夢窓だらう」と答へた。

――すると急に目がさめた。蚊帳の中にはもしの間にともした電燈の光がさしこんでゐた。妻は二つになる男の子のおむつを取り換へてゐるらしかつた。子供は勿論泣きつづけてゐた。自分はそちらに背を向けながら、もう一度眠りにはひらうとした。すると妻がかう云つた。「いやよ。多加ちやん。又病氣になつちやあ」自分は妻に聲をかけた。「どうかしたのか？」「ええ。お腹が少し惡いやうなんです」この子供は長男に比べると、何かに病氣をし勝ちだつた。それだけに不安も感じれば、反對に又馴れつこのやうに等閑にする氣味もないではなかつた。「あした、Sさんに見て頂けよ」「ええ、今夜見て頂かうと思つたんですけれども」自分は子供の泣きやんだ後、もとのやうにぐつすり寢入つてしまつた。

翌朝目をさました時にも、夢のことははつきり覺えてゐた。淡窓は廣瀬淡窓の氣だつた。しかし旭窓だの夢窓だのと云ふのは全然架空の人物らしかつた。さう云へば確か講釋師に南窓と云ふのがあつたなどと思つた。しかし子供の病氣のことは餘り心にもかからなかつた。それが多少氣になり出したのはSさんから歸つて來た妻の言葉を聞いた時だつた。「やつぱり消化不良ですつて。先生も後ほどいらつしやいますつて」妻は子供を横抱きにしたまま、怒つたやうにものを云つた。「熱は？」「七度六分ばかり、――ゆうべはちつともなかつたんですけれども」自分は二階の書齋へこもり、毎日の仕事にとりかかつた。仕事は不相變捗どらなかつた。が、それは必しも子供の病氣のせいばかりではなかつた。その中に、庭木を鳴らしながら、蒸暑い雨が降り出した。自分は書きかけの小說を前に、何本も敷島へ火を移した。

Sさんは午前に一度、日の暮に一度診察に見えた。日の暮には多加志の洗腸をした。多加志は洗腸されながら、まじまじ電燈の火を眺めてゐた。洗腸の液は少時すると、淡黑い粘液をさらひ出した。自分は病を見たやうに感じた。「どうでせう？　先生」「何、大したことはありません。唯氷を絶やさずに十分頭を冷やして下さい。――ああ、それから餘りおあやしにならんやうに」先生はさう云つて歸つて行つた。

自分は夜も仕事をつづけ、一時ごろやつと床へはひつた。その前に後架から出て來ると、誰かこつ暗な處所に、こつこつ音をさせてゐるものがあつた。「誰？」「わたしだよ」返事をしたのは母の聲だつた。「何をしてゐるんです？」「氷を壞してゐるんだよ」自分は迂濶を恥ぢながら、「電燈をつければ好いのに」と云つた。「大丈夫だよ。手探りでも」自分はかまはずに電燈をつけた。細帶一つになつた母は無器用に金槌を使つてゐた。その姿は何だか家庭に見るには、餘りにみすぼらしい氣のするものだつた。氷も水に洗はれた角には、きらりと電燈の光を反射してゐた。

けれども翌朝の多加志の熱は九度よりも少し高い位だつた。Sさんは又午前中に見え、ゆうべの洗腸を繰り返した。自分はその手傳ひをしながら、けふは粘液の少ないやうにと思つた。しかし便器をぬいて見ると、粘液はゆうべよりもずつと多かつた。それを見た妻は誰にともなしに、「あんなにあります」と聲を擧げた。その聲は年の七つも若い女學生になつたかと思ふ位、はしたない調子を帶びたものだつた。自分は思はずSさんの顏を見た。「疫痢ではないでせうか？」「いや、疫痢ぢやありません。疫痢は乳離れをしない內には、――」Sさんは案外落ち着いてゐた。

自分はSさんの歸つた後、毎日の仕事にとりかかつた。それは「サンデー毎日」の特別號に載せる小說だつた。しかも原稿の締切りはあしたの朝に迫つてゐた。自分は氣乘のしないのを、無理にペンだけ動かしつづけた。けれども多加志の泣き聲は兎角神經にさはり勝ちだつた。のみな

らず多加志が泣きやんだと思ふと、今度は二つ年上の比呂志も思ひ切り、大聲に泣き出したりした。

神經にさはることはそればかりではなかつた。午後には見知らない青年が一人、金の工面を頼みに來た。「僕は筋肉勞働者ですが、C先生から先生に紹介狀を貰ひましたから」青年は無骨さうにかう云つた。自分は現在墓口に二三圓しかなかつたから、不用の書物を二冊渡し、これを金に換へ給へと云つた。青年は書物を受け取ると、丹念に奥附を檢べ出した。「この本は非賣品と書いてありますね。非賣品でも金になりますか？」自分は情ない心もちになつた。が、兎に角賣れる筈だと答へた。「さうですか？　ぢや失敬します。」青年はただ疑はしさうに、有難うとも何とも云はずに歸つて行つた。

Sさんは日の暮にも洗腸をした。今度は粘液もずつと減つてゐた。「ああ、今晩は少なうどざいますね」手洗ひの湯をすすめに來た母は殆ど手柄顔にかう云つた。自分も安心をしなかつたにしろ、安心に近い寛ぎを感じた。それには粘液の多少の外にも、多加志の顔色や擧動などのふだんに變らないせゐもあつたのだつた。「あしたは多分熱が下るでせう。幸ひ吐き氣も來ないやうですから」Sさんは母に答へながら、滿足さうに手を洗つてゐた。

翌朝自分の眼をさました時、伯母はもう次の間に自分の蚊帳を疊んでゐた。それが蚊帳の環を

鳴らしながら「多加ちやんが」何とか云つたらしかつた。まだ頭のぼんやりしてゐた自分は「多加志が？」と好い加減に問ひ返した。「多加ちやんが惡いんだよ。入院させなければならないんだとさ」自分は床の上に起き直つた。きのふのけふだけに意外な氣がした。「Sさんは？」「先生ももう來ていらつしやるんだよ、さあさあ、早くお起きなさい」伯母は感情を隱すやうに、妙にかたくなな顔をしてゐた。自分はすぐに顔を洗ひに行つた。不相變雲のかぶさつた、氣色の惡い天氣だつた。風呂場の手桶には山百合が二本、無造作に唯拋りこんであつた。何だかその匂や褐色の花粉がべたべたに皮膚にくつつきさうな氣がした。

多加志はたつた一晩のうちに、すつかり眼が窪んでゐた。今朝妻が抱き起さうとすると、頭を仰向けに垂らしたまま、白い物を吐いたとか云ふことだつた。欠伸ばかりしてゐるのもいけないらしかつた。自分は急にいぢらしい氣がした。同時に又無氣味な心もちもした。Sさんは子供の枕もとに默然と敷島を喫へてゐた。それが自分の顔を見ると、「ちとお話しまいことがありますから」と云つた。自分はSさんを二階に招じ、火のない火鉢をさし挾んで坐つた。「生命に危險はないと思ひますが」Sさんはさう口を切つた。多加志はSさんの言葉によれば、すつかり腸胃を壞してゐた。この上は唯二三日の間、斷食をさせる外に仕かたはなかつた。「それには入院おさせになつた方が便利ではないかと思ふんです」自分は多加志の容體はSさんの云つてゐるより

も、ずつと危いのではないかと思つた。或はもう入院させても、手遅れなのではないかとも思つた。しかしもとよりそんなことにこだはつてゐるべき場合ではなかつた。自分は早速Sさんに入院の運びを願ふことにした。「ぢやU病院にしませう。近いだけでも便利ですから」Sさんはすすめられた茶も飲まずに、U病院へ電話をかけに行つた。自分はその間に妻を呼び、伯母にも病院へ行つて貰ふことにした。

その日は客に會ふ日だつた。客は朝から四人ばかりあつた。自分は客と話しながら、入院の支度を急いでゐる妻や伯母を意識してゐた。すると何か舌の先に、砂粒に似たものを感じ出した。自分はこのごろ齲齒につめたセメントがとれたのではないかと思つた。けれども指先に出して見ると、ほんたうの齒の缺けたのだつた。自分は少し迷信的になつた。しかし客とは煙草をのみのみ、賣り物に出たとか噂のある抱一の三味線の話などをしてゐた。

其處へ又筋肉勞働者と稱する昨日の青年も面會に來た。青年は玄關に立つたまま、昨日貰つた二冊の本は一圓二十錢にしかならなかつたから、もう四五圓くれないかと云ふ掛け合ひをはじめた。のみならず如何に斷つても、容易に歸るけしきを見せなかつた。自分はとうとう落着きを失ひ、「そんなことを聞いてゐる時間はない。歸つて貰はう」と怒鳴りつけた。青年はまだ不服さうに、「ぢや電車賃だけ下さい。五十錢貰へば好いんです」などと、さもしいことを並べてゐた。

が、その手も利かないのを見ると、手荒に玄關の格子戸をしめ、やつと門外に退散した。自分はこの時から云ふ寄附には今後斷然應ずまいと思つた。

四人の客は五人になつた。五人目の客は年の若い佛蘭西文學の研究者だつた。自分はこの客と入れ違ひに、茶の間の客子を窺ひに行つた。するともう支度の出來た伯母は着肥つた子供を抱きながら、緣側をあちこち歩いてゐた。自分は色の惡い多加志の額へ、そつと脣を押しつけて見た。額は可成火照つてゐた。しほむきもぴくぴく動いてゐた。「車は？」自分は小聲に外のことを云つた。「車？　車はもう來てゐます」伯母はなぜか他人のやうに、叮嚀な言葉を使つてゐた。其處へ着物を更めた妻も羽根布團やバスケットを運んで來た。「では行つて參ります」妻は自分の前へ兩手をつき、妙に眞面目な聲を出した。自分は唯多加志の帽子を新しいやつに換へてやれと云つた。それはつい四五日前、自分の買つて來た夏帽子だつた。「もう新しいのに換へて置きました」妻はさう答へた後、箪笥の上の鏡を覗き、ちよいと襟もとを掻き合せた。自分は彼等を見送らずに、もう一度二階へ引き返した。

自分は新たに來た客とジョルジュ・サンドの話などをしてゐた。その時庭木の若葉の間に二つの車の幌が見えた。幌は垣の上にゆらめきながら、忽ち目の前を通り過ぎた。「一體十九世紀の前半の作家はバルザックにしろサンドにしろ、後半の作家よりは偉いですね」客は――自分は

つきり覺えてゐる。客は熱心にかう云つてゐた。

午後にも客は絶えなかつた。自分はやつと日の暮に病院へ出かける時間を得た。曇天は何時か雨になつてゐた。自分は着物を着換へながら、女中に足駄を出すやうにと云つた。其處へ大阪のN君が原稿を貰ひに顔を出した。N君は泥まみれの長靴をはき、外套に雨の痕を光らせてゐた。自分は玄關に出迎へたまま、これこれの事情のあつた爲に、何も書けなかつたと云ふ斷りを述べた。N君は自分に同情した。「ぢや今度はあきらめます」とも云つた。自分は何だかN君の同情を強ひたやうな心もちがした。同時に體の好いロ實に瀕死の子供を使つたやうな氣がした。

N君の歸つたか歸らないのに、伯母も病院から歸つて來た。多加志は伯母の話によれば、其の後も二度ばかり乳を吐いた。しかし幸ひ腦にだけは異狀も來ずにゐるらしかつた。伯母はまだこの外に看護婦は氣立ての善ささうなこと、今度は病院へ妻の母が泊りに來てくれることなどを話した。「多加ちやんがあすこへはひると直に、日曜學校の生徒からだつて、花を一束貰つたでせう。さあ、お花だけにいやな氣がしてね」そんなことも話してゐた。自分はけさ話をしてゐる內に、齒の缺けたことを思ひ出した。が、何とも云はなかつた。

家を出た時はまつ暗だつた。その中に細かい雨が降つてゐた。自分は門を出ると同時に、日和下駄をはいてゐるのに心づいた。しかもその日和下駄は左の前鼻緒がゆるんでゐた。自分は何だ

かこの鼻緒が切れると、子供の命も終りさうな氣がした。しかしはき換へに歸るのは到底苛立たしさに堪へなかつた。自分は足駄を出さなかつた女中の愚を怒りながら、うつかり下駄を踏み返さないやうに、氣をつけ歩いて行つた。

病院へ着いたのは九時過ぎだつた。成程多加志の病室の外には姫百合や撫子が五六本、洗面器の水に浸されてゐた。病室の中の電燈の玉に風呂敷か何か懸つてゐたから、顔も見えない程薄暗かつた。其處に妻や妻の母は多加志を中に挾んだまま、帶を解かずに横になつてゐた。多加志は妻の母の腕を枕に、すやすや寢入つてゐるらしかつた。妻は自分の來たのを知ると一人だけ布團の上に坐り、小聲に「どうも御苦勞さま」と云つた。妻の母もやはり同じことを云つた。それは豫期してゐたよりも、氣輕い調子を帶びたものだつた。自分は幾分かほつとした氣になり、彼等の枕もとに腰を下した。妻は乳を飲ませられぬ爲に、多加志は泣くし、乳は張るし、二重に苦しい思ひをすると云つた。「とてもゴムの乳つ首位ぢや駄目なんですもの。しまひには舌を吸はせましたわ」「今はわたしの乳を飲んでゐるんですよ」妻の母は笑ひながら、萎びた乳首を出して見せた。「一生懸命に吸ふんでね、こんなにまつ赤になつてしまつた」自分も何時か笑つてゐた。「しかし存外好ささうですね。僕はもう今どうは絶望かと思つた」「多加ちやん？　多加ちやんはもう大丈夫ですとも。なあに、只のお腹下しなんですよ。あしたはきつと熱が下りますよ」「御

祖師様の御利益でせう？」妻は母をひやかした。しかし法華經信者の母は妻の言葉も聞えないやうに、悪い熱をさますつもりか、一生懸命に口を尖らせ、ふうふう多加志の頭を吹いた。……

多加志はやつと死なずにすんだ。自分は彼の小康を得た時、入院前後の消息を小品にしたいと思つたことがある。けれどもうつかりさう云ふものを作ると、又病氣がぶり返しさうな、迷信じみた心もちがした。その爲にとうとう書かずにしまつた。今は多加志も庭木に吊つたハムモツクの中に眠つてゐる。自分は原稿を頼まれたのを機會に、とりあへずこの話を書いて見ることにした。讀者には寧ろ迷惑かも知れない。

この作は大正十一年八月の雜誌「局外」に發表し、大正十三年七月、新潮社刊行の短篇小說集「黃雀風」及び「芥川龍之介集」に收む。

お時儀

保吉は三十になつたばかりである。その上あらゆる賣文業者のやうに、目まぐるしい生活を營んでゐる。だから「明日」は考へても「昨日」は滅多に考へない。しかし往來を歩いてゐたり、原稿用紙に向つてゐたり、電車に乘つてゐたりする間にふと過去の一情景を鮮かに思ひ浮べることがある。それは從來の經驗によると、大抵嗅覺の刺戟から聯想を生ずる結果らしい。その又嗅覺の刺戟なるものも都會に住んでゐる悲しさには、惡臭と呼ばれる匂ばかりである。たとへば汽車の煤煙の匂は何人も嗅ぎたいと思ふ筈はない。けれども或お孃さんの記憶、――五六年前に顏を合せた或お孃さんの記憶などはあの匂を嗅ぎさへすれば、煙突から迸る火花のやうに忽ちよみがへつて來るのである。

このお孃さんに遇つたのは或避暑地の停車場である。或はもつと嚴密に云へば、あの停車場のプラットフォオムである。當事その避暑地に住んでゐた彼は、雨が降つても、風が吹いても、午前は八時發の下り列車に乘り、午後は四時二十分着の上り列車を降りるのを常としてゐた。なぜ又毎日汽車に乘つたかと云へば、――そんなことは何でも差支へない。しかし毎日汽車になど乘

れば、一ダズン位の顔馴染みは忽ちの内に出來てしまふ。お嬢さんもその中の一人である。けれども午後には七草から三月の二十何日か迄、一度も遇つたと云ふ記憶はない。午前もお嬢さんの乘る汽車は保吉には緣のない上り列車である。

お嬢さんは十六か十七であらう。いつも銀鼠の洋服に銀鼠の帽子をかぶつてゐる。背は寧ろ低い方かも知れない。けれども見たところはすらりとしてゐる。殊に脚は、——やはり銀鼠の靴下に踵の高い靴をはいた脚は鹿の脚のやうにすらりとしてゐる。顏は美人と云ふほどではない。しかし、——保吉はまだ東西を論ぜず、近代の小說の女主人公に無條件の美人を見たことはない。作者は女性の描寫になると、大低「彼女は美人ではない。しかし……」とか何とか斷つてゐる。按ずるに無條件の美人を認めるのは近代人の面目に關るらしい。だから保吉も、このお嬢さんに「しかし」と云ふ條件を加へるのである。——念の爲にもう一度繰り返すと、顏は美人と云ふほどではない。しかしちよいと鼻の先の上つた、愛敬の多い圓顏である。

お嬢さんは騷がしい人ごみの中にぼんやり立つてゐることがある。人ごみを離れたベンチの上に雜誌などを讀んでゐることがある。或は又長いプラットフォオムの緣をぶらぶら步いてゐることもある。

保吉はお嬢さんの姿を見ても、戀愛小說に書いてあるやうな動悸などの高ぶつた覺えはない。

唯やはり顏馴染みの鎭守府司令長官や賣店の猫を見た時の通り、「ゐるな」と考へるばかりである。しかし兎に角顏馴染みに對する親しみだけは抱いてゐた。だから時たまプラットフォオムにお嬢さんの姿を見ないことがあると、何か失望に似たものを感じた。何か失望に似たものを、——それさへ痛切には感じた譯ではない。保吉は現に賣店の猫が二三日行くへを晦ました時にも、全然變りのない寂しさを感じた。もし鎭守府司令長官も頓死か何か遂げたとすれば、——この場合は聊か疑問かも知れない。が、まづ猫ほどではないにもしろ、勝手の違ふ氣だけは起つた筈である。

ところが三月の二十何日か、生暖い曇天の午後のことである。保吉はその日も勤め先から四時二十分着の上り列車に乘つた。何でもかすかな記憶によれば、調べ仕事に疲れてゐたせゐか、汽車の中でもふだんのやうに本を讀みなどはしなかつたらしい。唯窓べりによりかかりながら、春めいた山だの畠だのを眺めてゐたやうに覺えてゐる。いつか讀んだ橫文字の小說に平地を走る汽車の音を「Trataata tratata tratata」と寫し、鐵橋を渡る汽車の音を「Traaraach traaraach」と寫したのがある。成程ぼんやり耳を貸してゐると、ああ云ふ風にも聞えないことはない。——そんなことを考へたのも覺えてゐる。

保吉は物憂い三十分の後、やつとあの避暑地の停車場へ降りた。プラットフォオムには少し前

に着いた下り列車も止まつてゐる。彼は人ごみに交りながら、ふとその汽車を降りる人を眺めた。すると――意外にもお嬢さんだつた。保吉は前にも書いたやうに、午後にはまだこのお嬢さんと一度も顔を合せたことはない。それが今不意に目の前へ、日の光りを透かした雲のやうな、或は猫柳の花のやうな銀鼠の姿を現したのである。彼は勿論「おや」と思つた。お嬢さんも確にその瞬間、保吉の顔を見たらしかつた。と同時に保吉は思はずお嬢さんへお時儀をしてしまつた。

お時儀をされたお嬢さんはびつくりしたのに相違あるまい。が、どう云ふ顔をしたか、生憎もう今では忘れてゐる。いや、當時もそんなことは見定める餘裕を持たなかつたのであらう。彼は「しまつた」と思ふが早いか、忽ち耳の火照り出すのを感じた。けれどもこれだけは覺えてゐる。

――お嬢さんも彼に會釋をした！

やつと停車場の外へ出た彼は彼自身の愚に憤りを感じた。なぜ又お時儀などをしてしまつたのであらう？　あのお時儀は全然反射的である。ぴかりと稲妻の光る途端に瞬きをするのも同じことである。すると意志の自由にはならない。意志の自由にならない行爲は責任を負はずとも好い筈である。けれどもお嬢さんは何と思つたであらう？　成程お嬢さんも會釋をした。しかしあれは驚いた拍子にやはり反射的にしたのかも知れない。今ごろはずゐぶん保吉を不良少年と思つてゐさうである。一そ「しまつた」と思つた時に無躾を詫びてしまへば好かつた。さう云ふことにも氣づかなかつたと云ふのは……

保吉は下宿へ歸らずに、人影の見えない砂濱へ行つた。これは珍らしいことではない。彼は一月五圓の貸間と一食五十錢の辨當とにしみじみ世の中が厭になると、必ずこの砂の上へグラスゴオのパイプをふかしに來る。この日も曇天の海を見ながら、まづパイプへマッチの火を移した。今日のことはもう仕方がない。けれども又明日になれば、必ずお嬢さんと顔を合せる。お嬢さんはその時どうするであらう？　彼は不良少年と思つてゐれば、一瞥を與へないのは當然である。しかし不良少年と思つてゐなければ、明日も亦今日のやうに彼のお時儀に答へるかも知れない。彼のお時儀に？　彼は――堀川保吉は、もう一度あのお嬢さんに恬然とお時儀をする氣であらうか？　いや、お時儀をする氣はない。けれども一度お時儀をした以上、何かの機會にお嬢さんも彼も會釋をし合ふことはありさうである。もし會釋をし合ふとすれば、……保吉はふとお嬢さんの眉の美しかつたことを思ひ出した。

爾來七八年を經過した今日、その時の海の靜かさだけは妙に鮮かに覺えてゐる。保吉はかう云ふ海を前に、いつまでも唯茫然と火の消えたパイプを咬へてゐた。尤も彼の考へはお嬢さんの上にばかりあつた譯ではない。たとへば近近とりかかる筈の小説のことも思ひ浮かべた。その小説の主人公は革命的精神に燃え立つた、或英吉利語の教師である。鰹骨の名の高い彼の頸は如何な

る權威にも屈することを知らない。但し前後にたつた一度、或類馴染みのお嬢さんへうつかりお時儀をしてしまつたことがある。お嬢さんは背は低い方かも知れない。けれども見たところはすらりとしてゐる。殊に銀鼠の靴下の踵の高い靴をはいた脚は――兎に角自然とお嬢さんのことを考へ勝ちだつたのは事實かも知れない。……

翌朝の八時五分前である。保吉は人のこみ合つたプラットフォオムを歩いてゐた。彼の心はお嬢さんと出會つた時の期待に張りつめてゐる。出會はずにすましたい氣もしないではない。が、出會はずにすませるのは不本意のことも確かである。云はば彼の心もちは強敵との試合を目前に控へた拳闘家の氣組みと變りはない。しかしそれよりも忘れられないのはお嬢さんと顏を合せた途端に、何か常識を超越した、莫迦莫迦しいことをしはしないかと云ふ、妙に病的な不安である。昔、ジアン・リシュパンは通りがかりのサラア・ベルナアルへ傍若無人の接吻をした。日本人に生れた保吉はまさか接吻はしないかも知れないけれどもいきなり舌を出すとか、あかんべいをするとかはしさうである。彼は内心冷ひやしながら、捜すやうに捜さないやうにあたりの人人を見まはしてゐた。

すると忽ち彼の目は、悠悠とこちらへ歩いて來るお嬢さんの姿を發見した。彼は宿命を迎へるやうに、まつ直に歩みをつづけて行つた。二人は見る見る接近した。十歩、五歩、三歩、――お

嬢さんは傘の前に立つた。保吉は頭を擡げたまま、まともにお嬢さんの顏を眺めた。お嬢さんもぢつと彼の顏へ落着いた目を注いでゐる。二人は顏を見合せたなり、何ごともなしに行き違はうとした。

丁度その刹那だつた。彼は突然お嬢さんの目に何か動搖に似たものを感じた。同時に又殆ど體中にお時儀をしたい衝動を感じた。けれどもそれは壓け値なしに、一瞬の間の出來事だつた。お嬢さんははつとした彼の後ろにしづしづともう通り過ぎた。日の光りを透かした雲のやうに、或は花をつけた猫柳のやうに。……

二十分ばかりたつた後、保吉は汽車に揺られながら、グラスゴオのパイプを啣へてゐた。お嬢さんは何も眉毛ばかり美しかつた訣ではない。目も亦涼しい黒瞳勝ちだつた。心もち上を向いた鼻も、……しかしこんなことを考へるのはやはり戀愛と云ふのであらうか？……彼はその間にどう答へたか、これも亦記憶には殘つてゐない。唯保吉の覺えてゐるのは、いつか彼を襲ひ出した、薄明るい憂鬱ばかりである。彼はパイプから立ち昇る一すぢの煙を見守つたまま、少時はこの憂鬱の中にお嬢さんのことばかり考へつづけた。汽車は勿論さう云ふ間も半面に朝日の光りを浴びた山山の峽を走つてゐる。

「Tratata tratata tratata trararach」.

この作品は大正十二年十月號の雜誌「女性」に掲載され、短篇集「黃雀風」及び「芥川龍之介集」に收錄されてゐる。

點鬼簿

一

僕の母は狂人だつた。僕は一度も僕の母に母らしい親しみを感じたことはない。僕の母は髮を櫛卷きにし、いつも芝の實家にたつた一人坐りながら、長煙管ですばすば煙草を吸つてゐる。顏も小さければ體も小さい。その又顏はどう云ふ訣か、少しも生氣のない灰色をしてゐる。僕はいつか西廂記を讀み、土口氣泥臭味の語に出合つた時に忽ち僕の母の顏を、——痩せ細つた橫顏を思ひ出した。

かう云ふ僕は僕の母に全然面倒を見て貰つたことはない。何でも一度僕の養母とわざわざ二階へ挨拶に行つたら、いきなり頭を長煙管で打たれたことを覺えてゐる。しかし大體僕の母は如何にももの靜かな狂人だつた。僕や僕の姉などに畫を描いてくれと迫られると、四つ折の半紙に畫を描いてくれる。畫は墨を使ふばかりではない。僕の姉の水繪の具を行樂の子女の衣服だの草木の花だのになすつてくれる。唯それ等の畫中の人物はいづれも狐の顏をしてゐた。

僕の母の死んだのは僕の十一の秋である。それは病の爲よりも衰弱の爲に死んだのであらう。その死の前後の記憶だけは割り合にはつきりと殘つてゐる。

危篤の電報でも來た爲であらう。僕は或風のない深夜、僕の養母と人力車に乘り、本所から芝まで駈けつけて行つた。僕はまだ今日でも襟卷と云ふものを用ひたことはない。が、特にこの夜だけは南畫の山水か何かを描いた、薄い絹の手巾をまきつけてゐたことを覺えてゐる。それからその手巾には「アヤメ香水」と云ふ香水の匂ひのしてゐたことも覺えてゐる。

僕の母は二階の眞下の八疊の座敷に横たはつてゐた。僕は四つ違ひの僕の姉と僕の母の枕もとに坐り、二人とも絶えず聲を立てて泣いた。殊に誰か僕の後ろで「御臨終御臨終」と言つた時には一層切なさのこみ上げるのを感じた。しかし今まで瞑目してゐた、死人にひとしい僕の母は突然目をあいて何か言つた。僕等は皆悲しい中にも小聲でくすくす笑ひ出した。

僕はその次の晩も僕の母の枕もとに夜明近くまで坐つてゐた。が、なぜかゆうべのやうに少しも涙は流れなかつた。僕は殆ど泣き聲を絶たない僕の姉の手前を恥ぢ、一生懸命に泣く眞似をしてゐた。同時に又僕の泣かれない以上、僕の母は死ぬことは必ずないと信じてゐた。

僕の母は三日目の晩に殆ど苦しまずに死んで行つた。死ぬ前には正氣に返つたと見え、僕等の顏を眺めてはとめ度なしにぽろぽろ涙を落した。が、やはりふだんのやうに何とも口は利かなか

つた。

僕は納棺を終つた後にも時々泣かずにはゐられなかつた。すると「王子の叔母さん」と云ふ或遠緣のお婆さんが一人「ほんたうに御感心でございますね」と言つた。しかし僕は妙なことに感心する人だと思つただけだつた。

僕の母の葬式の出た日、僕の姉は位牌を持ち、僕はその後ろに香爐を持ち二人とも人力車に乘つて行つた。僕は時々居睡りをし、はつと思つて目を醒さす拍子に危く香爐を落しさうにする。けれども谷中へは中々來ない。可也長い葬列はいつも秋晴れの東京の町をしづしづと練つてゐるのである。

僕の母の命日は十一月二十八日である。又戒名は歸命院妙乘日進大姉である。僕はその辯僕の實父の命日や戒名を覺えてゐない。それは多分十一の僕には命日や戒名を覺えることも誇りの一つだつた爲であらう。

二

僕は一人の姉を持つてゐる。しかし、これは病身ながらも二人の子供の母になつてゐる。僕の「點鬼簿」に加へたいのは勿論この姉のことではない。丁度僕の生まれる前に突然夭折した姉の

ことである。僕等三人の姉弟の中でも一番賢かつたと云ふ姉のことである。

この姉を初子と云つたのは長女に生まれた爲だつたであらう。僕の家の佛壇には未だに「初ちやん」の寫眞が一枚小さい額縁の中にはひつてゐる。初ちやんは少しもか弱さうではない。小さい笑窪のある兩頰なども熟した杏のやうにまるまるしてゐる。……

僕の父や母の愛を一番餘計に受けたものは何と云つても「初ちやん」である。「初ちやん」は芝の新錢座からわざわざ築地のサンマアズ夫人の幼稚園か何かへ通つてゐた。が、土曜から日曜へかけては必ず僕の母の家へ――本所の芥川家へ泊りに行つた。「初ちやん」はかう云ふ外出の時にはまだ明治二十年代でも今めかしい洋服を着てゐたのであらう。僕は小學校へ通つてゐた頃、「初ちやん」の着物の端巾を貰ひ、ゴム人形に着せたのを覺えてゐる。その又端巾は言ひ合せたやうに細かい花や樂器を散らした舶來のキャラコばかりだつた。

或春先の日曜の午後、「初ちやん」は庭を歩きながら、座敷にゐる伯母に聲をかけた。（僕は勿論この時の姉の洋服を着てゐたやうに想像してゐる。）

「伯母さん、これは何と云ふ樹？」

「どの樹？」

「この苔のある樹。」

閲八

欠

みにはひつたのである。僕は飲みものを註文した後も、つらつら谷崎氏の喉もとに燃えたロマンティシズムの烽火を眺めてゐた。すると白粉の剝げた女給が一人、兩手にコップを持ちながら、僕等のテエブルへ近づいて來た。コップは眞理のやうに澄んだ水に細かい泡を躍らせてゐた。女給はそのコップを一つづつ、僕等の前へ立て並べた。それから、――僕はまだ鮮かにあの女給の言葉を覺えてゐる！　女給は立ち去り難いやうにテエブルへ片手を殘したなり、しけじけと谷崎氏の胸を覗きこんだ。

「まあ、好い色のネクタイをしていらつしやるわねえ。」

十分の後、僕はテエブルを離れる時に五十錢のティップを渡さうとした。谷崎氏はあらゆる東京人のやうに無用のティップをやることに輕蔑を感ずる一人である。この時も勿論五十錢のティップは谷崎氏の冷笑を免れなかつた。

「何も君、世話にはならないぢやないか？」

僕はこの先輩の冷笑にも羞ぢず、皺だらけの札を女給に渡した。女給は何も僕等の爲に炭酸水を運んだばかりではない。又實に僕の爲には赤い襟飾りに關する眞理を天下に擧揚してくれたのである。僕はまだこの時の五十錢位誠意のあるティップをやつたことはない。

欠

宇野浩二氏

宇野浩二は聰明の人である。同時に又多感の人である。尤も本來の喜劇的精神は人を欺くことがあるかも知れない。が、己を欺くことは極めて稀にしかない人である。

のみならず、又宇野浩二は喜劇的精神を發揮しないにもしろ、あらゆる多感と聰明とを二つとも兼ね具へた人のやうに滅多にムキにならない人である。喜劇的精神を發揮することそのことにもムキにはならない人である。これは時には宇野浩二に怪物の看を與へるかも知れない。しかし其處に獨特のシャルム――たとへば精神的カメレオンに對するシャルムの存することも事實である。

宇野浩二は本名格二（或は次）郎である。あの色の淺黑い顏は正に格二郎に違ひない。殊に三味線を彈いてゐる宇野は浩さん離れのした格さんである。

次手に顏のことを少し書けば、わたしは宇野の顏を見る度に必ず多少の食慾を感じた。あの顏は頰から耳のあたりをコオルド・ビフのやうに料理するが好い。皿に載せた一片の肉はほんのりと赤い所どころに白い脂肪を交へてゐる。が、ちよつと裏返して見ると、鳥膚になつた頰の皮は

もぢやもぢやした揉み上げを殘してゐる。――と云ふ空想をしたこともあつた。尤も實際口へ入れて見たら、豫期通り一杯やれるかどうか、その邊は頗る疑問である、多分はいくら香料をかけても、揉み上げにしみこんだ煙草の匂は羊肉の匂のやうにぷんと來るであらう。

いさ子ども利鎌とりもち宇野麻呂が揉み上げ草を刈りて馬飼へ

瀧田哲太郎氏

瀧田君はいつも肥つてゐた。のみならずいつも赤い顏をしてゐた。夏目先生の瀧田君を金太郎と呼ばれたのも當らぬことはない。しかしあの目の細い所などは寧ろ菊慈童にそつくりだつた。

僕は大學に在學中、瀧田君に初對面の挨拶をしてから、さつと十年ばかりの間可也親密につき合つてゐた。瀧田君に鮭鮨の御馳走になり、烈しい胃痙攣を起したこともある。又雲坪を論じ合つた後、蘭竹を一幅貰つたこともある。實際あらゆる編輯者中、僕の最も懇意にしたのは正に瀧田君に違ひなかつた。しかし僕はどういふ訣か、未だ嘗て瀧田君とお茶屋へ行つたことは一度もなかつた。瀧田君は恐らくは僕などは話せぬ人間と思つてゐたのであらう。

瀧田君は熱心な編輯者だつた。殊に作家を煽動して小說や戲曲を書かせることには獨特の妙を